みやぎの先人集

未来への架け橋

宮城県教育委員会

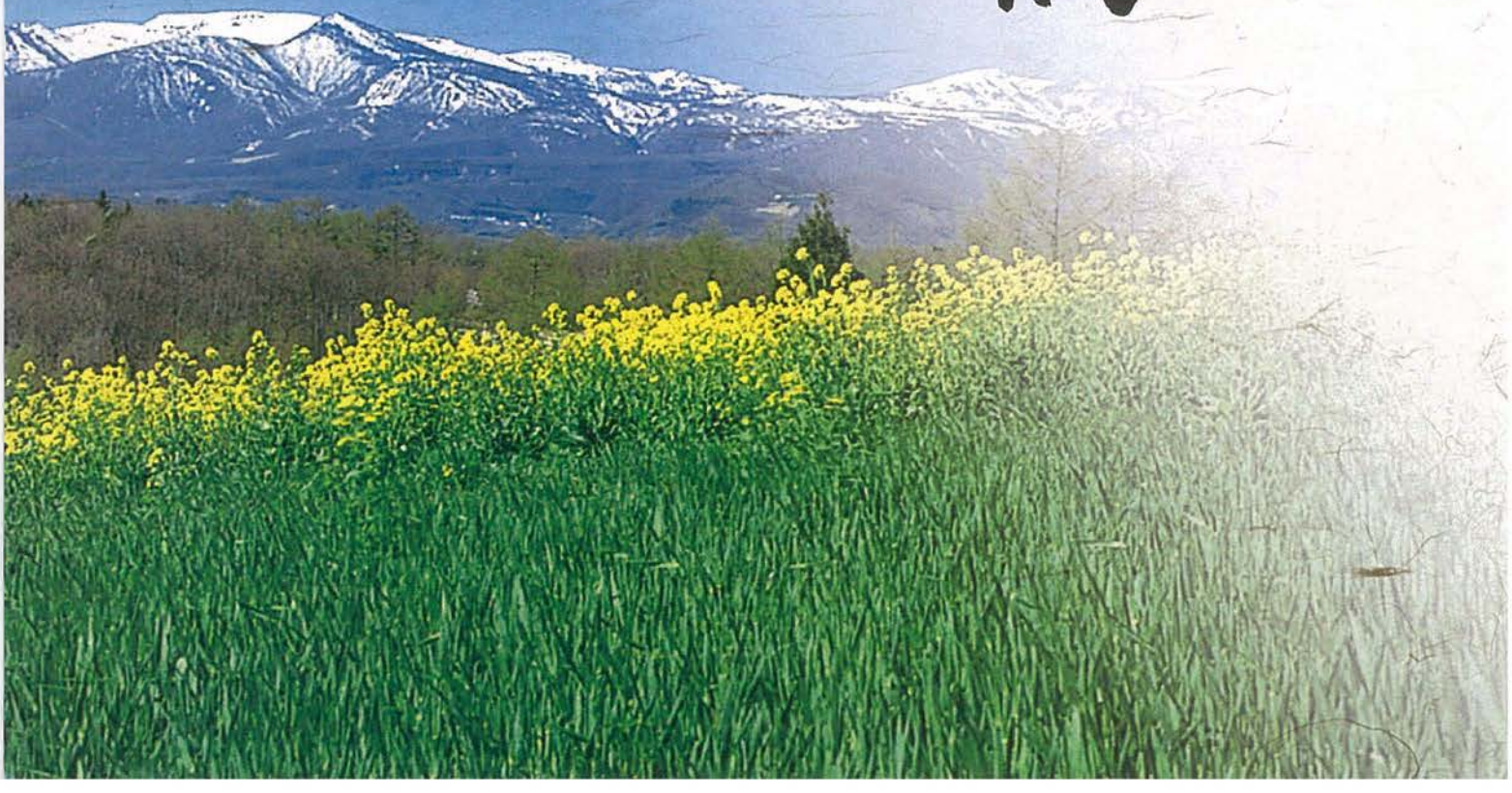
みやぎの先人集

未来への架け橋

みやぎの先人集「未来への架け橋」は、江戸時代や明治時代に活躍した宮城県にゆかりのある人たちの生き方をまとめました。

道徳の時間やそのほかの時間に読んで、先人の生き方に学びましょう。

発展のページには、本文にのっていない先人も紹介しています。興味をもった先人について調べてみましょう。



みやぎの先人集「未来への架け橋」

目次

片平　観平 ―白石の町の水を豊かに― …… 1
櫻井　喜吉 ―わけへだてなく命を救う― …… 5
高山　善右衛門 ―ふるさとに豊かな大地を― …… 9
高山　開治郎 ―桜並木を後世に― …… 13
河村　瑞賢 ―東廻り航路を拓く― …… 19
芦　東山 ―自己の生き方をつらぬく― …… 23
慶　念 ―子どもの幸せを願って― …… 27
鎌田　三之助 ―沼地を豊かな土地に― …… 31
佐々木　君五郎 ―植林を進め、洪水を防ぐ― …… 35
二階堂　トクヨ ―女子体育を広めて― …… 39
川村　孫兵衛重吉 ―北上川の流れを変える― …… 43
大槻　俊斎 ―多くの人に新しい医療を― …… 49
内海　五郎兵衛 ―命と生活の架け橋をつくる― …… 53
及川　甚三郎 ―夢を追い続ける― …… 57
フランク　安田 ―イヌイットを救う― …… 61
秀ノ山　雷五郎 ―小さな体で大横綱に― …… 65

落合直文
―短歌を多くの人に広める―……69
林子平
―志あれば必ず道あり―……75
青柳文蔵
―日本最初の公開図書館をつくる―……79
大槻磐渓
―開国を唱えて―……83
富田鐵之助
―日本の製品を世界へ―……87
一力健治郎
―東北の発展を願って―……91
酒井げん
―女性の美しさを求めて―……95
志賀潔
―赤痢菌を発見する―……99
本多光太郎
―新しい金属をつくる―……103
土井晩翠
―新しい詩の世界を開く―……107

〈読んでみよう〉
伊達政宗
―仙台藩を豊かな地に―……113
支倉常長
―粘り強く役目を果たす―……117
大槻文彦
―本格的な国語辞書をつくる―……121
佐藤清右衛門
―暴れ川と闘う―……125

〈資料〉
発展のページ（みやぎの先人百一人）……129
先人が生きた時代……131

片平　観平　―白石の町の水を豊かに―

今から約二百年前の江戸時代後期、片倉家の治める白石の町は、大雨のたびに白石川が氾濫し、人々は水害に苦しんでいました。

当時白石では、白石川より二十メートルも高い所にあった町の中に水を引くため、川に堰を作っていったん水をせき止め、水位を上げて用水路に流す方法を取っていました。それが、蔵本村大堰です。しかし、その方法は土嚢を積み上げ、くいでとめるといった簡単なものでした。大雨が降ればひとたまりもありません。堰は押し流され、堤防がこわれ、大堰の周りの家や田畑が水びたしになりました。そうなると白石川の用水路しか水源のない下流の町の人々は、毎日の飲み水や洗たくなどの生活用水にも大変不自由しました。

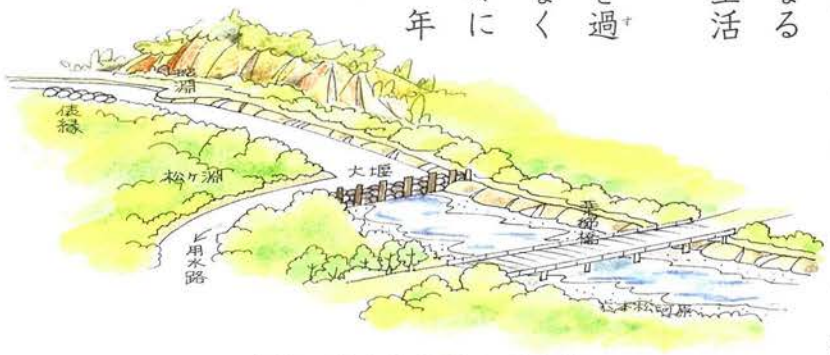
また、いったん火事が起きると消火のための水もありません。人々は不安な日々を過ごさなければなりませんでした。そして、何より農業用水が不足し、農作物もとれなくなってしまいます。凶作が続いたその当時、堰がこわれるということは、白石の人々にとっては、命にかかわる大きな問題でした。しかも、洪水は数年に一回、ときには一年に二度も起こることがありました。そのたび、堰の修理にかり出される人々の苦労も大変なものでした。

「堰がこわれたぞ。」

「また、田んぼがやられてしまう。」

「町にもどろ水があふれてくるぞ。」

その様子を見て、片平観平はつぶやきました。



工事前の蔵本村大堰と用水路

土嚢…土をぎっしりとつめたふくろ。

「また農民がつらい目にあう。」

観平は、片倉家の家臣として産業を盛んにする仕事をしていました。大雨のたびに農作物の不作や、何度もくり返される堰の工事に苦しむ農民の姿を目の当たりにしていた観平は、何とか人々を救うことはできないものかと考えていました。

「大堰ばかりにたよらずに、白石川の水を引くことはできないだろうか。」

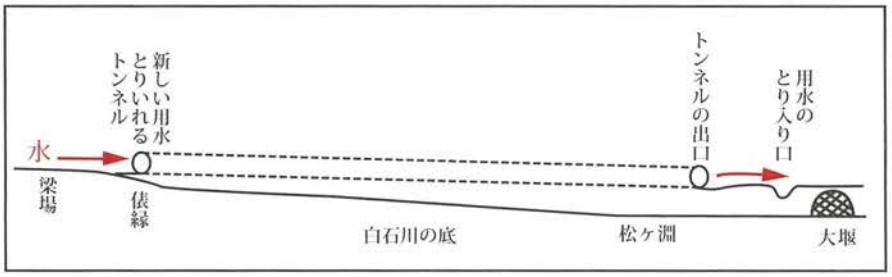
天保元（一八三〇）年、六十歳を過ぎ、すでに隠居の身だった観平は、蔵本村大堰の改修工事をすることを決意し、領主に願い出ました。計画は、当時の大堰の上流にある俵縁から松ケ淵にかけて、白石川の右岸の岩かべに隧道（トンネル）をほり、白石の町に水を引こうとするものでした。隧道があれば、大雨が降っても、大堰がこわれても生活などに必要な水に困ることはありません。しかし、岩をほり進めなければならないその計画は、当時の工事の技術からするとかなり難しいものでした。

また、工事を進めるにはお金が必要ですが、当時の片倉家は財政的に大変厳しい状態にありました。観平は考えこむことが多くなりました。

「資金がないのなら、わたしがお金をすべて出します。ぜひやらせてください。」

と観平は領主に申し出ました。観平は自分の財産を投げうってその費用にあてようと考えたのです。そして、息子の友英とともに工事にあたりました。

機械などまったくなかった当時のこと、槌とのみだけの手作業でほり進める工事は、困難を極めました。また、ほった岩くずを隧道から運び出すことも大変な作業でした。天保二（一八三一）年には蔵王が噴火し、その夏には洪水にもみまわれました。隧道は何度もくずれ、そのたびに工事はやり直しになってし



隧道の横図

隠居…仕事をやめたり、跡取りに家の権利をゆずったりして引退すること。

槌…柄のついた物をたたく道具。

まいました。また、工事に取りかかったころは、東北地方で大飢饉が続いた時期で、飢えで死ぬ人が増え、人口が半分に減ってしまう村が出たほどでした。

「また、飢え死にしたものがでたぞ。」

「食べるものが何もない中で、どうして工事などすることができよう。」

人々はたび重なる災害にうちひしがれていました。食べるものも足りない中では、隧道工事を続けるなど、とうてい考えられない状態でした。工事をする人夫を集められず工事が遅れてしまうこともありました。

「これ以上はとても無理だ。」

「もう工事は中止した方がよいのではないか。」

そうした声が観平の耳に入ってくるようになりました。さすがの観平もしばらく考えこんでしまいました。

（こんなときだからこそ、ここでやめるわけにはいかない。この工事は、白石の人々を救うことになる）

観平はこう自分に言い聞かせました。

観平は、息子の友英と力を合わせてさらに工事を進めていきました。片倉家も領民一人当たり一日二合のお助け米を配り、人夫を集めやすいよう工事の後押しをしました。工事を始めてから十年になろうとしたころには、観平は財産のほとんどを使い切ってしまっていました。それでも借金をしてまで工事を進めました。

ところが、もう少しで隧道が完成するという日、白石はまたしても大雨にみまわれました。

（この大雨でまた隧道がくずれてしまわなければよいが）

飢饉…
農作物が実らず、食物がなくなり飢えに苦しむこと。

二合…
茶わん四はいくらい。

お助け米…
家臣を助けるために、家族の人数によって与えた米。

観平は、気が気ではありませんでした。

翌朝、観平は急いで隧道に向かいました。観平は目を見張りました。大雨で水が勢いよく流れこんだため、なんと隧道が貫通していたのでした。

観平は、しばらく流れこむ水を見つめていました。

隧道の長さは約二百五十間（約四百五十メートル）にもおよぶものでした。着工から十年が過ぎ、観平は七十歳になっていました。

観平は、七十一歳で亡くなりました。観平の偉業は、白石城下の神明社の大鳥居のすぐ左側に建てられた石碑によって、後世に伝えられています。

片平翁の石碑

観平が完成させた蔵本大堰切通トンネルは、白石の人々から親しみをこめられて「切通」と呼ばれています。切通から流れる水は、白石の町の中の水路に引きこまれています。初夏には、この水面に澄んだ清い水にしか咲かないといわれている梅花藻という梅の花に似た、かれんな花が咲いています。今でも年二回の「川干の日」には、観平の志を受けついだ市民の手によって水路のそうじが行われ、きれいな水の流れを守る努力が続けられています。

切通の出口

片平 観平

片平 観平は、江戸時代の終わり、片倉家に仕えた。観平は、水害に苦しむ白石の人々を救うため、私財を投げうって治水工事を行った。その後、十年の年月をかけ苦難を乗りこえて「蔵本大堰切通トンネル」は完成した。地元白石の人々は、これを「切通」と呼び、現在も大切に利用している。

偉業…すぐれた仕事。

後世…後の時代の人。

川干の日…水底の土砂や岩石をさらい、川をきれいにする日。

櫻井　喜吉ーわけへだてなく命を救うー

櫻井喜吉は、槻木村（現在の柴田町槻木）で診療所を開いていました。

ある夜のことでした。

「喜吉先生、開けてください。どうかこの子を、ミヨを助けてください。」

すがりつくようなその声に目を覚ました喜吉が戸を開けると、一人の母親が飛びこんできました。月明かりをたよりにのぞきこむと、背中に小さな女の子をおぶっていました。母親の名はセツ。どうやら、船迫（現在の柴田町）から約三キロメートルあまりの夜道を歩いてきたようです。そのころ、船迫では病気が流行していました。さっそく診察室に招き入れ、横たえたその子の脈をとりました。喜吉は、すぐさま手おくれであることに気づきました。落ちくぼんだまぶた、小枝のようにやせ細った手足、とぎれとぎれの脈。手のほどこしようがない状態でした。

診察の様子を見ていたセツが、

「先生、ミヨは、もう助かりませんか。」

と、不安そうに問いかけました。

「残念だが、もう少し早かったらなあ。」

櫻井　喜吉

その言葉を聞くやいなや、セツは声をあげて泣きくずれました。わが子の名をくり返し呼び続けるセツのさけびにも似た声だけが、静まりかえった部屋中に響き渡りました。そのセツの姿を、喜吉はじっと見つめていました。

そのころの船迫の人たちは、少しでも早く診察を受けたいと思っていても、治療費も薬代もはらう余裕はありませんでした。だれよりも喜吉はそのことを知っていました。そのほかにも、船迫の人々が診察に来られない理由がありました。診療所までの奥州街道は、昼間でもうす暗く、夜になると追いはぎが出る危険な道でした。今でこそ車で十数分の距離ですが、当時の人々にとっては決して楽な道のりではありませんでした。船迫には診療所はありません。このまま村中に病気が広がれば、命を落とす人が増える心配がありました。

「船迫の人たちを救えるのは、喜吉先生しかいない。わたしもできるかぎり協力する。どうか頼む。」

現状を見かねた地元に住む大沼半左衛門と高橋兵十郎が、協力を申し出ました。考えぬいた末に、喜吉は船迫にも診療所を作り、日曜日に診察することにしました。さらに、治療費はすべて無料にし、薬代も喜吉が負担することにしました。こうして、「日曜診療所」が誕生しました。

喜吉はますます忙しくなりました。奥州街道を人力車でかけぬけながら、診察に通い続けました。日曜日が来るたびに、診療所は、喜吉の到着を待ちわびる人であふれかえりました。

「喜吉先生、喜吉先生。吐き気が止まらない。腹も痛くて夜も眠れない。一番にみてもらいたくて、ずっと先生を待っていました。」

追いはぎ…通行人をおそって、衣服や持ち物をうばいとる盗賊。

人力車…人を乗せ、車夫が引いて走る二輪車（現在のタクシーのような役割の乗り物）。

さっそく男を診察してみると、あばら骨が見えるほどやせ細っていました。目もうつろで息も絶え絶えでした。かなり重い病気に違いない。このままほうっておいては命が危ない。喜吉はさっそく薬を用意して持たせ、おかゆも差し出しました。

「本当にいいんですか。」

「安心しなさい。あなたの喜ぶ顔を見ると、わたしも元気が出るのです。」

腰の曲がったその男は、何度も何度も頭を下げながら帰っていきました。

「先生、この子は昨日から体じゅうをかきむしって、とうとう血がにじんできました。何かとんでもない病気かと思うと心配で、心配で。」

「心配ご無用。体をきれいにふいて、この薬草をつけなさい。すぐに治るから安心しなさい。」

喜吉は小さな女の子の手に薬をそっと置き、力強くにぎりしめながら言いました。女の子はにっこりとほほえみ、うなずきました。気がつくと、もう日が沈みかけていました。喜吉はかさつく両手を洗いながら、ふうっと大きく息を吐き出しました。

喜吉が診察した病気は、リウマチなどさまざまな種類にわたっていました。喜吉は昼も夜も夢中で働き、たくさんの人の命を救いました。

「喜吉先生は命の恩人だ。」

「先生、わしにはお金はありませんが、家でとれた大根ならあります。どうかこれを受け取ってください。」

リウマチ…筋肉や関節などに痛みを発する病気。リュウマチともいう。

いつしか日曜診療所には、喜吉をしたう人々が集まるようになりました。わけへだてなく人々の命を救うために全力を傾けた喜吉の姿は、地域の誇りとなりました。明治二十六（一八九三）年から、十一年間にわたって日曜診療所は開設され、診察した患者の数は二千七百人にのぼりました。

喜吉がこの世を去ったとき、人々はとても悲しみました。そして、喜吉の髪の毛をまつろうという声があがり、髪塚として今も船迫に残されています。「一人の命も無駄にしない」という思いを生涯つらぬき通した喜吉の思いや志は、時代を越えて今も語りつがれています。

櫻井喜吉の髪塚（柴田町）

櫻井 喜吉

櫻井 喜吉は、文久二（一八六二）年、槻木村（現在の柴田町槻木）に生まれ、医者として診療所を開いた。また、喜吉は、医者のいない同じ柴田町の船迫地区で、自分の診療所が休みである日曜日を診察日にあて、そこで無料で診療を行った。そして、貧しい人や病気で苦しむ人々を救った。

髪塚…亡くなった人の髪の毛の一部をうずめて石碑を建ててまつったもの。

高山　善右衛門 ―ふるさとに豊かな大地を―

（外交官になるための勉強を続ける道と、角田に帰って家業をつぐ道、どちらを進めばいいのか）

ふるさとをはなれ、東京の大学で学んでいた善右衛門の心には、迷いがありました。角田に帰って家の仕事をついでほしいという父からの手紙が何度も届いていたのです。地主であり町の世話役をし、人々のために働く父の姿を見て育った善右衛門は、その仕事の尊さも、よくわかっていました。しかし、大学で学び続けたいという気持ちも強くなりました。そして、ついに角田に帰ることを決心したのでした。善右衛門が二十二歳のときでした。

角田に帰った善右衛門が見たものは、生活に苦しむ町の人々の姿でした。中でも、人々を悩ませていたのは、水の問題でした。そのころの角田は水に恵まれず、井戸をほってもよい水はなかなか出ませんでした。町場の多くの家では、水売りから飲み水を買って生活していました。農家の人々は、「ため池」から水を引いて農業用水にしていたので、日照りが続くと水不足のために、稲はかれました。田に流す水をめぐって、人々の間には水争いも起こりました。

明治二十三（一八九〇）年、町議会議員となった善右衛門は、どうにかして町の人たちが苦しんでいる水不足の問題を解決したいと思うようになりました。そして、阿武隈川から水を引く計画について真剣に考えました。阿武隈川は、角田の町を流れる大きな川で、一年中、豊かな水をたたえています。ところが、町より低いところを流れているため、川から田畑に水を引くことはできませんでした。そこで用水を作り、土地の高低差を利用して水を流すことを考えました。となりの丸森町の上流から、全長六キロメートルにわたって用水を作る計画は、父の代にも議会で話し合われていました。しかし、

ため池…田畑の水や防火用水などをためておくための池。

用水…飲み水や田畑に引く水、洗濯、防火など生活に使う引き水。

当時の技術では工事が難しく、ばく大なお金がかかるということで実行されなかったのです。善右衛門はくる日もくる日も考え続けました。

善右衛門は、その計画に再び目を向けました。今の技術なら工事が実現できるのではないかと考え、用水について手をつくして調べました。専門家にも相談し、費用の面でも技術的にも工事が可能だという確信をもつようになりました。

（用水を作れば、人々の暮らしはきっとよくなるだろう。工事には多くの費用が必要だが、米がたくさんとれるようになれば、十分返せるはずだ。用水を作ることは、町の発展につながる。わたしは、この用水を完成させるために、自分のすべての力を注ごう）

そう決心した善右衛門は、多くの人に声をかけ、用水工事への理解を求めました。町議会でも、用水の必要性について熱心にうったえました。ところが、工事への反対は大きいものでした。町の人々は、長い間使ってきた大切なため池をなくすことへの反発や失敗したら借金が残るのではないかという不安などを善右衛門にぶつけてきました。

「ご心配はよく分かります。しかし、いろいろな調査を重ねた結果、私は工事の成功に確信をもっています。みなさん、町に用水ができたときのことを考えてみてください。水くみの苦労はなくなります。田畑には、いつでも水が引かれ稲が青々と育つでしょう。使わなくなるため池は、新しい田にすることができます。田が広がって米がたくさんとれるようになれば、暮らしが楽になります。わたしの夢は、角田を豊かな町にすることです。用水は、そのための大きな一歩となることでしょう。」

そんなときでも、善右衛門は自信をもっておだやかに語り続けました。

干拓前のため池の大沼（手前が赤沼）（角田市）

また、善右衛門は、工事の方法や資金について、人々にわかりやすく説明しました。どんな質問にも耳を傾け、ていねいに答えました。話を聞いた人々は、やがて一人また一人と心を動かされていきました。明治三十七（一九〇四）年には、四十三名の会員が集まって『上水期成同盟会』を作りました。

ある日、町長が善右衛門に工事が成功しなかったらどうするつもりかと聞きました。善右衛門はしばらく考えてから、その場合は自分が財産を全部出しておわびをし、町の人たちに負担をかけるようなことはしないと答えました。それを聞いた町長はさっそく議会を開き、ついに工事の計画は議会で認められ、動き出しました。

しかし、明治三十九（一九〇六）年も大凶作に苦しんだ前年に続き天候不順のため、町には食べる物のない人があふれ、重苦しい空気が町全体をおおっていました。善右衛門は、食べ物がない人たちのために、自分の家の米でおかゆをたいて配りました。また、種もみがない人には、山形から取りよせて配りました。

こうした中で、町が大変なときに用水工事どころではないと、計画に反対する者も出てきました。その人々に向かって、善右衛門は言いました。

「今は、食べるものを買うお金がない人に、仕事をあたえることが必要です。工事には、たくさんの人手が必要になります。町の人々が工事現場で働いて賃金をもらえば、生活がきっと楽になるでしょう。今こそ、用水工事を始めるべきではないでしょうか。」

善右衛門のうったえは議会でも認められ、明治三十九（一九〇六）年四月四日、ついに角田用水の工事が始まりました。

工事現場では、五百人以上の人が働きました。手作業で土をほって運ぶ工事は大変なものでした。岩が固くて一日にほんのわずかしか進められないこともありました。途中、作業の困難さから工事期間がのびて資金が足りなくなったとき、善右衛門は、自分の財産を差し出すことを申し出ました。その熱意が議会にも伝わり、予算の追加が決定しました。そして、一年におよぶ工事もついに完成の日を迎えたのです。

凶作…作物のできがとても悪いこと。

天候不順…天候が安定しないこと。

明治四十（一九〇七）年三月二十九日、初めて丸森から角田への用水に水が流されました。たまっていた泥を押し流しながら、勢いよく水が流れました。

「水だ。水が来たぞ。」

待ち構えていた人々は、清らかな水が目の前の堀をいっぱいにして流れていく様子を見て歓声をあげました。肩をたたき合う人、喜びをおさえきれず、水を追って走り出す人もいました。

この日は、午後六時から上水委員や役場職員など十数名が楽隊とともに角田用水の通水を町内にふれまわりました。楽隊に続いて歩いた善右衛門は、用水の流れと町の人々の笑顔を交互に見つめながら、何度もうなずきました。

この後、大沼や赤沼などのため池が干拓され、善右衛門が話していたように豊かな水田に変わりました。角田町は、善右衛門に「上水」の二文字をおくりました。今でも人々は尊敬をこめて善右衛門を「上水翁」と呼んでいます。

上水翁の銅像

高山 善右衛門

高山 善右衛門は、文久三（一八六三）年に角田（現在の角田市）の裕福な家に生まれた。当時の角田は、農業用水としての水不足が深刻な状況であった。そこで、善右衛門は自分のお金を出してでも用水を作りたいという強い意志で工事に取り組み、全長約六キロメートルの角田用水を完成させた。以来、地元角田市の人々は、善右衛門を「上水翁」と呼び、現在でも尊敬している。

高山　開治郎　―桜並木を後世に―

「なんて美しい桜なんだろう。」

蔵王の山々をはるかに望み、白石川沿いに咲きほこる桜の前で多くの人々が感嘆の声をあげ、カメラのシャッターを切る音があちらこちらから聞こえてきます。

仙台から南へ約三十キロメートル。大河原町の中心部を白石川がとうとうと流れます。両岸の堤防には約八キロメートルにわたって桜並木が続きます。毎年、桜の季節になると県の内外からおおぜいの観光客が訪れ、「一目千本桜」の名で東北地方でも有数の桜の名所となっています。

この桜並木は、ある一人の人物の壮大な夢の結晶なのです。その名は高山開治郎。かれは、明治九（一八七六）年四月、江戸時代から続く由緒ある旅館の長男として大河原の地に生まれました。しかし、開治郎が十五歳のとき、父親が亡くなりました。そして、家業の旅館も廃業しなければならなくなりました。まだ若かった開治郎にはどうすることもできませんでした。

明治二十四（一八九一）年、開治郎は十五歳でふるさとをはなれて東京に働きに出ました。これまで何不自由なく暮らしていた開治郎にとって、身よりもなく朝から晩まで住みこみで下働きをする日々はとてもつらく厳しいものでした。いく度となくふるさとの宮城に帰ることを夢見ました。幼なじみの笑顔や生まれ育った大河原の町並み、残雪をいただいた雄大な蔵王連峰、清らかな流れの白石川。いつも思いうかぶのはなつかしいふるさとの景色でした。

白石川の桜並木（大河原町）

（みんなはどうしているだろうか）

しかし、当時、大河原に帰るのは蒸気機関車を乗りついでも二日がかりの長旅です。そんな休みなどを取れるわけがありません。そして何よりも高い切符代をはらうゆとりなど開治郎にはあるはずもありませんでした。

（いつか必ず胸をはってふるさとに帰るぞ。それまでのしんぼうだ）

開治郎は、来る日も来る日も働き、商売の仕方を身につけました。店の仕事が終わると寝る間もおしんで勉学にはげみました。そして苦難の末に会社をおこして成功を収めたのでした。

そのころ、東北地方はたびたび冷害や水害におそわれていました。農民は米の不作に悩み、仙台や福島では米の値上がりに反対して「米騒動」といわれる暴動も起きていました。新聞や手紙で伝え聞くそれらの知らせに、開治郎はもどかしく感じるのでした。

（東京ではこんな豊かな暮らしをしているのに……。何か自分にできることはないだろうか）

開治郎は日々の忙しさに追われながらも、ふるさとの人々の暮らしがとても気がかりでした。大河原をはなれること三十数年。東京で開治郎は新聞社を始めたり画商をしたりと手広く事業を進め、立派な実業家として広く知られるようになりました。しかし、いつも心は宮城に、大河原にありました。開治郎はひとりふるさとの方角の空をじっと見つめるのでした。

そんなとき、以前から進められていた白石川の改修工事が完成するとの知らせが届きました。

高山開治郎

米騒動…米の値段が高くなり、生活に苦しむ人々が米を安くするよう要求して米屋などをおそった事件。

実業家…会社などをつくり経営をする人。

これまで白石川はたびたび氾濫し、そのたびに田畑は流され、家々も大きな被害を受けていました。六年間にもわたる大工事の末、川幅は広げられ堤防が築かれ、水害の心配はなくなったのでした。

「今こそ恩返しをするときだ。しかし、食べ物やお金を寄付したのではすぐになくなってしまう。何かもっと心に残るものを、みんながずっと喜んでくれるものをおくりたい。」

開治郎が住んでいた東京の屋敷の近くには、とても見事な桜並木があり、地域の人々のいこいの場所になっていました。花見の季節には多くの人々が行きかい、笑顔で満ちあふれていました。夏は強い日差しをさえぎり、木かげで楽しむこともできました。人々の暮らしの中にはいつも桜並木がありました。

植樹された桜の若木（大河原町）

「これだ。今わたしにできることは。」

目の前がぱっと明るくなったような気がしました。

大正十二（一九二三）年、四十七歳の開治郎は白石川沿いの桜並木を夢見て、七百本の桜の苗木をおくることにしました。開治郎は東京から二人の植木職人を連れ、地元の職人たちといっしょに現在の大河原町から柴田町の船岡にかけて白石川沿いに植樹しました。そして、桜の苗木が根づいたのを確かめて、昭和二（一九二七）年にも、さらに五百本の苗木を植樹しました。そのときには、柴田農林学校（現在の柴田農林高等学校）の生徒もいっしょに奉仕作業を行いました。

開治郎は、一生懸命若木を植樹する生徒たちを見つめました。

植樹…木を植えること。

こうして、ふるさとを思う一心で、合計千二百本もの桜の苗木を植えたのです。当時のお金で四千円あまりのお金を、町のために差し出したのでした。昭和八（一九三三）年、町は、その栄誉をたたえて、白石川のほとりに「桜樹碑」を建てました。

昭和十七（一九四二）年、開治郎は六十六歳でこの世を去りました。その後、日本は大きな戦争に敗れ、世の中は混乱し、人々は貧しさに苦しんでいました。しかし、人々はふるさとの復興のために努力し立ち直り、見事に発展をとげました。その間も桜は毎年咲き続け、人々に希望と笑顔をあたえてくれたのです。

桜樹碑

桜（ソメイヨシノ）の寿命は約六十年から七十年といわれています。しかし、約九十年たった今も、開治郎の志を受けついだ地域の人々の手によって桜の世話や新たな植樹が続けられ、毎年きれいな桜を咲かせています。宮城県を代表する桜の名所として東北の「桜切手」にも描かれるまでになりました。

今も人々の心に、開治郎の思いが咲き続けています。

高山　開治郎

高山　開治郎は、明治九（一八七六）年、現在の大河原町に生まれた。十五歳でふるさとをはなれた開治郎は、東京で実業家として成功を収めた。開治郎は、ふるさと大河原町の白石川沿いに、多くの桜の苗木を植樹した。この桜は、「一目千本桜」として愛され、現在も大切にされている。

当時のお金の四千円…
当時（大正十年）の大卒初任給が五十円、今の約二千万円ほど。

栄誉……
めいよ。すぐれたものとして認められほめたたえられること。

いにしえより人々を見守る蔵王　先人がつくった風景（白石川と桜並木：大河原町）

河村瑞賢 ―東廻り航路を拓く―

「これで、きっと江戸へ米を送ることができる。」

河村瑞賢は、荒浜（現在の亘理町荒浜）の港に立ち、船を見送りながらつぶやきました。

瑞賢は、元和四（一六一八）年、東宮村（現在の三重県南伊勢町）に生まれました。

十三歳のとき、江戸に出た瑞賢は、工事に使う石や木材を運ぶ車ひきの仕事につきました。仕事のかたわら、沼地を埋め立てたり堀を作ったり石垣を組んだりして町や屋敷ができていく工事の様子を、いつも興味深く見ていました。

二十歳を過ぎたころ、工事をしていた役人から、人足が集まらず工事が遅れがちで困っているので、人足頭をやってみないかと頼まれました。瑞賢は、それまでさまざまな仕事のやり方を見ていて、人足をやる気にさせる方法や仕事の段取りが大切であることに気づいていました。そこで、それを実際に生かしてみることにしました。すると、予定より短期間で工事を終えることができたのです。その後も、仕事を頼まれると確実にやりとげるので、周囲から認められるようになりました。

瑞賢は、これから何が必要になるかをいつも考えていました。明暦三（一六五七）年の江戸の大火のときには、すぐに材木が足りなくなる

人足…力仕事などをする人。
頭は、その中で責任ある人。

と考え、いち早く木曽（現在の長野県木曽地方）まで買いに行きました。そして、材木商として成功したのでした。材木商となってからも、難しい土木工事があると仕事を頼まれました。努力や工夫を重ねて見事に成功させる瑞賢の腕が評判になっていたのです。

やがて、瑞賢は、幕府から大きな仕事を任されることになりました。それは、数万石の奥州の御城米を江戸に運ぶことでした。

「今の海運では、船が難破することが多い。しかも、江戸まで御城米を運ぶのに一年もかかることもある。これでは米が使い物にならない。何とか速く安全に米を運ぶ方法を考えてくれないか。」

と頼まれました。

瑞賢は、原因をつき止めれば、安全に運ぶことが可能になると考えました。そこで、これまでの海運の方法をくわしく調べることにしました。すぐに使用人に、荒浜から房総半島を回って江戸に向かう沿岸の港や道を調べて絵図面にすることを命じました。また、船乗りの話をできるだけくわしく聞くように念を押しました。

調べてみると、これまでは幕府の役人は船問屋を決めたら、その後の仕事は船問屋に任せきりだということが分かりました。

瑞賢は、それまでのやり方を変えるために、幕府が直接船を雇って海運を行うことに改めることにしました。そして、船の操作は風力に頼るものであるため、風や海の流れをよく知る熟練した船頭を選んで乗せることにしました。また、転覆や浸水を防ぐために船の側面に目印をつけ、それをこえて船が沈むほど荷物を積みすぎないようにしました。

奥州…今の東北地方の福島、宮城、岩手、青森の四県と秋田の一部。

石…主に穀物を量るのに用いる体積の単位。一石は（約一五〇キログラム）約一八〇リットル。

御城米…全国の幕府の領地から江戸などに運ばれる年貢米。

難破…暴風雨などにあって船がこわれたり浸水して航行できなくなったり沈ぼつしたりすること。

船問屋…各地の港にあって、港に着いた船の荷物の積みおろしをしたり船員の世話したりする店。

東廻り航路

難しいのは、航路をどうするかでした。瑞賢は船頭たちの話を聞くたびに考えました。そして、房総半島に近づいたとき、砂浜の海岸や海中に岩場がたくさんある所で難破することが多いということがわかりました。

ある船頭から、

「房総半島で大風にあい、岩場に流されそうになって必死に帆を使ったのです。すると大島（現在の東京都大島町）が見えてきて、やっとの思いでたどり着いて、助かりました。その後、南西の風に乗ったら、苦もなく江戸に着いてしまいました。」

という話を聞きました。瑞賢はこれだと直感しました。

こうして、房総半島から江戸湾に直接入らず、伊豆大島や神奈川県の三崎、静岡県の下田に行ってから、南西風を待って引き返し、江戸湾に入るように航路を決めたのでした。また、瑞賢は、安全で確実な航行を行うために途中の寄港地を定めて浦役人を置き、水先案内人を配置して、船や荷物を管理しました。また、天候や風向き、潮の流れの情報を陸と船の間で伝え合うことにしました。

航路が決まると瑞賢は、江戸廻米の起点となる阿武隈川河口の亘理町の荒浜港へ向

浦役人…御城米を江戸におくるために米の保管をしたり、港の管理をする役人。

廻米…江戸時代、多量の米を一地点（おもに生産地）から他の地点（大坂、江戸などの大市場）に輸送すること。

武者惣右衛門屋敷近くの瑞賢堀（昭和初期）（千葉宗久氏蔵）

かいました。廻米に以前からかかわっていた浦役人の武者惣右衛門の屋敷を宿にして、阿武隈川の上流の信夫郡や伊達郡（現在の福島市周辺）までの川の流れを調べました。阿武隈川の急流をゆるやかにするために岩を取りのぞいたり船が通る水道をほったりしました。そうして、御城米を安全に運ぶことができるようにするとともに、阿武隈川の河口の整備も行いました。さらに、荒浜には御城米を保管しておく米蔵を建て、米蔵から船で米倉庫まで運ぶ堀（瑞賢堀）を作りました。

準備は整い、寛文十一（一六七一）年に荒浜から廻米船が出航しました。荒浜港を起点としたその船は、信夫郡や伊達郡などの奥州の米を阿武隈川と東廻り航路を使って大量に江戸に送ることに初めて成功しました。

その後、東廻り航路は仙台藩の米を大量に江戸に運び、大きな利益を生み出しました。また、石巻や塩竈などの港もこの航路の拠点として発展し、太平洋側の沿岸地域の物資の輸送と人や文化の交流に大きな影響をあたえることになりました。

河村 瑞賢

河村 瑞賢は、元和四（一六一八）年に東宮村（現在の三重県南伊勢町）の農家に生まれた。その後、江戸（現在の東京）で材木屋を営んだ。瑞賢は、江戸幕府の依頼を受けて阿武隈川の水運を切り開き、物資を江戸まで輸送する東廻り航路を切り拓いた。この航路は、物資の輸送に要する時間と費用を大幅に減らした。

芦東山 ―自己の生き方をつらぬく―

芦東山は、江戸時代に生き、『無刑録』という刑法の本を完成させた人です。

東山は、元禄九（一六九六）年、岩手県の渋民村（現在の一関市）で生まれました。

東山の家は、父も祖父も肝入りという村長のような役目をしていました。小さいころから学問にはげみ、農民の出身でありながら、十九歳で番外侍として仙台藩の武士に取り立てられるとともに、二十六歳で儒学者として仕えるようになりました。

東山は、学問にすぐれているだけではなく、儒教の教えに基づいて藩にとってためになることを考え、意見を述べる人でした。当時は、自分よりも身分が上の人に対して意見を言うことは難しいことでした。そのため、身分が上の人と異なる考えを述べる人はほとんどいなかったのです。しかし、東山だけはちがいました。それこそが儒官としての自分の役目だと考えていたのです。

芦　東山（芦東山記念館蔵）

東山は二十七歳のとき、藩主の伊達吉村公にあてて意見書を出しています。それには、儒学の勉強をしっかりすることや学問にすぐれた先生を採用すること、殿様への意見は聞き入れるべきこと、藩の学校を建ててすぐれた人を育てることなど、藩主としてやるべきことが書かれていました。

一方、東山は儒学者としての学問を続けながら、医学や薬草の勉強、冷害を乗り切る方法などを学んでいました。それは肝入りの家に生まれ、小さいころから農民の苦労を見て育ってきたからでした。さらに、祖父の白栄は、孫の東山には農民の苦しい生活を少しでもよくし、ふるさとのために役立つ人になってほしいと願っていました。東山は儒学者として活躍するようになってからも祖父の願いを決して忘れることはありませんでした。

儒学者…孔子の思想をもとにした中国古代からの伝統的な学問の研究を仕事にしている人。

儒官…儒学を教える仕事の役人。

四十三歳のときに、順調に歩んできた東山の人生に苦難のときが訪れます。

仙台藩が学問所を建てることになったときに、東山は自分が考えていた案を出しました。これまでは、父親の身分の順に子どものすわる順番が決められていました。このことについて、目上の人を尊重する考えの東山は、「学生の席順は、親の身分ではなく、年齢の順にすべきである。」という意見を出したのです。しかし、東山の出した案は通ることはありませんでした。それからしばらくして、東山のもとに評定所から呼び出しがきました。

「東山に、石母田家預けを言いわたす。」

石母田家預けとは、「他人預け」という刑罰で、仙台藩の役人石母田氏に東山の身柄を預け、屋敷に閉じこめ自由な行動ができないようにすることでした。東山が自分の考えを変えようとせず、意見をおし通そうとしていることがその理由でした。何らかのとがめがあるかもしれないとは思っていたものの、予想以上に厳しい刑でした。しかし、東山は、

「はい、わかりました。」

と静かに返事をすると、宮崎（現在の加美町宮崎）に旅立つ準備にとりかかりました。妻も、少しもあわてることなく、小さい二人の子どもと手伝いの者を連れ、宮崎へと向かったのでした。

宮崎での東山の住まいは、何人もの役人によって一日中監視されていました。そのうえ、筆や硯を使うことさえ禁止されました。ようやく、筆を使う許しがでると、東山の部屋には一晩中明かりがともることが多くなりました。

やがて、宮崎に厳しい冬が訪れます。静まり返った村には、ヒューヒューと風の音だけが鳴りひびきます。薬莱山からふき下ろす冷たい雪混じりの風は、家の中にすき間風となって入りこみ、するどくはだをつきさすようでした。あまりの寒さに筆を持つ手もかじかみました。しかたなく東山は、部屋に和紙をはりめ

評定所…仙台藩の最高司法機関。

石母田家…伊達家の家臣

宮崎（加美町宮崎）をおさめていた。

とがめ…罰とされること。

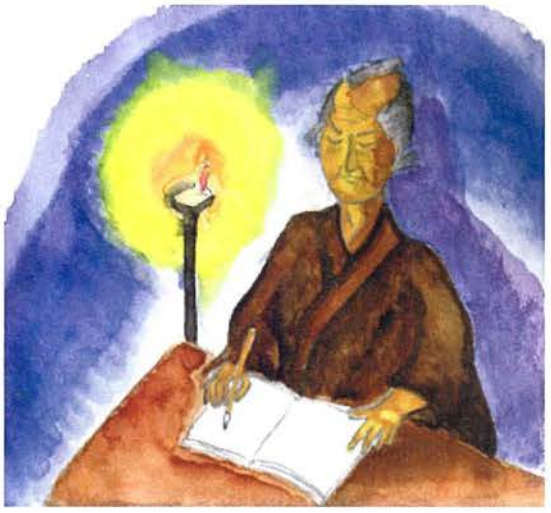
薬莱山…加美富士ともいわれている。冬の薬莱おろしは、地吹雪をおこすほどの強い風が吹く。

ぐらせて、寒さをしのぎました。そして、

「そうだ、今だからこそできる。今だからこそ。」

とつぶやくと、一心不乱に刑法の本を書き進めました。

東山は、宮崎に来てからわずか半年後には、『無刑録』という刑法の本の作成に取りかかっていたのです。今は石母田家預けの身、何かと不自由ではあるが、幸い時間だけは自由に使うことができると、何度も自分に言い聞かせていたのです。仙台藩の儒官として仕えていたころは、藩の仕事で忙しく、刑法の本の作成に取りかかることができずにいたのでした。刑法の本を書くことは、東山が師として最も尊敬していた江戸の学者である室鳩巣からすすめられていたことでもありました。東山はこのような立場におかれても、儒学者として果たすべき自分の役目を忘れなかったのです。



その後、東山は十七年かかって、ようやく『無刑録』十八巻を完成させました。東山はその中で、すべての人間に刑罰がなくても犯罪が発生しないような理想の社会を求め「罪人をよりよい道に導く刑にすべきである」ことをうったえています。東山は、すべての人間にはもともと善の心があり、罪を犯してしまった人に対しても厳しい罰を課すのではなく、教え導くことによって善の心をもって行動する人間にすることができると考えていました。

東山が『無刑録』を完成させるためには、仙台藩の龍宝寺（仙台市）が持っている書物で確かめる必要がありました。東山は、何度も願い書を出し、やっとのことでお寺の大切な書物を貸し出してもらうことができました。そして、ついに東山は『無刑録』を完成させたのでした。

刑法…犯罪と罰についてきめた法律。

善…よいこと。

東山が「他人預け」を許されたのは、宮崎で十九年間、高清水（現在の栗原市高清水）で四年間の計二十三年間にわたる幽閉生活の後でありました。そのとき東山は六十六歳。許しを得て浪人となった東山は、ふるさとの渋民村に帰りました。それからというもの、東山の家の前は訪れる人で毎日いっぱいになりました。東山は、学問を教えてほしいという人には、たとえ貧しい人であっても、わけへだてなく教えました。また、病人に対しては薬草を調合してあたえるなど、忙しく毎日を送っていました。

東山は、ここでも自己の生き方をつらぬき通し、八十一歳の生涯を静かに終えたのでした。

『無形録』（芦東山記念館蔵）

明治時代になると、政府はフランスの刑法を手本にして日本の刑法を作ろうとしました。そのとき、日本にすでに刑法についてすばらしい考えをもっていた人物がいたことがわかったのです。それが東山でした。政府は『無刑録』の価値を認め、元老院という国の機関から出版しました。

東山が亡くなってから百一年目のことでした。

芦 東山

芦 東山は、元禄九（一六九六）年に、渋民村（現在の岩手県一関市渋民）に生まれた。仙台藩の儒学者として勤め、室鳩巣のすすめを受けて、『無刑録』を書き著した。『無刑録』は、人間愛の精神をもって人に接し、教育によって刑罰のない平和な世の中にすることを説いたものであり、近代刑法の参考資料となった。

幽閉…他の人と会わないようにとじこめること。

浪人…藩から給料をもらえず、藩の武士でなくなること。

慶念 ―子どもの幸せを願って―

慶念は、江戸時代の末期から明治の初めにかけて、涌谷町に住み、命の尊さを唱え続けた僧です。小太りのがっちりした体格で、うれしいときは大きな鼻をひくひくさせながら満面に笑みをうかべて喜びました。ぜいたくをきらい、貧しい身なりをしていたので、「ほいと坊主」と呼ばれていました。僧侶でありながらに、寺に住まず各地を転々としていました。食べ物も粗末なものを好んで食べ、飢えをしのげればよいと考えていました。着物をあたえようとする人があっても、

「もったいない、もったいない。」

とお礼を言うだけで受け取りませんでした。

いつも時間があれば説法をするために歩き回っていました。

田んぼで草取りをしている人がいれば、

「わたしの手伝った分だけ休んで、わたしの話を聞いてくれ。」

と言って、草取りを手伝い、農夫たちを前にして説法をしました。

慶念は、小さな命を大事に考えていました。畑を作るために、山地の草を焼くときは、

「ごめんなされ。ごめんなされ。」

と、額を地面にすりつけて、焼かれる虫にしきりにあやまったといわれています。

慶念は、子どもが好きでした。あるとき、子どもたちが出来川で魚とりをして遊んでいました。慶念は、子どもたちが道ばたに投げ捨てた小さな魚の前にかがみこみ、一匹一匹拾って川に返してやりました。しかし、子どもたちをしかることはありませんでした。

説法…仏教の教えを聞かせること。

慶念は、山口村（現在の岩手県北上市）の羽黒山一帯の山を管理する裕福な家の次男として生まれ、名前を長兵衛といいました。成長した長兵衛は、兄とともに木材を売るなど仕事にはげんでいました。

江戸時代の末期は、天候不順や洪水などの大災害が何度も起きました。冷夏と害虫の発生により、田畑は大きな被害を受けました。そのため、農作物の収かくが激減し、飢えに苦しむ人や病気にかかる人が増えました。食べるものがなく、命を落とす人も少なくありませんでした。天明（一七八二年）の大飢饉のころは、赤ん坊が生まれても育てることができず、泣く泣く手放す者もあらわれました。赤ん坊の亡きがらが、川に投げ捨てられるというひどい話もあったようです。苦しみに耐えかねて、打ちこわしや一揆を起こす民衆も増えました。心を痛めた長兵衛は、念仏を唱える集会に参加するようになりました。しかし、心は満たされませんでした。長兵衛は、自分ができることは何かと毎日悩むようになりました。そして、とうとう決心しました。

「家を出て僧になろう。仏の道を説くことで皆を救いたい。尊い命を救いたい。」

周囲は反対しましたが、長兵衛は仙台に出て僧となり、名前を「慶念」と改めました。その後、西国（西日本）へ向かい数年間修行を重ね、涌谷の地にたどりつきました。

慶念は、毎日毎日、朝から晩までひたすら村々を巡り歩き、人々に命の大切さを説きました。赤ん坊を手放そうとする家があることを知ると、思いとどまらせようと、自ら訪ねていきました。

「人が人であるための正しい道がどうしてわからぬか。」

と声をからし、顔を真っ赤にして教え歩きました。

しかし、そんな慶念の努力を踏みにじるように、ひそかに赤ん坊を手放してしまう家もありました。

赤ん坊が生まれたと聞いてその家を訪ねてみると、すでに赤ん坊はいませんでした。帰り道、慶念は体中から力がぬけ、道ばたにひざまずいてしまいました。胸がしめつけられるように痛みました。心の底からわき上がる悲しくやるせない感情を押さえることができず、目の前の小川に張った分厚い氷を割ろうと拳を振り上げました。

天明の大飢饉…江戸三大飢饉のひとつ。日本各地で餓死者を多数出した。

打ちこわし…ふつうの人たちが金持ちや役所などをおそうこと。

一揆…農民が支配者を武器をもっておそうこと。

が、すんでのところで思いとどまりました。氷の下で何かが動いたのです。よく見ると、一寸ほどの小魚でした。慶念は、四つんばいになり、懸命に生きる小魚たちをしばらく見つめていました。

やがて、慶念は足下の根雪を両手ですくい、ごしごしと顔をこすりました。慶念がすくった雪の下から、細い草の芽がのぞいていました。慶念は、小魚たちに微笑み、細い草の根にそっと触れ、天を仰ぎ大きく深呼吸をしました。

隣村に、善助とおとよという夫婦がいました。大変貧しく、二人で生きていくのがやっとでした。その夫婦に赤ん坊が生まれると聞いた慶念は、心配になって善助とおとよのもとに走りました。

慶念は荒い息を整えながら、畑に出ている善助に声をかけました。

「善助さん、もうすぐ生まれるなあ。」

善助は、ゆっくりと振り向きましたが、慶念だとわかると激しくうろたえて視線をそらしました。

慶念は、静かに言いました。

「善助さん、おとよさんと相談してほしい。赤ん坊を育てられないのなら、わたしがもらって育てたい。」

赤ん坊が生まれたのは、翌朝でした。

善助は、布切れに大事そうに赤ん坊をくるんで、

「男の子です。どうか、どうかお願いします。」

と言って慶念に手渡しました。そのとき、家の中からおとよの泣きさけぶ声が聞こえました。善助も、肩をふるわせていました。

慶念は、肩をふるわせる善助と小さな赤ん坊を抱きしめました。

「この子は、わたしが大切に育てます。ありがとう、ありがとう。」

と言いました。そして、大きな鼻をひくひくさせながら、赤ん坊ににっこりと語りかけました。

「名前をつけなければのう。わたしの新しい道の始まりだ。そうだ、『はじめ』がいい。どうだ、『はじめ』。よい名

一寸…約三センチメートル。

がついたぞ。うんうん。」

慶念は、赤ん坊の小さな桃色のほっぺに自分のほっぺをくっつけました。そして、しばらく赤ん坊のほほの温かさを感じていました。

赤ん坊を背中におんぶして、お乳をもらえる農婦を訪ね歩く毎日が続きました。また、命を落とす赤ん坊がいないかと、山野を歩き回りました。さらに、説法を唱え歩くことも忘れませんでした。寺でお経を唱える坊主ではなく、自ら野を巡り、赤ん坊を育てながら雨の日も風の日も説法を続ける姿は、やがて多くの人々に「生きる」希望をあたえるようになりました。慶念のもとには、一人また一人と赤ん坊が預けられました。慶念の信者によって阿弥陀堂が建てられましたが、この阿弥陀堂には、常に、二、三人の赤ん坊と四、五人の幼子がいたそうです。男手一つで赤ん坊を育てることはたやすいことではありません。しかし、慶念に迷いはありませんでした。寝る間もおしんで赤ん坊に飲ませるお乳をもらい歩き、幼子の食べ物や着物をそろえるためにあちこち走り回りました。赤ん坊がいない家で、ほしいという家があれば、慶念のもとで育てた赤ん坊を預けました。一度は手放した家でも、やはり引き取りたいと願いがあれば、喜んで赤ん坊をもどしました。ひとえに、子どもがすこやかに生き続けることだけを願っていたのです。

慶念は、五十二歳の生涯を閉じるまでの間に、五十三人もの赤ん坊の命を、救い育てたといわれています。

阿弥陀堂…仏様をまつった建物。

慶念

慶念は、文政三（一八二〇）年に山口村（現在の岩手県北上市）に生まれた。天災や飢饉により暮らしが苦しく、赤ん坊を手放そうとする人々から、赤ん坊をもらい受け、五十三人もの赤ん坊の命を救い育てた。慶念は、この世に生きるものすべての命の尊さを身をもって示し続けた。

鎌田　三之助　―沼地を豊かな土地に―

鎌田三之助は、文久三（一八六三）年、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に、大地主だった鎌田家の次男として生まれました。

そのころの村では、雨が降り続くと品井沼の水があふれて洪水となり、稲穂が水浸しになって収穫できなくなることがしばしばありました。そのため、「三年に一度しか米が取れない」といわれるほど、貧しい村になっていました。

三之助の祖父玄光と父三治は、水害に苦しむ村の人々を救うために、品井沼の排水路の改修を進めていました。そんな祖父や父の姿を見て育った三之助は、いつも品井沼の工事のことを考えていました。三之助が十四歳のとき、亡くなる間際の祖父から、

「自分の食べるものや着る服の心配をするより、まず、品井沼の心配をしなさい。」

と言われました。その言葉を聞いた三之助は、父といっしょに祖父の思いを引きつぐことを決意しました。

鹿島台小学校に建つ三之助像

十五歳になった三之助は、軍人をめざして勉強をするために東京へ行きました。しかし、病気のために軍人になることをあきらめ、政治家になることにしました。品井沼の干拓工事を進めるためには、多くの費用と人手が必要になります。そこで、政治家になれば費用や人手を集めやすくなると考えたのです。東京で五年間勉強し、村にもどった三之助は、父を助けて品井沼の干拓工事に打ちこみました。

三之助は、品井沼の干拓工事に情熱を注ぐと同時に、医療や教育にも力を入れました。そのころ、村では天然痘

干拓…沼や湿地から水をぬき、田畑などにすること。

という病気が流行しましたが、村には医者がいませんでした。さっそく、薬を購入して村人に配ったり栃木県から医師を招いて医院を開かせたりしました。また、村の青年たちに勉強を教えることにも時間を費やしました。そのため、三之助は、多くの村人から信頼されるようになりました。その後、三之助は志田郡議会議員や宮城県議会議員になりました。明治三十五（一九〇二）年には、三十九歳で国会議員になりました。三之助が東京で議員の仕事をしている間も、品井沼の干拓工事は続けられていました。

四十三歳になった三之助は、村人といっしょにメキシコに渡って移民事業に取り組み始めました。その矢先に、県令（県知事）から電報が届きました。品井沼の工事をめぐって、賛成する村人と反対する村人が対立しているので村にもどって来て、村人たちを説得してほしいという内容でした。

村にもどってみると、村は賛成派と反対派に二分され、工事も中断していました。三之助が村をはなれている間にも洪水などの被害にあい、村人たちのまとまりがなくなっていたのでした。

「メキシコでもわたしがもどってくるのを待っている人たちがいる。」

決心しかねていた三之助は、

「メキシコにはあなたの代わりをする人がいるはずです。でも、この村にはあなたが必要なのです。」

という母の言葉に後押しされました。品井沼の干拓は、祖父や父の願いでもある。何よりも自分自身がふるさとを豊かな村にすることを願っていたはずだと、改めて品井沼の干拓工事に全力を注ぐことにしました。

それからの三之助は、反対している村人の家を一軒一軒回り、説得しました。長い間、品井沼の洪水をどうすることもできずにいた村人たちは、すぐには三之助の話に耳を傾けませんでした。

「品井沼の水をぬくなんて、無理な話だ。」

「荒れ狂う自然の力を、人の手で防ごうなんてばかげている。」

天然痘…ウイルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気にかかって亡くなる人が多かった。

移民事業…日本人が外国に移り住んで、働くことを進める事業。

「そんな工事などできはしない。」

それでも三之助は、めげることなく、雨の日も雪の降る日も、一軒一軒訪ねて回りました。

「わたしたちは百年もの間、品井沼の洪水に苦しめられてきたのです。」

「この工事をやりとげなければ、これまでの努力がむだになるのです。」

「一時の苦しみに耐えないで、これから先も苦しみ続けることはおろかなことです。」

三之助は、言葉をつくして説得しました。どんなにののしられてもかげ口をたたかれても、決してあきらめませんでした。そんな三之助の熱意が、反対していた村人たちの気持ちを少しずつ変えていきました。一人、また一人と、三之助の説得に応じる村人が増え、ようやく工事が再開されました。三之助の心にまた灯がともりました。

工事を進めるかたわら、多くの村人の強い願いに応じて、三之助は、四十六歳で村長になりました。村長になるにあたり、村人たちに向かって、

「村は今、貧乏のどん底にある。ほかの町や村と同じようにするには、生やさしい覚悟ではいけない。明日といわず、今日からすぐに村を建て直さなければならない。たとえ一人の力は弱くとも、村民一体になって努力すればできることを信じてほしい。ぜいたくやむだづかいをやめ、一生懸命に働いてほしい。」

と呼びかけました。その翌日から、三之助は自分からお手本を示すために、ひげをそり、つぎはぎだらけの衣服を身につけ、わらじをはいて仕事をするようになりました。村長になってからの三十八年間、三之助は無報酬をつらぬき通しました。

そんな三之助や祖父の時代からの鎌田家三代の思いが村人にも通じて、品井沼の工事は以前にも増して、熱が入るようになりました。

三之助が村長になった翌年には、品井沼の干拓工事が進み、新しい排水路が完成しました。明治四十三年十二月二十六日に、その完成を祝って通水式が行われることになりました。三之助はいつものように、つぎはぎだらけの衣服にわらじ姿で、出かけようとしていました。すると、

「三之助、今日のお祝いはあなた一人のものではありません。祖父や父も連れていきなさい。」

と母から、諭すようにゆっくりと言われ、祖父と父の位牌を手渡されました。はっとした三之助は、思わず板の間に頭をすりつけて、何度も何度も母に謝りました。通水式の準備に心を奪われ、祖父や父を式典に連れて行くことを忘れていたのでした。

通水式には、県令をはじめ千人あまりの人が参加し、品井沼の排水路の完成を祝いました。通水と同時に、一瞬、会場は静まりかえりましたが、すぐに涙を流したり両手を挙げて喜んだりしている人であふれました。

通水式が終わって、三之助は船に乗り品井沼から排水路を通り、お祝い会場の松島へ向かいました。三之助は、祖父と父の位牌を背負いながら、勢いよく流れる水を、じっと見つめ続けました。

鹿島台町では、今でも三之助の偉業をたたえるために、「わらじ祭り」が行われています。

村長時代の鎌田三之助（鎌田三之助記念館蔵）

鎌田 三之助

鎌田 三之助は、文久三（一八六三）年に、木間塚村（現在の大崎市鹿島台）に生まれた。鹿島台村長として、品井沼干拓事業に力を注いだ。そまつな身なりでわらじをはいて村のすみずみを回り、郷土の発展のために一生をささげ、その姿から、「わらじ村長」として人々から尊敬と信頼を集めた。

諭す…本人がわかるまでゆっくり教えること。

位牌…先祖の戒名などが書かれた木の札。仏壇に供えてあることが多い。

偉業…世間の多くの人から認められるような仕事ぶり。

佐々木　君五郎　―植林を進め、洪水を防ぐ―

君五郎（幼名保吉）は明治六（一八七三）年、古川の呉服商の家に生まれました。保吉は子どものころ、江合川の堤防が切れ、田畑や民家が大きな被害を受ける様子を目にしました。そのすさまじさは心に強く焼きつけられ、どうにかならないかと考えるようになりました。そして、堤防を高くするだけではなく、江合川の上流の山に木を植えれば木々の根が雨水を蓄える。そうなれば、水が一気に川に流れこまないようになり、洪水を防ぐことができるのではないかと考えるようになりました。保吉がこのように考えるようになったのは、山地を開墾して果樹園を作った父の影響も少なからずあったようです。

佐々木　君五郎

保吉は、十六歳のころから家の仕事を手伝い、江合川の上流の町や村へ呉服の行商に出かけていました。十八歳になった保吉はいつものように番頭を連れ、鬼首へ行商に行きました。その晩は近くの農家に泊めてもらいました。夕食後、その家の主人とよもやま話をしているときに、山が売りに出されているから買わないかという思いがけない話をもちかけられました。その日の売上金八十数円を持っていた保吉はすぐにその話にとびつき、こう言いました。

「よし買おう。ところで、いくらで売りに出ているんだい。」

今度は主人がおどろきながら、

「ほ、本気かい。何でも八十円だそうだが。」

呉服商…衣類などを売る商売。

行商…直接、家々をまわり、食品や生活用品などを売ること。

番頭…商店のやとわれている人の一番上の人。

よもやま話…世間話。

当時の八十円…現在の百六十万円ぐらいの価値。

と言いました。話はとんとん拍子に進み、売り主を訪ねた保吉はその晩のうちに山を手に入れました。

古川の家へもどり、集金したお金で山を買ったことを報告すると、

「なにっ、売上金で山を買っただと。相談もなく勝手なことを……。どうせ、だまされたんだろう。」

と、父親は大声でどなりました。保吉は自分の考えを熱心に語りましたが、父親には聞き入れてもらえず、ついには勘当を言い渡されました。保吉はがっくりと肩を落としました。目の前で腕を組んでそっぽを向いている父親におじぎをして、うつむいたまま家を出て行きました。

勘当された保吉は、東京の時計屋で働くことになりました。しかし、保吉は一時も自分の思いを忘れることはありませんでした。ひまさえあれば林業に関する本を読みふけっていました。ちょうどそのころ、東京大学の本多静六博士の「治水済民」の話を聞く機会を得ました。講演会に参加した保吉は、じっと博士の話に聞き入りました。木を切りすぎたり焼畑農業を行ったりして、山が荒れてしまった地域がある。山が荒れると土の保水力が弱まり、洪水などの大災害が起こる。山林を守り木を育てることが川を治めることにつながり、水害から人々を救う方法になるという、本多博士の話は、保吉のこれまでの考えを強く後押しするものになりました。

保吉は目をかがやかせ、自分が進むべきこれからの道について考えました。

東京での生活が六か月をむかえ、十九歳になったころ、母の説得や家の商売が人手不足になったことを理由に勘当は解かれました。このとき、保吉は名を

勘当…親の意にそぐわない言動に対してしかられ、親子の縁を切ること。

「治水済民」…植林などをして山を整えることで河川の氾濫を防ぎ、洪水の害から人々を救うこと。

焼畑…草地や林などで、雑草・雑木を焼き、その焼跡にそばやひえ、大豆などを蒔きつける畑。

君五郎と改めました。帰郷後は呉服商をやめて時計屋を開業し、そのもうけたお金で山林を少しずつ買い集めました。

君五郎が二十一歳のとき、時計屋をやめなければならなくなりました。父親が友人の借金の保証人となったことから、友人に代わって多額の借金を返さなければならなくなったからです。

それを境に、君五郎は自ら山に出向き本格的に植林を始めました。二、三人をやとい、苗木を植える作業に集中し、気がつくと日が暮れていることもありました。あるとき、苗木を植えること自体を理解できないやとい人が、

「こんな木を植えるんですか。いったい、何のために。」

と、納得のいかない表情でたずねたことがありました。しかし、君五郎には植林することの大切さを説明する余裕はなく、早く植えたい一心から、

「いいから、だまっておれの言う通りに植えろ。」

と、強い口調で命じたこともありました。そのため、

「佐々木屋の若だんなは頭が変になった。山に木を植えている。」

と村人のうわさになりました。また、わざわざ植林した山を見物に来る者もいたりしました。そのころ、自然に木が育っている山に木を植えるという考えは、受け入れられていなかったのです。ただ一人の理解者は父親だけでした。以前、勘当まで言い渡した父親でしたが、何があっても変わることのない君五郎の強い思いを知り、心から応援するようになっていました。このことが、君五郎の大きな支えになりました。

その後も、植えた苗木に肥料をやっただけでうわさになり、温泉の湯治客までがこの山を見に来ることもありました。君五郎はそんなことなどまったく気にせず、山が売りに出れば買い、杉の苗を植え続

湯治客…温泉宿に宿泊などにきた客。

けました。植林が進めば進むほど苦難も増えました。多くの人をやとうためには、これまで以上にお金が必要です。家賃や小作料だけの収入では、どこにも足りません。ときには家財を差し押さえられることもありました。また、君五郎の住んでいた古川と植林した鬼首などへの行き来にも苦労しました。今なら車で一時間半の道のりですが、当時は行くだけで半日かかりました。さらに植林をすると二泊三日の行程になることもありました。しかも、苗木を背負っての山越えの苦しさは、想像を絶するものがありました。それでも、君五郎は鬼首や鳴子、川渡、中山平など江合川の上流域に次々に山を買い求めました。

君五郎は植えた木の様子を確かめるために、久しぶりに山に登ると、眼下に広がる江合川が見えました。おだやかに流れる江合川を見て、君五郎は目を細めました。

君五郎は生涯、初心をつらぬき、杉などの針葉樹約二百万本を植えて山を守りました。森林の大切さを子どもたちに教え、「学校植林の育ての親」とも呼ばれるようになりました。昭和二十八（一九五三）年、財団法人「佐々君治山報恩会」を設立し、所有する山林五百二十二ヘクタールと七千五百立方メートルの美林のすべてを、この会へ寄付しました。君五郎は昭和四十（一九六五）年に九十二歳でこの世を去りましたが、その志は、今も財団の充実と発展のために受けつがれています。

佐々木 君五郎

佐々木 君五郎は、明治六（一八七三）年に、現在の大崎市古川の呉服商の家に生まれた。江合川の洪水を防ぐため、植林による治水の必要性を説き続けた。資金難や作業の困難さを乗り越え、「自分がこの世に生を受けたのは治山治水のため」という信念で事業に取り組んだ。そして、江合川上流におよそ二百万本の杉を植林した。

小作料…地主から土地を借りて農作物などを育てた人（小作人）が、土地を借りた分について払うお金など。

家財…家具などの家にある財産。

針葉樹…杉や松など、一年中、葉が緑色の木。

美林…美しい林。ここでは、背丈が高くりっぱな木々が生えている林。

二階堂　トクヨ　―女子体育を広めて―

教え子と二階堂トクヨ
（学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵）

明治三十七（一九〇四）年、二階堂トクヨは、希望に胸をふくらませ、石川県立高等女学校に着任しました。しかし、体育を教えることを命じられ、大きなショックを受けました。学生時代、和歌と読書に夢中だったトクヨは、大好きな国語を教えることを楽しみにしていたからです。号令に合わせてただ体を動かす体育は、トクヨが一番きらいな教科でした。

しかし、教員になったからには、きらいだと言ってはいられません。しかたなく体育の教員として、指導を始めました。ところが、三か月ほどたったころ、不思議なことに気づきました。運動をすることで、体が弱かった自分が健康で活発になっていたのです。毎日の運動の効果を自分の体で体験してから、トクヨは進んで講習会に参加し、熱心に体育を勉強するようになりました。体操の専門学校出身の外国人宣教師に出会い、ヨーロッパで教えられている女学生用の体操を習うこともできました。一方、休日や夏休み・冬休みは、自分が覚えた体操を他の学校の先生たちに教えることにも力を入れました。いつしかトクヨは、体育の指導力を多くの人に認められるようになっていました。

明治四十四（一九一一）年、トクヨは、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）の助教授になりました。そして、翌年留学生に選ばれイギリスに向かいました。体育ぎらいだったトクヨが、日本の女子体育の未来を背負うことになったのです。

トクヨの留学先は、マダム・オスターバーグが校長を務める名門キングスフィールド体操専門学校

体操の専門学校…当時外国では、体育の教師を育てるのは、体操の専門学校であった。

宣教師…キリスト教の教えを伝える牧師。

助教授…大学の先生。

でした。

「わざわざ日本から、助教授が留学生としてやってきた。」

トクヨを迎えた先生たちは、すでに助教授の資格をもっているトクヨに対して、何を教えればいいのか困ったといいます。そのためマダム・オスターバーグの提案により、トクヨの実力を確かめるためのテストが行われました。

「水泳を知っていますか。」「ホッケーやラクロスを知っていますか。」「ダンスを知っていますか。」「マッサージを知っていますか。」トクヨは次々と向けられる質問に、すべて「知りません。」と答えるしかありませんでした。当時の日本の体育の授業は、先生の号令に合わせて、ただ体を動かすというもので、トクヨもそれ以外の知識はもっていなかったのです。

結果はすべて0点。トクヨは、あきれ顔の先生たちにこう言われました。

「いったい、あなたは生徒に何を教えていたのですか。」

トクヨは、黙ったままくちびるをかみしめました。

キングスフィールド体操専門学校での生活は、驚きの連続でした。寄宿舎の部屋はホテルのようにきれいで、そうじをしてくれる専門のスタッフまでいるのです。しっかりした体を作るために、午後のおやつや夜食をふくめ、食事は一日五回もとることになっていました。また、動きやすいように工夫されたチュニックという制服も準備されていました。生活のすべてが、よりよく運動するために工夫されていたのです。

トクヨは、このような恵まれた環境の中で、できるだけ多くの運動を学ぼうと思いました。他の生徒の何倍も練習に打ちこみました。特に、水泳の上達ぶりは、まわりが驚くほどでした。実はトクヨは「水泳の練習は一日一回、三〇分」という水泳の授業のきまりをこっそりやぶり、一日三時間以上も練習していたのです。きまりをやぶっていることを知った水泳の先生は怒って、こう言いました。

寄宿舎…学生がいっしょに生活をする場所。

チュニック…女性の上着で、長さが腰からひざくらいのもの。ここでは、写真にある上着で運動着とした。

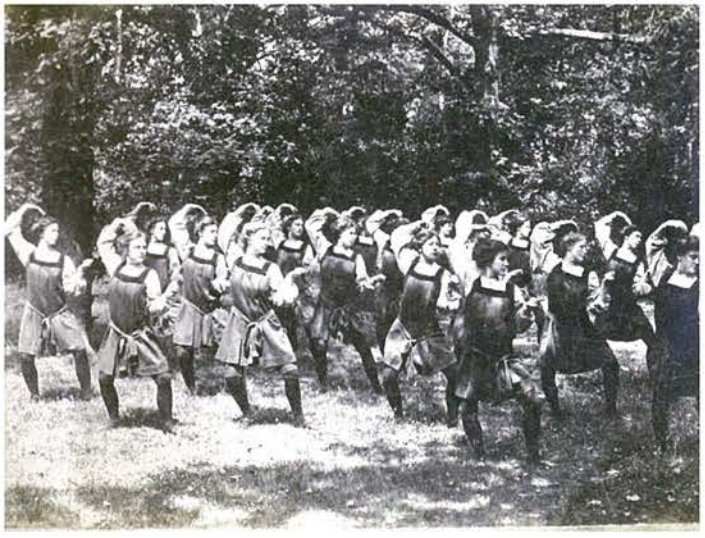
「きまりを守れないなら、水泳の成績を0点にしますよ。」

それに対して、トクヨはきっぱりこう言い切りました。

「わたしが望んでいるのは、水泳の成績ではなく、泳ぎをマスターすることです。わたしには時間のゆとりはありません。水泳以外にも覚えたいことがたくさんあります。早くマスターしたいのです。」

トクヨの熱意に負けた先生は、好きなだけ泳いでいいという許可をあたえました。

トクヨはこの他にも、クリケットやラクロス、ダンスなどたくさんのスポーツに触れました。自分たちで作戦を考えたり声をかけ合ったりする運動は楽しく、時間を忘れて体を動かしました。トクヨは、この「運動の楽しさ」を日本の人たちにも伝えたいという思いをもつようになりました。



イギリスの体育の授業（体操）
（学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵）

留学して一年がたったころには、トクヨはキングスフィールド体操専門学校で教えられたことをほとんどマスターしていました。わずか一年の間の成長ぶりに驚き、「天才だ」とトクヨをほめる教授もいたほどでした。しかし、自分が天才でないことはトクヨ自身が一番よく知っていました。

このころからトクヨは、自分の後に続く者たちには同じ苦労をさせたくないという思いを強くしていました。そのために、日本に帰ったら女子の体操専門学校をつくろうと決意したのです。

大正四（一九一五）年に帰国したトクヨは、女性の体育の先生を育てるための国立の専門学校の必要性をうったえ、国に専門学校をつくることを要望しました。しかし、実現はしませんでした。そこで、トクヨは自ら学校をつくることにしたのです。

開校までには多くの困難がありましたが、困難にぶつかるたびに、「知りません」としか答えられなかったころの自分を思い出し、のりこえたのです。

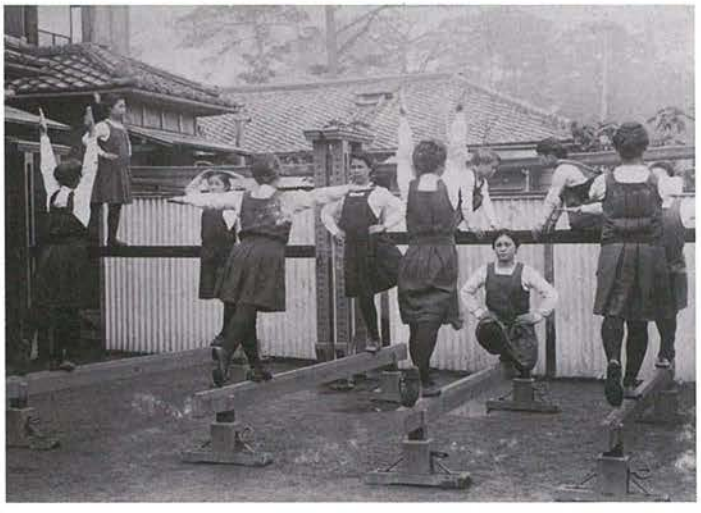
トクヨが「二階堂体操塾（現在の日本女子体育大学）」を開いたのは、帰国してから七年目の大正十一（一九二二）年、四十二歳のことでした。トクヨは、「運動の楽しさ」を教えることができる教員を育てるために、「二階堂体操塾」での授業や寮の生活に、イギリスで学んだことをできるだけ取り入れました。

開校して間もなく、トクヨは、真新しい日本製のチュニックを着た生徒たちに、こう宣言したのです。

「この学校では、チャイムが鳴りません。出席簿もありません。何の資格も取れません。しかし、体育の教員としての指導力をつけて卒業させることだけは、わたしが責任をもちます。」

このときトクヨは、自分を見つめる生徒たちの真剣なひとみの中に、日本の女子体育の未来を見ていました。

一年後、ほとんどの生徒が体育教師となり、トクヨのもとを巣立っていきました。彼女たちは日本各地の学校で、トクヨに学んだ「楽しい体育」を広めていったのです。



二階堂体操塾の平均台運動
（学校法人 二階堂学園 日本女子体育大学蔵）

二階堂トクヨ

二階堂トクヨは、明治十三（一八八〇）年に、現在の大崎市三本木の農家に生まれた。助教授としての二年間のイギリス留学で、「心身ともに健康な女性を育てる」ということを学んだ。帰国後、現在の日本女子体育大学の前身である「二階堂体操塾」を開設し、女子体育の基礎を築いた。

川村孫兵衛重吉 ―北上川の流れを変える―

川村孫兵衛は天正三（一五七五）年、長州（現在の山口県）で生まれました。孫兵衛が仙台にやってきたのは、二十代の半ばのころでした。若いころから土木の仕事にかかわり、いつかその知識と技術を人のために役立てたいと考えていました。そのようなときに、仙台藩主の伊達政宗に認められたのでした。

孫兵衛は政宗に仕え、命じられるままに鉱山や塩田の開発などに一つ一つ取り組み、やりとげていきました。

政宗の命令により、忙しくあちこちの工事の現場を指揮していた孫兵衛でしたが、この地に初めて来たときから、心に、ある思いを秘めていました。それは北上川の改修工事を必ず成功させ、野谷地から水を引きぬき、田畑に変えてみせるというものでした。広大な野谷地をわがもの顔で流れる川の水に、家や田畑が飲みこまれて困りはてていた人々の姿が孫兵衛の目にずっと焼きついていたのでした。

石巻市日和山の孫兵衛像

元和九（一六二三）年、孫兵衛は四十九歳のときに、川の改修に欠かせない柳津と飯野川の間の流れを止める工事を完成させました。ついに悲願であった北上川や迫川、江合川の三つの川の合流の工事に取りかかりました。その年には孫兵衛は、家族を伴って釜の地（現在の石巻市）に移り住んでいました。

野谷地…広い湿地帯。

しかし、人手や道具が不足していて、工事は思うように進みませんでした。くわで一かき一かきしてほり下げていき、固い粘土のかたまりをもっこで運び上げていたときです。かつぎぼうの後ろ側をかついでいた人夫が小石に足をとられ、ゆらりと体がかたむき、前の方をかついでいたもう一人の人夫を巻きこんで、ほり下げた穴に転げ落ちてしまったのです。

「だいじょうぶか。動けるか。」

「今、手を貸すから動くな。気をつけろ。」

仲間の人夫たちが口々にさけびます。工事になれていた人夫たちもつかれはて、集中力を失っていたのです。やはり無理なことだったのだろうか。まるで東北一の大河が、孫兵衛に自分の流れを変えられるのをこばんでいるかのようでした。孫兵衛は一心に考えました。つかれきった様子の孫兵衛を気づかった人夫頭が話かけても、孫兵衛の耳にはとどきませんでした。孫兵衛に重くのしかかっていたのは、はかどっていない工事のことでした。工事にはたくさんの費用がかかっていました。藩から準備されていたお金は、すでに底をついていました。また、人夫たちのつかれも限界に達していました。困っているはずの地域の住民たちからさえも、改修工事について、

「そんなことができるはずがない。」

「ここで生まれ育ったものでもないくせに何を言っている。」

「これまではたまたまうまくいっていただけ。」

という声が出るようになりました。

そんなとき、孫兵衛は、川の流れにじっと目を向けるのでした。

以前、孫兵衛が仙台のお城に行ったときのことです。孫兵衛は工事の進み具合いを政宗にたずねられました。

「川のつけ替えはどうじゃ。」

孫兵衛は、どろと汗まみれで一生懸命に作業する人夫たちの姿を思いうかべました。自分を信じて工事に取

もっこ…わらを網状に編んで作った土などを運ぶ用具。

り組ませてくれた政宗には、きちんと報告しなければならない。しかし、ここで工事がおくれていることを話すと、人夫たちに負担をかけてしまうと考えました。

孫兵衛は一瞬、間を置いて、

「はい、このくらいでございましょうか。」

と、自分の首のあたりを示しました。

そして数日後、孫兵衛の工事現場を政宗が視察にやってきたのです。政宗は、工事がおくれていると感じていたのですが、

「孫兵衛、たしか、このあたりまでほり進んでいたのだったな。」

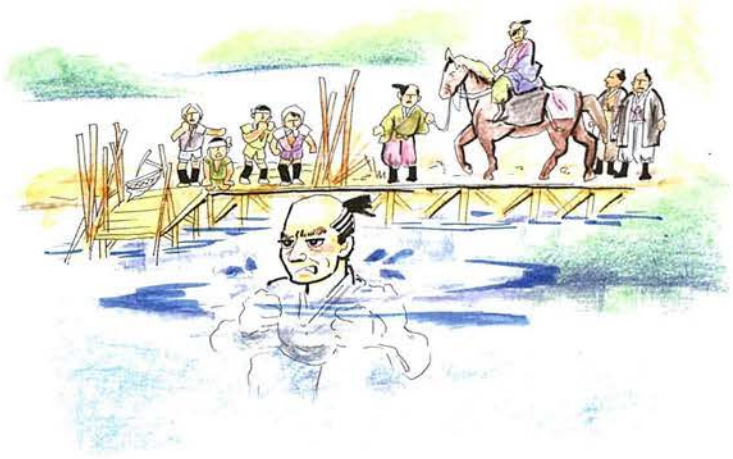
と、首のあたりで手を止め、平然と言い放ちました。孫兵衛の側にいた人夫頭は青くなりました。

「はい、さようでございました。」

孫兵衛は迷わずそう言うと、川の中へずんずん入って行きました。その様子を見ていた人夫たちは、その場の緊張した空気に息を飲みました。工事はおくれており、首どころかそのあたりにもなっていませんでした。孫兵衛は、水しぶきをあげながら川の中ほどまで歩いて行くと、ずんと腰を下ろしました。川面が波立ち、孫兵衛のあごのすぐ下でゆれて光っていました。それを見た政宗は、

「ふむ、そうか。首のあたりであるな。」

と言うと、くいっと手綱をとって馬の腹をけり、そのまま仙台城に帰っていきました。



孫兵衛は、工事のおくれを人夫たちのせいにすることはありませんでした。また、人夫たちを休ませずに働かせたり体の弱った者をやめさせたり、けがした者に無理をさせたりはしませんでした。それどころか、人夫たちに酒や肴をふるまったり、孫兵衛の自宅の風呂を使わせたりすることもありました。

肴…お酒を飲むときにそえる食べ物。

工事が進むにつれて、人夫たちの耳には、工事の費用が足りなくなって、孫兵衛が金持ちの家にかけ合ってお金を集めまわっているらしいという声も聞こえてきました。一軒では足りず何軒も訪ね歩き、頭を下げているらしいというのです。その話を聞き、人夫たちは工事が必ず成功することを信じて作業を続けました。そして、改修工事の全体が見えてくるようになると、ますます人夫たちの作業もはかどりました。それまで孫兵衛を信用していなかった人たちも、工事の成功を強く願うようになりました。

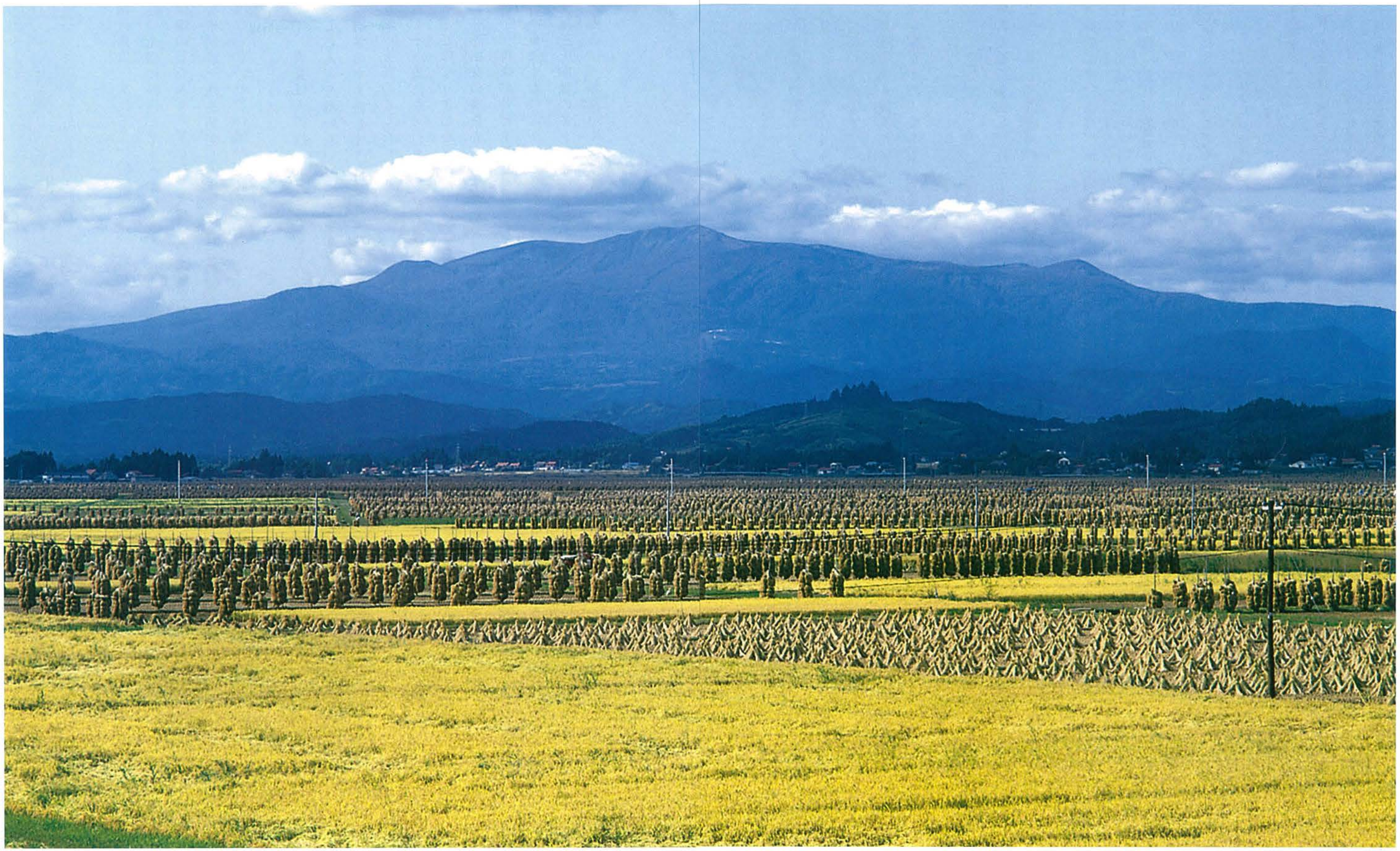
寛永三（一六二六）年、四年の年月を経て、迫川、江合川と北上川の合流とつけ替えの工事が終了しました。ある晴れた日、和渕（現在の石巻市和渕）の土手に立つ孫兵衛の姿がありました。孫兵衛の視線の先には迫川と北上川、そして江合川の合流した新たな川のゆうゆうとした流れがありました。

孫兵衛の工事により、仙北の平野では、野谷地が新田になり、米作りのための水が確保されるなど、安心して耕作できるようになりました。仙台藩ばかりでなく南部藩（現在の岩手県の南部）の城下町盛岡までの船の航行が可能になり、迫川や江合川からもぞくぞくと米俵を山積みにした船が石巻に下りました。集められた米は千石船によって直接江戸に運ばれるようになり、その数は江戸で消費される量の三分の一から二分の一にまでおよんだということです。

川村　孫兵衛重吉

川村　孫兵衛重吉は、天正三（一五七五）年、長州藩（現在の山口県）に生まれた。伊達政宗に取り立てられ、土木工事や鉱山開発、運河の建設の仕事で活躍した。四十九歳のときには、北上川の流れを変えるという難しい改修工事を成しとげた。毎年八月に盛大に行われている「石巻の川開き」は、孫兵衛への感謝の気持ちもこめられた祭りである。

千石船…江戸時代に、米などを運ぶために使われていた大型の和船。



先人たちが拓いた大地 豊かな実りに支　えられるわたしたち（栗駒山：栗原市）

大槻　俊斎　―多くの人に新しい医療を―

大槻俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）で生まれました。先祖は移住してきた開拓者で、赤井村の荒れた土地を開拓し、豊かな田畑にした人たちでした。大槻家の次男であった俊斎は、いつも父から、先祖が未開の土地を開拓したように自分の運命を自分で切り開いていかなければならないと言い聞かされていました。

そこで、俊斎は人の役に立つことをしたいと思い、医者になり病気やけがで苦しむ人々を救いたいと考えるようになりました。十七歳のころには、熱心に医学の本を読むようになり、江戸（現在の東京）に出て勉強したいという思いを強めました。

俊斎が十八歳になったとき、兄の援助のおかげで父の許しを得て、江戸に出ることになりました。江戸では、名医と評判の高かった手塚良仙のもとで修業することになりました。そのとき、石巻出身の湊長安や岩手県水沢市出身の高野長英らと出会いました。俊斎は、同郷の仲間と多くのことを学ぶ中で、将来のことを語り合いました。特にこれからの医学では、西洋の学問である蘭学を学ぶ必要があるという思いを強くもつようになりました。

俊斎は三十四歳のとき、手塚良仙の援助により、蘭学を学ぶために長崎に留学しました。このときも数多くの仲間と出会い、お互いにはげましたり自分を高めたりしながら新しい医学を学び続けました。

赤井に建つ俊斎の生誕の碑

蘭学…江戸時代にオランダ語によって西洋の学術や医学などを研究しようとした学問。

三年後に江戸にもどってきた俊斎は努力を重ね、外科を専門とする町医者として開業することができました。医者になりたいと思い立ち、二十年間学び続けてやっと達成できたのでした。俊斎は、いつも町の人のことを考えた治療を行いました。しかも、診察の技術も大変すぐれていたので、たちまち江戸中の評判になりました。

このころ、江戸では毎年のように天然痘が流行していました。天然痘にかかってしまうと、高熱とともに体中にふきでものが出て、命を落としてしまうのです。運良く命が助かったとしても、顔などにひどいあとを残してしまうのでした。この病気の治療法は、江戸では行われていなかったため、人々はどうすることもできませんでした。

すでに、外国では予防するための種痘という方法が発見されていました。日本では、九州で初めてこの治療法が行われました。その後、長崎で俊斎といっしょに蘭学を学んだ緒方洪庵によって、大阪でこの治療法が行われるようになり、多くの人の命が救われていたのでした。俊斎は、この治療法を知っていながら江戸の人を救えないもどかしさを感じていました。

当時の江戸幕府は、漢方医療を重視していたのです。そのためオランダ語を通じて伝わってきた蘭方医療は、外科と眼科しか許されていませんでした。何とかしたいという思いから、俊斎は、長崎で学んだ伊東玄朴を訪ねました。江戸の人を救いたい、江戸に種痘を行う施設を作りたいという思いを玄朴に伝えたところ、玄朴も同じ思いをもっており、二人は夜を徹して話し合いました。治療ができるようにするための手段、医者をめざしたお互いの思い……。気がつくとすっかり夜が明けていました。俊斎の迷いは消え、晴れ晴れとしていました。

天然痘…ウイルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気にかかって亡くなる人が多かった。

種痘…痘苗（ワクチン）を人の体に接種し、天然痘の感染を予防する方法。

さっそく、俊斎と玄朴は江戸中の蘭方医を訪ね歩き、二人の思いを伝えました。俊斎は、蘭方医の今後の役割と医療活動の重要性を熱く語りました。すると、あっという間に八十二名もの医者が賛成してくれました。だれもが俊斎と同じ気持ちをもっていたのでした。

そして、江戸に種痘所を作る計画を練り、幕府に許可を願い出ました。はじめのうちは漢方医らの圧力があり、なかなか思うようにはいきませんでした。しかし、俊斎や玄朴たちはあきらめませんでした。人命救助という立場から、何度も何度もうったえ続けたことによって、俊斎たちの熱意は幕府の役人の心を動かし、少しずつ理解されるようになりました。

五か月後にはついに幕府からの許可が下りました。念願がかなった俊斎らは、すぐに種痘所を建設するための資金集めをしました。ここでも、俊斎らの思いに共感した医者たちによって、たちまち多くの寄付金が集まり、江戸で最初の種痘所をお玉が池（現在の東京都神田）に作ることができました。

「よかった。」

と、俊斎はつぶやきました。そして、江戸に出てきて以来、初めて熱い涙を流しました。

俊斎は、たくさんの仲間といっしょに「お玉が池種痘所」の看板を立てかけました。そのとき、俊斎はすでに五十五歳になっていました。

このころ、江戸では天然痘のほかにも、コロリ病が大流行していました。四人に一人の割合で、この病気にかかってしまうほどでした。この病気は、一瞬にして人の命をうばうため、江戸の人々は恐怖におびえ、さまざまな情報が乱れ飛んでいました。薬も祈祷も効き目がないため、どうしようもありませんでした。

俊斎は、江戸におけるコロリの流行のすさまじさを正確に幕府に報告しました。そして、西洋医学の知識を取り入れ、さらに自分なりに工夫を加えて、玄朴とともに治療に当たりました。

こんなとき、種痘所の近くで火事が発生して、またたく間に大火となり、種痘所も燃えてしまいました。焼け跡を前にした俊斎たちは、それでも病気で苦しんでいる人を救わなければならないと考え、自宅などをとり

コロリ病…コレラ菌の感染により、おう吐やげりなどが続き、亡くなることもある病気。

祈祷…占い師や霊能者、僧侶などをとおして、神や仏に祈ること。

あえずの種痘所にしました。

同時に、多くの仲間に呼びかけ、すぐに新しい種痘所を作ることにしました。仲間の医者たちも協力してくれる人を必死に探していました。俊斎は、仲間の姿を見てますます力がわいてきました。これまでどおり治療できる日が近いことを確信しながら、病気で困っている人の治療に全力を注ぎました。

のちに、この種痘所は、「西洋医学所」と名前を改めました。俊斎は種痘所でも西洋医学所でも、その初代頭取になりました。俊斎は、人を押しのけてまで頭取になろうとする人ではありませんでした。しかし、これまでの俊斎の働きから、だれもが頭取には俊斎がいちばんふさわしいと思ったのでした。

東松島市保健センターに建つ
大槻俊斎像

大槻 俊斎

大槻 俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）に生まれた。長崎で蘭学を学び、天然痘を予防するため、「お玉が池種痘所（現在の東京大学医学部）」を設立し、「天下の名医」とまで呼ばれるようになった。蘭方医学を取り入れた大槻俊斎は、日本の医学界の発展に大きく貢献した。

頭取…会社などの取締役。ここでは、西洋医学所の首席。（代表者）

内海　五郎兵衛　―命と生活の架け橋をつくる―

今から百五十年ほど前、石巻を流れる北上川には、橋は一つもありませんでした。当時、石巻には、住吉や袋谷内（現在の水明町）など四か所に渡し場があり、渡し舟が村と村を結ぶ役目を果たしていました。人や物の往来は、大雨や洪水になると制限され、人々は不便な生活をせざるをえませんでした。

五郎兵衛は、天保十二（一八四一）年、牡鹿郡水沼村（現在の石巻市）で農業を営む片岡与七の長男として生まれました。五郎兵衛は小さいころから働き者で、心に決めたことは最後までやり通すねばり強い子どもでした。五郎兵衛は、病気の父親をもつ友達がいれば、近くの川で魚をとって売ったり夜遅くまでわらじ作りを手伝ったりして、困っている友達を助けることもありました。

五郎兵衛が二十四歳のとき、突然、父が重い病気にかかってしまいました。そのころ、五郎兵衛が住む村には医者がいませんでしたので、このようなときは遠くの石巻村から医者を呼ばなければなりません。

「すぐに医者を呼んでくるから、待っててくれ。父ちゃん。」

と言うなり、五郎兵衛は暴風雨の中、川沿いの渡し場に馬を走らせました。ようやく渡し場にたどり着いた五郎兵衛の目に映ったのは、数日前から降り続く雨のために、荒れ狂う北上川でした。何とか舟を出してもらいたい一心で、川沿いの渡し舟の船頭の家を訪ねてお願いしました。しかし、舟が出せるような状態ではありませんでした。

父のことが心配でならなかったのですが、しかたなく五郎兵衛は知り合いの家で一夜を明かし、川の流れがゆるやかになるのを待ちました。ところが次の日も、北上川の様子は変わっていませんでした。むしろ前日よりも水かさも勢いも増していてどうしようもない状態でした。五郎兵衛は、目と鼻の先にある石巻村がこんなにも遠いのかという思いと、何もできない自分に対する悔しさでいっぱいになりながら、急いで家にもどりました。

そんな五郎兵衛を待っていたのは、父の死でした。

「すまない、父ちゃん。ちきしょう、ちきしょう。」

五郎兵衛は、布団に横たわる父の姿をじっと見つめ、涙を流しながら、何度も何度も畳にこぶしを打ちつけました。

それからというもの、五郎兵衛は何とかして北上川に橋をかけたいという思いで、一生懸命働きました。そのかたわら、橋を作るための法律や建築などの勉強もしました。わからないことがあると、専門家に聞きに行くこともありました。

一つ大きな問題がありました。橋を作るためには、たくさんの資金が必要だったのです。五郎兵衛は、親せきや知人に協力を求めました。しかし、当時としてはたいへん難しい工事だったので、だれ一人賛成してくれる人はいませんでした。その中には、

「北上川に橋をかけるんだって。頭が変になったんじゃないか。」

などとあざけり笑う人もいました。

そんなとき、五郎兵衛にかすかな光が差しました。石巻村本町の区長の田辺吉助が、北上川に橋をかけたいと県令（県知事）に願い出て許可されました。しかし、あまりにも資金がかかりすぎるために、橋作りに手をつけないでいることを知ったのです。すぐに五郎兵衛は、橋をかける権利をゆずってくれるようにお願いするために、田辺吉助の家に行きました。何度も足を運んだ五郎兵衛の思いが、渋っていた田辺吉助の気持ちを動かし、ようやく橋をかけるための権利をゆずり受けることができました。

その後も、困難が続きました。橋をかける権利は何とか手にしたものの、県令の許可がなかなかおりませんでした。その理由は、橋をかけようとする五郎兵衛に反対する人たちがいたからです。特に、渡し場の船頭たちは、自分の仕事が減ってしまうため、五郎兵衛の考えには賛成できなかったのです。それでも、五郎兵衛はくじけずに、反対する人を説得したり県令にねばり強く願い出たりしました。五郎兵衛は自分と同じ悲しみを味わった人がいるに違いない。そんな思いをする人が出ないようにするためにも、橋作りを進めなければならないと考えていました。その思いが伝わったのか、明治十五（一八八二）年二月に、念願の橋作りの許可書を手にすることができました。

待ちに待った橋作りが始まりました。まず、川幅の最も狭い中瀬を利用して、中瀬の東側と西側に橋をかけることにしました。もちろん、五郎兵衛はこれまで以上に働き、資金をつくることにしました。それでも、資金は不足しました。私財を投げうって木材を用意しました。また、妻のせいが縄をなって売ったり工事現場で働く人の食事の世話をしたりして、資金の不足を補いました。それでも足りず、五郎兵衛は布団や家財も売りに出しました。冬の寒い最中に、布団の代わりにかやを着て寝るほど、自分たちの生活を切りつめていました。

さらに追い討ちをかけたのが大雨による洪水でした。できかかった橋がこわされてしまいました。橋の材料にしていた木材がなんと河口を出て、沖にある田代島や網地島まで流されたこともありました。それでも、五郎兵衛は流された木材を回収し、少しでも材料を確保しようと努力しました。そうした五郎兵衛の姿を見ても、

「橋をかけたいのなら、五郎兵衛が人柱になれ。」

「橋作りが成功したら、橋の上を逆立ちして歩いてやるぞ。」

かや…蚊を防ぐためにつり下げる、麻や木綿でできた布で寝床をおおうもの。

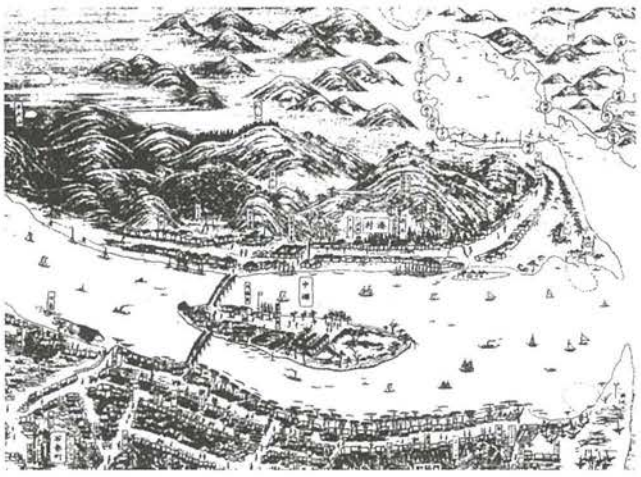
人柱…橋や城を造ったりするときに、神の心を和らげ、完成を期すためのいけにえとして生きている人などを水中にしずめたり、地中のうめたりすること。

と、冷やかしたり馬鹿にしたりする人が絶えませんでした。しかし、五郎兵衛の気持ちはまったく変わりませんでした。それどころか、何とかして橋を作りたいという思いを強めていきました。

日に日に材木が組み合わされ、少しずつ橋の形になって行きました。工事を始めてから五か月後のこと、とうとう五郎兵衛の思いがかないました。五郎兵衛は、父が亡くなったときのことを忘れたことはありませんでした。

橋の完成式には、県令がわざわざ石巻村に足を運び、お祝いの言葉を述べました。県令は、五郎兵衛のりっぱな仕事をいつまでもたたえるために、お祝いの席で橋の名前を「内海橋」と名づけました。そのほかにもたくさんの人が集まり、橋の完成を喜びました。その中には、工事の途中で五郎兵衛を冷やかした人たちもいました。しかし、もう五郎兵衛のことを批判する人はいませんでした。

このとき五郎兵衛は、すでに四十一歳になっていました。橋を作りたいと願った日から、十七年もの歳月が流れていました。



内海橋ができたころの石巻の様子（石巻市図書館蔵）

内海五郎兵衛

内海五郎兵衛は、天保十二（一八四一）年、牡鹿郡水沼村（現在の石巻市）に生まれた。北上川の石巻－湊間に橋をかける計画を立てたが、渡し舟の船頭たちから反対されてしまう。しかし、自分の財産までも投げうち、苦労の末に橋を完成させた。この橋は、その偉業をたたえられ「内海橋」と名づけられ、現在も多くの人々の生活を支えている。

五郎兵衛は、渡波の内海家を烏帽子親とする烏帽子子になり、その後、内海という姓を名乗るようになりました。

烏帽子親…元服のとき、烏帽子をかぶらせ、烏帽子名をつける人。

烏帽子子…烏帽子親から烏帽子名をつけられた者。

及川　甚三郎　―夢を追い続ける―

及川甚三郎は安政二（一八五五）年、鱒渕村（現在の登米市東和町米川）に農家の三男として生まれました。甚三郎は、子どものころから、何でも自分でやってみないと気のすまないところがありました。

六歳のときには、一度見たら将来大金持ちになるといわれる「金の馬」に会いたい一心で、真夜中に一人で山の中を歩き回ったことがありました。また、十歳のときには、海の水が本当に塩辛いのかを確かめるために、二日がかりで志津川の海まで一人で出かけたこともありました。甚三郎は二十一歳で及川家の婿養子になり、家業の川運送業の仕事を始めました。二年後には北上川を利用し、約四十キロメートルはなれた石巻港まで大量の炭を運ぶ仕事を任されるようになっていました。

及川甚三郎（東和町源氏ボタル交流館蔵）

ある夏の暑い日に、甚三郎は立ち寄った飯屋で、氷を食べている船員の姿を目にしました。そのころの甚三郎には、夏に氷があるということは信じられないことでした。ところが、東京や大阪では冬に保存していた氷を夏に食べることが流行しており、その日も北海道から東京へ運ぶ途中の氷を、船員が飯屋に持ちこんだということを聞き出しました。甚三郎はじっとその氷を見つめていました。

川運送業…川や運河などで、運賃などをもらって人や物を運ぶ仕事。

飯屋…ご飯などの飲食物を出す店。食堂。飲食店。

ほかの人なら驚きはしても、自分でやってみようと思う人はほとんどいないのですが、甚三郎は思い立ったら、それを納得するまでやってみないと気がすまない性格でした。さっそく鱒渕の氷を利用して製氷会社を作り、二十六歳のときには仙台でも名を知られるくらい、大きな会社にしました。

三十一歳のころには、長野県で機械製糸工場が作られ、製糸業が発展していることを聞きました。すぐに、鱒渕でもできるのではないかと考えいろいろ調べてみました。その結果、蚕を育てるために桑を生産できること、近くにきれいな水が流れていること、ボイラーの燃料となる薪が豊富にあることなど、製糸工場をつくるための条件が鱒渕でも整っていることがわかりました。さっそく長野県へ出かけ機械を買い入れ、技術者を連れて来ることを決めました。一年後には宮城県内で初めての製糸工場を設立しました。さらに、甚三郎は会社を大きくするため、桑の苗を農家に無償で配布し、まゆの生産量を増やす工夫なども行いました。甚三郎は仙台や石巻にも関連会社を設立し、大きな利益をあげるようになりました。

甚三郎は、「新しがり屋の及甚」、「製糸工場の及甚」、「氷屋の及甚」、「川運送の及甚」などと呼ばれ、実業家として成功するとともに、地域の産業を発展させることにも貢献していました。

甚三郎が四十二歳のとき、知り合いの佐藤惣右衛門からこんな話を耳にしました。

「カナダのフレーザー川では、たくさんのサケがとれるが、卵はすべて捨ててしまうそうだ。」

その話を聞くと、

「えっ、ほんとうか。」

と、甚三郎は目を大きく見開きました。そして、そのまま一点を見つめ、じっと考えこんでしまいました。甚三郎はチャンスがあれば、カナダでサケ漁をやってみようという気持ちを大きくしました。自分の思いを押さえきれなくなり、家族や周囲の反対を押し切り、氷屋や製糸工場の事業をすべて親せきに任せ、たった一

実業家…会社などをつくり、経営する人。

人で海を越え、カナダのフレーザー川に行くことにしました。

船に乗り、二十日間かけてバンクーバーに着きました。しかし、約束していた佐藤惣右衛門には会えませんでした。けれども、船の中で知り合った牧師の助けで、通訳をしてもらい、通訳とともにフレーザー川の近くの町にたどり着くことができました。甚三郎はすぐに、缶詰工場に足を運びました。間違いなくサケの卵が捨てられていることを確かめた甚三郎は、目の前に大きなチャンスが広がっていることを確信しました。

甚三郎は、いつものように入念に調べました。どうしたらサケをとる許可が得られるのか、工場を作るためにはどうしたらよいのかなど、日本で会社を作るよりも難しいことばかりでした。しかし、持ち前のチャレンジ精神に灯がついたように、甚三郎は熱心に調べました。甚三郎はサケ漁の経験はありませんでしたが、バンクーバー近くの漁師町で、サケ漁などをしながら、約一年間は現地の様子やサケ漁について勉強をしました。そして、数せきの船と少しの土地を借り、丸木小屋を建て日本人移民の仲間五人と、サケ漁を始めることができるようになりました。

甚三郎が四十七歳のころには、日本からの移民も多くなり、フレーザー川の中にあるドン島とライオン島を借りるまでになりました。甚三郎を中心とする日本人移民の仕事ぶりが現地の人々にも認められるようになりました。仕事が軌道に乗り出すと、甚三郎は塩ザケやサケの卵を日本へ輸出し、さらには醤油や味噌、酒づくりまで行うようになりました。ドン島は及川島と呼ばれるようになり、ライオン島はいっしょに事業を始めた仲間の名前から佐藤島と呼ばれるようになっていました。

日本からきた人たちが、汗を流しながらも生き生きと働いている姿を見て、甚三郎は、あのときの自分の選択をしみじみと考えていました。

カナダに渡ってから十年が過ぎたころ、甚三郎のふるさとの村が、赤痢の流行や二年続きの不作、日露戦争の影響などにより、食べるものもなく働いても働いても生活は苦しいものになっていたことを知りました。甚

入念…ていねいにくわしく。

日露戦争…一九〇四年に、日本とロシアが行った戦争。

三郎は、村人を救いたいという気持ちで、カナダで働こうと熱心に誘いました。甚三郎は水安丸という中古の船を自費で用意し、カナダに行く手伝いをしました。数々の困難がありましたが、人々は熱心に働き、かせいだお金をふるさとに送金できるようになりました。その後も登米地方から多くの人がカナダに渡っていくようになり、日本人のカナダ移住の道を開くきっかけとなりました。

現在でも、甚三郎の夢を追い続けた精神はカナダで語りつがれ、水安丸で渡った人々と関係の深い人々がカナダ全土に住んでいます。特に、B・C州バーノン市は、登米市の友好姉妹都市として交流を深めています。

水安丸記念碑（東和町華足寺）

及川 甚三郎

及川 甚三郎は、安政二（一八五五）年、鱒渕村（現在の登米市）に生まれた。四十二歳のときにカナダに渡った後、故郷の人々の生活の苦しさを知り、多くの人々をカナダへ移住させたことで、故郷の村を貧しさから救った。甚三郎がカナダ移住の道を開いたおかげで、カナダのバーノン市と登米市は友好姉妹都市として現在も交流を深めている。

B・C州…ブリティッシュ・コロンビア州のこと。
友好姉妹都市…文化交流などを目的とした結びついた都市と都市。

フランク 安田 ―イヌイットを救う―

フランク安田（安田恭輔）は明治元（一八六八）年、医者をしていた安田家の三男として生まれました。十歳のとき、母を病気で亡くし、次の年には父も亡くしたことで、町にある船会社で働いて暮らすことになりました。恭輔は、船員たちから話を聞くうちに、アメリカにあこがれをもつようになりました。

恭輔は、十九歳のとき、見習い船員となって、サンフランシスコに渡りました。恭輔はフランク安田と名前を変え、農場や化粧品会社で働きましたが、三年後には、また船に乗ることになりました。フランクの乗った船は、アラスカの海岸沿いをパトロールしながら密漁船などを取り締まったり、イヌイットの村に食料などの援助物資を運んだりするのが仕事でした。

生肉を食べるフランク安田

あるとき、フランクは船長の命令で気象観測員としてポイントバローで船を降りることになりました。そこは、アラスカの最も北にあり、北極海に面したとても寒い村でした。クジラなどの海の動物をとって暮らしているイヌイットが五百人ほど住んでいて、ほかには商売をしていたアメリカ人が、数人住んでいるだけでした。

イヌイットは、ほかの人種とは簡単に仲良くならないといわれていましたが、フランクは何回か訪問しているうちに仲間に入れてもらうことができました。日本人の顔がイヌイットに、よく似ていたことやフランクが生の肉を平気で食べたことが、その理由でした。かれらは、フランクのことをジャパンという種族のイヌイットだと思いこんだのでした。

ここで暮らすことを決めたフランクは、言葉を覚え、狩猟の腕をみがきました。やがて、腕のいい優秀な若者として、多くのイヌイットから認められるように

密漁船… 許可なく動物や魚介類をとる人（密猟者）が利用している船。

イヌイット… 北極圏に住む原住民をエスキモー。カナダでは、イヌイットと呼んでいる。

種族… 言葉や文化などの共通のものをもつ民族。

なりました。そして、村で一番大きな狩猟グループの親方の娘ネビロと仲良くなり、結婚しました。

このころからポイントバローでは白人の密猟などが原因で、クジラやアザラシなどの海の動物が捕れなくなり、イヌイットは暮らしに困るようになりました。その上、はしかが流行したため、たくさんの人が次々と亡くなりました。困った村人たちはフランクに助けを求めました。たのもしい若者で、英語も話せるフランクに大きな期待を寄せたのでした。はしかで亡くなる人が百人を超え、ついに自分の幼い娘までもが、命を落としてしまいました。どうしたらいいか当てのないフランクは困ってしまいました。

そんなある日、フランクはアラスカで金を探すためにポイントバローにやってきたカーターというアメリカ人と出会いました。山分けするからいっしょに金探しをしないかというカーターに強く誘われましたが、決心がつきませんでした。金探しのことは何もわからなかったし、カーターが信用できるかどうかも不安だったからです。

その一方で、フランクは、次々と亡くなっていく仲間や家族のことを考えると、何とかしなければという思いがどんどん高まっていくのでした。

「イヌイットが生きていくためには、動物が必要だ。海がだめなら山に住もう。そのためには場所を探すこととお金を手に入れることが必要だ。」

フランクはカーターにかけてみることにし、ネビロに言いました。

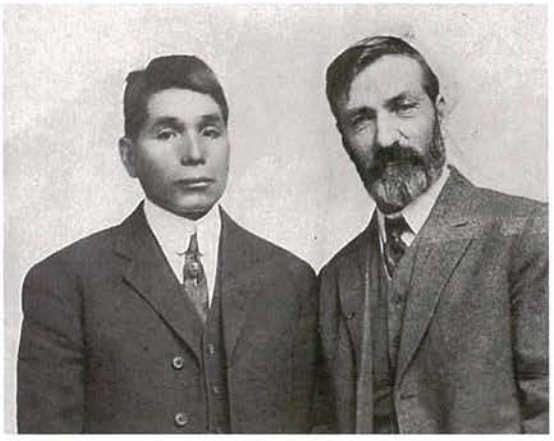
「おれは、カーターといっしょに金を探しに行く。君は村で待っていてくれ。」

すると、ネビロが言いました。

「いいえ、わたしも行きます。わたしもいっしょに金を探します。」

間もなく、ネビロを加えた三人は、アラスカの内陸部に入って行きました。当てのない金探しは三年が過ぎ、二人の間には女の子が生まれました。

ある日のこと、フランクはテントのそばに置いてあった草の束にキラキラ光る砂粒



フランク安田(左)とトム・カーター

はしか…
五・六歳の幼児がかかりやすい発熱などが伴う伝染病「ましん」ともいう。

を見つけてさけびました。

「ネビロ、これだ。これは間違いなく砂金だ。この草の束をどこから持ってきたんだ。」

ネビロに案内された小川の底には、ピカピカと光るおびただしいほどの砂金の粒がありました。カーターはこの場所をシャンダラー鉱山と名づけて金を掘り始めました。フランクは約束どおり大金を分けてもらい、ポイントバローにもどりました。そして、フランクは村人にこう言いました。

「ユーコン河のほとりに、いい場所が見つかった。魚はとれるし、ビーバーがたくさんいて毛皮は高く売れる。ヘラジカやトナカイ、キツネ、クマ、オオカミもいる。獲物には不自由しない。また、シャンダラー鉱山の近くなので、運送の仕事もある。しかし、いいことばかりではない。クジラやアザラシがいるわけではないし、インディアンとのトラブルもあるかもしれない。それでも行きたいという人はついて来てほしい。」

村人の意見は半々に分かれました。移住に賛成したのは若い人たちでした。先に移住した人の様子を見てから考える人もいました。

ポイントバローからのイヌイットが約百人、金探しの途中で出会ったイヌイットが約百人、合わせて約二百人を連れての大移住となりました。食料や水、生活用品などを犬ぞりに積み、長い隊列が進みました。フランクはみんなをはげましながら雪と氷におおわれた二千メートル級の山々が連なるブルックス山脈を越え、八百キロメートルもの距離を進んだのでした。この旅でイヌイットの人たちを苦しめたのは、木のにおいでした。ポイントバローには樹木がなく、においに慣れていなかったために、大人も子どももばたばたと倒れてしまいました。においに慣れるため三日間も休憩しなければなりませんでした。二百人ものイヌイットを目的地に連れて行くという大変な仕事のほかに、フランクにはもう一つの難しい問題がありました。村を作ろうとしている場所が、インディアンの縄張りの近くにあるため、どうしても許可をもらう必要があったのです。

高い山々をこえる
イヌイットたち

砂金…金のつぶ。風化や浸食などによって金がつぶ状になったもの。

インディアン…もともとその土地に住んでいた人たち。北アメリカ大陸の原住民。

フランクは、金探しの途中で知り合った日本人で、インディアンと仲がいいジョージ大島に頼んで、話し合いの場をつくってもらいました。たくさんのおくり物を持ってインディアンの酋長と向き合いました。フランクは、イヌイットの大酋長の役になって必死に交渉したのです。ここで失敗すると、さらに別の場所を探して当てのない旅を続けなければならなくなるからです。ジョージ大島の働きと、フランクの堂々とした態度によって、とうとう移住を許してもらうことができました。

その夜、フランクはネビロと二人、夜空にきらめくオーロラをじっと見上げていました。

ビーバー村のオーロラ

こうして、フランクに連れられて長い長い旅を続けてきた二百人ものイヌイットは、ユーコン河のほとりのフランクが用意した家に入って、新しい生活を始めました。フランクは、カーターから渡された大金をおしげもなく村づくりに使いました。フランクは、この村をビーバー村と名づけました。

昭和三十三（一九五八）年、ジャパニーズモーセ、アラスカのサンタクロースといわれたフランク安田は日本にもどることなく、九十歳で亡くなりました。イヌイットのために尽くした一生でした。平成元（一九八九）年にアラスカの州議会は、フランク安田の偉大な業績をたたえる表彰を行いました。

また、今でも、石巻市とアラスカ州のビーバー村の交流が継続されています。

フランク 安田

フランク 安田（安田恭輔）は、明治元（一八六八）年、石巻に生まれた。後にアメリカに渡り、全滅寸前の二百人ものイヌイットの移住を成功させ、ビーバー村を作った。フランクは「ジャパニーズモーセ」、「アラスカのサンタクロース」と呼ばれ、平成元（一九八九）年、アラスカ州議会はその業績を称え表彰を行った。

モーセ…古代イスラエルの民族指導者。モーゼともいう。

秀ノ山雷五郎 ―小さな体で大横綱に―

横綱秀ノ山雷五郎（本名 辰五郎）は、気仙沼市最知川原の百姓久吉の五男として生まれました。幼いころからその怪力ぶりが大評判で、大人たちが五斗俵一俵（約七十五キログラム）をようやくかつぐのに、辰五郎は両手に一俵ずつをやすやすとかかげて運んだといわれるほどでした。

辰五郎はその力自慢を生かし、相撲取りになりたいという夢をもっていました。辰五郎には、地元の草相撲で大関として大活躍をしていた自慢の兄がいたからです。辰五郎はそんな兄に強いあこがれをいだいていました。

辰五郎十六歳のとき、兄たちは本吉郡の力士たちを引き連れ、岩手県気仙郡盛（現在の岩手県大船渡市）の力士たちと勝負するため、遠征することになりました。辰五郎も相撲が取りたくてしかたがありませんでした。いっしょに行くことを断わられましたが、兄にはないしょで遠征軍についていきました。

盛に着くと、相撲会場にはたくさんの人が集まっていました。辰五郎はその人たちにまぎれながら、兄たちの取組を応援しました。ところが、どうでしょう。本吉の力士たちは、辰五郎の目の前で次から次へと負けていくではありませんか。ついには、辰五郎の自慢の兄さえも負けてしまいました。

秀ノ山雷五郎の銅像（気仙沼市波路上岩井崎園地内）

一斗…昔の量を表す単位。一斗は十升で、約十八リットル。

草相撲…しろうとの相撲。

辰五郎は、とっさに土俵に駆け上がり、相手側の大関に飛びかかりましたが、あっさり土俵にたたきつけられてしまいました。何度飛びかかっても、あっという間に投げられてしまいます。辰五郎がとてもかなう相手ではありませんでした。

辰五郎は、世の中にはこんなにも強い力士がたくさんいることを初めて知りました。そして、相撲取りになることを決心し、江戸に出ることにしました。

「親方にお目通りを……。どうかわたしを弟子にしてください。お願い申します。」

辰五郎は、来る日も来る日も、足を棒にし、相撲部屋を訪ね歩き、頭を下げました。しかし、体が小さいうえにわずか十六、七歳の田舎者。紹介してくれる人もない中で入門を許す相撲部屋などあるはずがありません。やっとの思いで住みこみで働くことが許された相撲部屋では、稽古どころか炊事や子守の雑用ばかりで、すぐに放り出されてしまいました。

江戸時代とはいえ、力士は二メートルほどもあるような大男で皆怪力ぞろい。辰五郎の身長は、一六四センチメートル。体が小さく体重も軽く、だれが見ても力士には不向きな体格だったのです。

希望を失った辰五郎は、二年もの間いろいろな土地をさすらった末に、身も心もぼろぼろになって、八木宿（現在の栃木県足利市）の油問屋の前にたどり着きました。

「お願い申します。どうかわたしをここで働かせてください。何日も飯を食っていないのです。」

油問屋の主人高木源之丞は、辰五郎の丈夫そうな体つきと力がありそうな姿を見て油絞めの仕事にはうってつけだと思い、雇い入れました。辰五郎にとっては、ふるさとをはなれて初めて人の心の温かさにふれ、自分のことを認めてもらった瞬間でした。辰五郎は、どんな苦しい力仕事でも黙々と働きました。そんな辰五郎の姿は、いつしか源之丞の目に留まるようになりました。

『油絞め』（油締め）…蒸した菜種や胡麻を樽製の絞り器に入れ、上から圧力をかけて油を絞る作業のこと。

ある日、辰五郎は源之丞に呼ばれて部屋に行きました。

「辰五郎や。おまえは、本当に一生懸命よく働いている。ありがとう。ところで、おまえは将来、どんなことをしたいのだ。このまま油絞めをしていてよいのか。」

辰五郎は、胸に秘めていた相撲取りへの思いを涙ながらに源之丞に話しました。一生懸命な働きぶりと、初めて知った相撲取りへの思いに心打たれた源之丞は、相撲部屋に入門できるように働きかけてやることを約束しました。

源之丞は、江戸に仕事があるたびに、また、ときには辰五郎のためにわざわざ江戸に出向き、わずかなつてを頼りに、当時の横綱、秀ノ山伝治郎のもとに入門できるように働きかけました。辰五郎は、源之丞の姿が見えなくなるまで見送り、どんなに夜遅くなっても、どんなに天候が悪くても、帰りを待ちました。そして、今までにも増して、仕事に精を出しました。

ついに、辰五郎は源之丞の力添えで相撲部屋での力士としての生活ができるようになったのです。

体が小さく体重の軽い辰五郎だけに、それを克服するためには、もともと持っていた力をさらに強くし、技にみがきをかけることしかありません。相撲界に入った辰五郎にとっては、どんな稽古の厳しさも苦しくはありませんでした。自分が相撲界に入れたのは源之丞のおかげであり、源之丞への感謝を一日たりとも忘れることはありませんでした。

歩みは遅かったものの、持ち前の努力と粘り強さで辰五郎は、じりじりと番付を上げていき、関脇時代には、四場所全くの負け知らずの三十連勝の大記録を達成するまでになりました。また、大関時代には、六場所でわずか三敗しかしないという好成績を残すほどの勝負強さを発揮しました。

ついに、辰五郎は、師匠の名前をいただき四股名を「秀ノ山」と改め、入幕後八十八勝十四敗の好成績が認められ、「秀ノ山雷五郎」として第九代横綱に上りつめました。秀ノ山、三十八歳のときでした。三十八歳といえば、今の相撲界では、すでに現役を引退して相当の年月がたつほどの年齢です。相撲界の最高峰である横綱となるまで、

『つて』…頼りになる人。知り合い手がかり。

関脇…相撲の番付で横綱、大関の次の地位。

四股名…相撲の力士の名前。

『横綱昇進の年齢（三十八歳）』
昭和時代の大横綱大鵬・北の湖等の現役引退の平均年齢は三十一・五歳、初土俵から引退までの年数は平均十七年である。

相撲取りになろうとしてからすでに二十二年もの年月がたっていました。土俵に上がる横綱秀ノ山雷五郎には、いつも大声援がおくられました。

二百四十年間ほどの江戸時代の相撲界で横綱になれたのは、わずか十二人であり、江戸時代後半の名だたる横綱の中で、秀ノ山は、八割四分二厘と最もよい勝率を誇る大横綱となりました。

平成二十三年三月十一日の東日本大震災の大津波で、秀ノ山の生家付近も大きな被害を受けました。けれども、今も生家の近くの岩井崎には、彼の銅像が遠く太平洋に、そして未来に向けて右手を大きく伸ばしてすっくと建っています。

横綱　秀ノ山雷五郎
（財団法人 日本相撲協会蔵）

秀ノ山 雷五郎

現在の気仙沼市最知川原に生まれた辰五郎（秀ノ山雷五郎）は、子どものころから怪力で有名だった。江戸の相撲部屋に苦労の末に入門した辰五郎は、血のにじむような練習を続け、十九年をかけて、とうとう横綱まで上りつめることができた。生家の近くの岩井崎の公園には、辰五郎の功績が称えられ銅像が建てられている。

「二百四十年」…伝説の初代横綱明石志賀之助の初土俵1624年から江戸時代最後の横綱陣幕久五郎が横綱に昇進した1867年の間。

落合　直文　―短歌を多くの人に広める―

父君よ　今朝はいかにと　手をつきて　問ふ子を見れば　死なれざりけり

「お父さん、今朝の体調はどうですか、と礼儀正しくたずねるわが子を見ると、この子のためにも病気で死ぬわけにはいかない」という意味の短歌です。自分が重い病気でありながら、わが子のことを思いやる作者のやさしい気持ちが伝わってきます。百年以上も前に詠まれた短歌ですが、作者の思いは今の時代の読者にも、手に取るようにわかります。この短歌の作者が落合直文です。

落合直文は、明治時代に活躍した歌人・国文学者です。明治時代は何もかもが変わり、いろいろなことが進歩した時代でした。文学においても、西洋からきた新しいものがもてはやされていました。一方、日本独自の詩である短歌は長い伝統にしばられ、決まりきった表現が多いため、しだいに多くの人から好まれなくなっていました。

直文は、文久元（一八六一）年に、松崎村片浜（現在の気仙沼市）で、鮎貝家の次男として生まれました。幼名を亀次郎といい、十四歳のころ、国学者の落合直亮の養子になりました。幼いころから本が好きで、短歌や文章を書くことがたいへん得意でした。そのような直文は、家族から仙台で学校の教師か神官になることをすすめられましたが、きっぱりと断りました。歌人や国文学者として仕事をしていきたいと考えていたからです。短歌や国文学を新しい時代に合ったものに発展させることが、自分がすべき仕事なのではないかとも考えていたのでした。自分の名前を直文としたのは二十六歳のころです。「文」の字に、文学で生きていくという気持ちを表したと考えられています。

国文学者…日本の文学を研究する学者。

神官…神社で神につかえる仕事をする人。神主。

直文は、いつも短歌がもっと多くの人に親しめるものになってほしいと願っていました。そのころ、短歌の世界では、昔からのかたちを守ろうとする旧派と、西洋から入ってきた言葉を使おうとする新派が対立していました。旧派は、昔からのかたちを何も変えずに守ろうとしていましたが、それればかりでは読む人々があきてしまいます。一方、新派は目新しい表現や言葉を使おうとしていましたが、まだまだよい短歌を作ることができていませんでした。どちらにもよいところと見直すべきところがありました。しかし、どちらも相手のよいところを認めずに言い争いを続けていたのでした。このようなことでは、短歌がよりよくなることも、多くの人が親しめるものになることもありません。直文は、すべての歌人や学者、短歌愛好家が力を合わせることが必要だと考えていました。そのことを繰り返しうったえていたのでした。

それだけではなく、直文は、新しい時代にふさわしい短歌を自分たちで作り上げていこうと考えました。そのために作ったのが、浅香社という短歌のグループでした。このグループには、直文の考えに賛成する若い歌人が集まりました。そこで、短歌を作ったり、作った短歌をよりよく直そうと話し合ったりしました。浅香社は、短歌の革新運動の中心となりました。

直文は、弟子たちにいつもこう話していました。

「自分自身の短歌を作りなさい。昔の人や今の人のまねをしてはいけません。もちろん、わたしの歌をまねするのもいけません。一人一人が自分のよいところを伸ばすようにしなさい。」

そのころ、直文と同じように短歌の革新運動をしていた正岡子規という歌人がいました。子規は、新聞に随筆を連載していました。歌人らしく短歌を取り上げることが多いので、直文も子規の随筆を読むことをとても楽しみにしていました。その連載の中で子規は、短歌がすぐれているかどうかは、作者の評判や流派には関係がないと述べていました。そして、短歌のよしあしを決めるには、みんなで意見を出し合って、話し合うことが大切だとも述べていたのでした。

革新…新しく変わること。

随筆…見たり聞いたりしたこと、経験したことなどを自由に記述した文章。エッセーともいう。

連載…続けて、新聞などに記述がのること。

ある日のこと、直文は、子規の病気がひどくなって、りんごをすってしぼったジュースのようなものでないとのどを通らなくなったことを知りました。直文は、子規のことを心配して、何かしてあげられないかと考えていました。ちょうどよいことに、直文のふるさとからりんごが送られてきました。つやつやとした大変りっぱなりんごです。直文は、すぐにこのりんごを果物の好きな子規に送ってあげようと思いました。近くにいた弟子たちも、おみまいにりんごを送ることは、いい考えだと思いました。

ところが、その日の新聞を読み始めた直文は、じっと目を閉じ、考えこんでしまいました。直文は、子規の随筆を読んだのでした。そんな直文の様子が気になった弟子たちも新聞を読みました。

子規の書いた内容は驚くべきものでした。そこで直文は、自分の短歌が「変な歌」、「わかりにくい歌」であると書かれていたのを目にしたのです。その上、言葉を変えれば少しはよくなると、厳しく批評されていたのでした。弟子たちは、これでは直文がりんごを送ることをためらうのもしかたがないと思いました。弟子たちが子規の記事を読んだことを伝えると、直文はうなずきながら、

「せっかく、子規がわたしの短歌をよくしようとして批評しているのだから。」

とおだやかに話したのでした。弟子たちは、はっとしました。直文は少し困ったような顔をしていましたが、決しておこっていたのではなかったのです。直文はこのようなときでも、自分が願っていること、いつも考えていることを弟子たちに伝えたのでした。

そして、今、りんごを送ったのでは、子規が遠慮して連載をやめてしまうのではないかとも考えたのでした。

直文はりんごに目を向けながら、子規の病気が早くよくなるといいと思っていること、そして連載が終わったら、このりんごを子規に届けるつもりであることを話しました。

ところが、次の日も、その次の日の新聞にも、直文の短歌を批評する子規の連載が続いていました。とうとう、りんごはかごに入ったままいたんでしまいました。結局、直文は子規にりんごを送ることができませんでた。

直文は、すっかり悪くなってしまったりんごを、やはりおだやかな目で見つめ続けました。

落合直文　（気仙沼市煙雲館（直文の生家）所蔵）

落合 直文

落合 直文は、文久元（一八六一）年、松崎村片浜（現在の気仙沼市）に生まれた。明治二十一（一八八八）年、「孝女白菊の歌」という新体詩を発表し、全国的に有名になった。明治二十二（一八八九）年、森鷗外とともに新声社を作り、近代詩に大きな影響をあたえた訳詩集『於母影』を刊行した。明治二十六（一八九三）年、浅香社を作り、近代短歌を開くもととなる和歌革新運動を行った。

大地をうるおす北上川の流れ 先人の知恵と工夫にはぐくまれ（北上川）

林　子平　―志あれば必ず道あり―

江戸時代の終わりごろ、アメリカのペリーが軍艦をしたがえ、突然来航し、日本中が大さわぎになりました。しかし、その六十年も前に、外国の船が攻めこんでくると予言し、そのための備えの必要性を主張した仙台藩士がいました。林子平です。

元文三（一七三八）年、子平は幕府に仕える武士の子として江戸で生まれました。しかし、子平が三歳のころ、父親が職を失い医者であるおじに育てられました。おじの医院を手伝いながら、夢中になって本を読む毎日を過ごしました。子平は、本に書かれていることでわからないことがあると、すぐに調べて解決せずにはいられない子どもでした。ときには、おじやおじの友人を質問ぜめにし、あきれさせるほどでした。

林　子平像（仙台市勾当台公園）

二十歳になった子平は、兄とともに仙台に移り住みました。仙台藩の仕事につくことができたのは兄だけでした。仕事がなかった子平ですが、藩のために尽くしたいと思い、藩を豊かにするための研究に取り組みました。よい政治を行っている藩があれば、遠く九州にまで調べに行くこともありました。仙台藩をよくしたいという情熱は、旅を重ねるごとにますます熱く燃え上がっていきました。子平は研究に研究を重ね、藩の政治がよくなるための案を三度も出しました。その案の中で、自分が先頭に立って藩のために尽くしたいということも書

きました。しかし、藩は仕事をもたない子平の意見など取り入れようとしませんでした。

幸いにも、子平にはたくさんの友人がいました。特に、子平の人柄にほれこんだ工藤平助たちは、温かい手を差しのべ、困っている子平に本や生活用品、ときには旅行の費用まで貸すこともありました。

以前、子平が東北地方を旅していたとき、ロシアが日本をねらっているというううわさを耳にし、子平は不安に思っていました。その情報が本当ならば、一大事です。何とかして確かめる方法がないかと考えた末に、長崎の出島に行くことを思いつきました。その当時、出島は日本で唯一オランダや中国との交易が認められていた場所でした。しかし、日本人と外国人が勝手に話をすることは禁じられていました。もしも話していることが幕府に知れてしまったら、罰を受けるかもしれません。それでも、子平は幕府の役人の厳しい目をかいくぐって、ひそかにオランダ商館長のアーレント・フェイトと親しくなりました。そして、フェイトから、

「どうやらロシアは日本、特に蝦夷地（現在の北海道）を自分たちのものにしようとねらっているようだ。」

という話を聞き出すことができました。ひんぱんにロシアの船が、蝦夷地周辺の海に現れていることもわかりました。蝦夷地がうばわれれば、次は間違いなく東北、そして南へと攻めこんでくることが予想されました。子平はうわさが本当であることを知り、大きな衝撃を受けました。

そのころの日本は、それぞれの藩のことしか考えていませんでした。もちろん、子平もそれまで仙台藩のことを中心に考えていました。しかし、このことはもう仙台藩だけの問題ではありません。少しでも早くこの危機を幕府や日本中の藩に知らせる必要があります。子平は地方の武士にすぎず、幕府を動かせる立場ではない自分をくやしく思いながらも、『志あれば必ず道あり』という信念をもって学問を続けました。そして、旅をして人と話してきたことを思い出しながら、今の自分ができることをやりとげようと考えるようになりました。

人柄…その人の品格。よい人物。

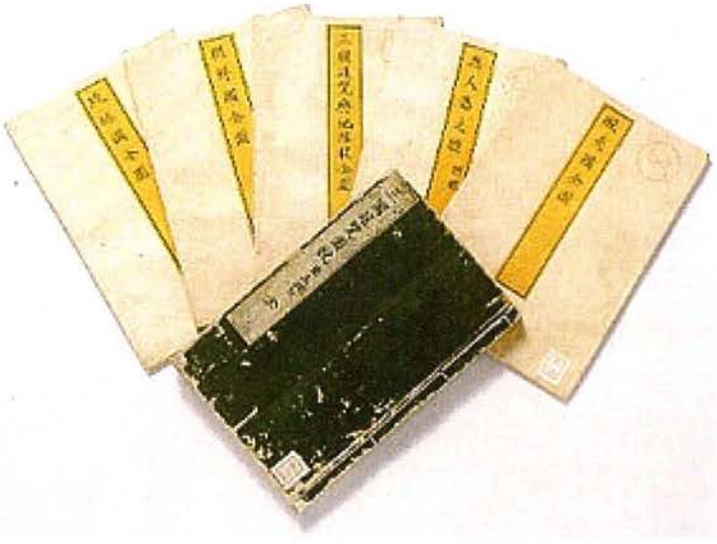
交易…互いに品物を交換し、商いをすること。貿易。

商館長…商いや交易をするための建物を商館といい、その長を商館長という。

子平は長崎から帰ると、寝る間もおしんで本を書き始めました。これまで読んだ本や日本中を旅して集めた情報をもとに築き上げた考えを、『三国通覧図説』と『海国兵談』にすべて注ぎこみました。『三国通覧図説』は、日本の領土や周辺の国々を地図で示したものです。『海国兵談』は、外国から攻めこまれたときどうやって防ぐかをくわしく述べたものです。日本は海に囲まれた島国であり、外国が攻めこんでこようと思えばどこからでも攻めこまれる。すぐに日本の海岸線を守る必要がある。このような日本全体を守ろうとする考えは、当時の日本人にはほとんど思いつかないことでした。

『三国通覧図説』は、五枚の地図と一巻の説明書でしたので、友人に協力してもらい、すぐに出版することができました。しかし、『海国兵談』は、十六巻（半紙三百五十枚分）にもなりました。たくさんのお金が必要となりましたが、これ以上友人に頼むわけにはいきません。しかも幕府の考えについて批判しているように思われる文章があったために、どこの印刷屋も引き受けてはくれませんでした。金もなく、印刷屋にも断られた子平は困り果てた末に、自分で彫って印刷することにしました。当時の印刷は、木版印刷といって、版木に一文字ずつ文字を彫りこんでいく方法で、決して楽な作業ではありません。しかし、子平は自分の手で版木を彫ることを決心しました。自宅の小さな部屋で、少しずつ少しずつていねいに作業を続けました。

約五年の年月をかけて、やっと三十八部印刷することができました。そのとき子平は、すでに五十四歳になっていました。



『三国通覧図説』（仙台市博物館蔵）

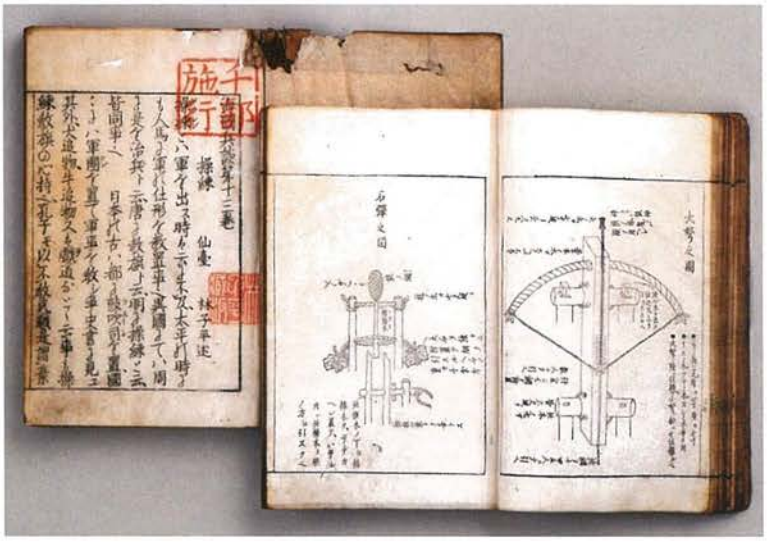
版木…
版を彫るための木。

できあがった本は、これまで助けてくれた友人たちに送りました。そして日本を守ってもらうよう幕府にも送ることにしました。

ところが、さらに印刷を続けようとしたときのことです。子平は、人々の心を不安にし幕府を批判した罪で、幕府にとらえられました。そして、できたばかりの本と版木を取り上げられてしまいました。わずかに残された『三国通覧図説』と『海国兵談』は友人の手によって書き写されて、後の時代に伝わっていきました。

子平がとらえられた次の年（一七九二）年、ロシアのラックスマンが蝦夷地に来航し、幕府に通商を求めてきました。幕府はあわてて子平が唱えていたように、海に面した藩の海岸線を守るよう命令しました。その後、たびたび外国の船が来航し、六十年後のペリーの来航につながっていきました。

日本の将来を考え、日本を守りたいという願いをもち続けた子平は、五十六歳でその生涯を閉じました。しかし、その願いは、やがて新しい日本をつくる人々の心の中で大きく花開いていきました。



『海国兵談』（仙台市博物館蔵）

林子平

林子平は、元文三（一七三八）年に江戸（現在の東京）に生まれ、後に仙台に移り住んだ。子平は日本が鎖国（江戸幕府が日本人の海外外交を禁止し、外交・貿易を制限したもの）中でありながらも長崎や江戸で見聞を広め、日本の海岸線を守る必要性を説く軍事書『海国兵談』を著した。

通商…外国と取引をすること。交易。

青柳 文蔵 ―日本最初の公開図書館をつくる―

青柳文蔵は、宝暦十一（一七六一）年に現在の岩手県一関市東町松川で、医師の三男として生まれました。父が塾も開いていたので、文蔵は幼いころから書物に親しんでいました。一人で本を読み、字を書き写すことが好きな少年でした。

文蔵が十六歳のとき、父は医者の仕事をつがせるために、登米郡米谷（現在の登米市東和町米谷）の医師のもとに修業に出しました。文蔵は医師のもとで修業にはげんでいましたが、十八歳のとき、（医師の仕事をつがせようとしている父には感謝している。しかし、医師は民衆を思い、慈しみをもたなければならない。技術だけではだめだ。父への恩返しのためにも、もっと勉強しよう）と心にちかい、儒学を学ぼうと江戸に行くことにしました。

江戸に出た文蔵でしたが、お金がないので読みたい本も買えず、思うように勉強することができませんでした。文蔵は、学問をするために江戸の医師のもとで働くことにしました。

しかし、（やはり、医者は民衆を思い、慈しむために『仁』を学ばなければならない。わたしは、人としてどうあるべきかを学ぶ必要がある）と考え、再び儒学を学ぼうと医師としての道を考え直すようになりました。

それからの文蔵は、塾を開いて近所の子どもたちに読み書きを教えたり、農作業を手伝ったりと、いろいろな仕事をしながら細々と生活しました。そのころ江戸では、天候不順や大地震、大火事、火山の噴火など、様々な天災にみまわれただけでなく、飢えでおおぜいの人々が亡くなるなど、世の中が大変不安定になっていました。文蔵は、生き延びるために必死で働きました。極めて貧しい生活を送りながらも、儒学を学ぶ意欲を失わず、少ないながらも得たお金で本を買い、勉強していました。

慈しむ…かわいがる。愛する。

儒学…中国の孔子がとなえた教えを学ぶ学問。

仁…思いやり。儒学では、人々が思いやりをもって生活できる社会の実現を目指している。

そんなとき、人生に大きな影響をあたえる本に出合いました。それは、当時の裁判の様子が書かれたもので、百四十四の名判決を集めた『棠陰比事』という中国の本です。

文蔵は、

（何も知らない庶民は訴える方法も知らず、泣きくれている。法律を勉強し、困っている人々の味方になろう）

と決心したのです。

その後、文蔵は公事師（現在の弁護士のような職業）になることを目指して努力を重ね、広く名前を知られるようになりました。文蔵は、公事師としてたくさんの収入を得るようになり、さらに質屋なども営み、大きな富を成したのです。

本を読む青柳文蔵（宮城県図書館蔵）

ときが過ぎ、文蔵は六十九歳になっていました。

これまでずっと文蔵の心にあったのは、江戸にやってくるときの決意でした。

（こうして富を成し、書物に囲まれてはいるが、思うのはふるさとのことである。医業をつがせようとしてくれた父に感謝しているし、残り少ない人生だからこそ、何かふるさとのためになることをしたい）

江戸に来て、貧乏のどん底だった文蔵。読みたい本も買えず、思うように勉強をできなかったころが思い出されます。

そして文蔵は、

（学問への志を抱きながらも達成できない人々に、自分の蔵書を読んでほしい。身分や地位に関係なく、だれでも利用できる、だれでも読むことができる文庫を作りたい。それが、父母、そしてふるさとに対する恩返しである）

と考えました。

青柳文庫（宮城県図書館蔵）

当時、自由に書物を読むことができたのは、身分や地位の高いお侍や学者などに限られていました。身分の低い人は、勉強したくても、その願いがかなえられない世の中だったのです。

文蔵が儒学者を志して集めた蔵書は二万余巻にものぼりました。そこで文蔵は、それらの蔵書を集めた文庫（図書館）を作ることを思い立ち、運営基金としての千両（現在の約五千万円）とともに、仙台藩に献上することを願い出たのでした。

その願いはかなえられました。仙台藩から許可がおりたとき、文蔵は自分の志が殿様に通じたと思いました。

仙台城下の百騎丁（現在の東二番丁）に青柳文庫が建てられました。そこには、二万五十巻ほどの蔵書がありました。仙台藩は役人を二人置き、貸出帳をつけて管理しました。武士や町民、女性、お坊さんなど身分、性別、年齢に関係なく、多くの人々が青柳文庫を利用したということです。

郷里の松川にある「青柳倉記碑」に、文蔵が書いた文章が残っています。文蔵は、その中で青柳文庫のことにふれて、

「書すなわち吾の賢子孫なり……」

と書いています。この言葉には、書物を読むことで、人として知らなければならないことや人としてしなければならないことがわかる。わたしが残す書物を読んで勉強する人が出てくれれば、書物こそがわたしにとって親孝行な子どもたちだ、という文蔵の思いがこめられています。

集めた書物を後世に伝えていきたいという文蔵の願いが、文庫と石碑に残されることになったのです。

献上…神や身分の高い人に差し出すこと。

青柳文庫は、日本で最初の一般の人々が利用できる図書館といわれています。医学・法律などの専門書や歴史書、詩歌、小説など、幅広い分野の書物が保管され、人々に利用されました。残念ながら青柳文庫の建物は昭和二十（一九四五）年の戦災で焼失してしまいましたが、当時の書物の一部は、今も宮城県図書館や宮城教育大学に保管されています。

青柳文庫の碑（宮城県図書館蔵）

青柳倉記碑（宮城県図書館蔵）

青柳 文蔵

青柳 文蔵は、宝暦十一（一七六一）年、（現在の岩手県一関市）に生まれた。江戸に出て勉学にはげみ、後に公事師（現在の弁護士のような職業）として、大きな富を得た。文蔵は、仙台藩にだれもが利用できる「文庫」の設立を願い出、自分の蔵書や資金を提供した。これは「青柳文庫」と呼ばれ、日本で最初の公開図書館といわれている。

後世…
今から後の世の中。

大槻 磐渓 ―開国を唱えて―

今から約二百年前、大槻磐渓は、江戸に生まれました。

磐渓の父玄沢は有名な蘭学者で、蘭学を日本に広めるためにはオランダ語を日本語に翻訳するための文章家が必要であると考えていました。磐渓の兄は父の後をついで蘭学者になっていました。しかし、次男である磐渓は父の強い願いから、漢学者の道を歩むことになりました。

八歳になった磐渓は漢文の勉強を本格的に始めました。どんな学問にも積極的な磐渓は、学んだことをどんどん身につけ、十歳のときには他の漢学者が驚くほどの漢文を書くようになっていました。そんなあるとき、父は磐渓に、お世話になっている師匠の家に養子に行くように命じました。当時は父親の命令は絶対でしたが、磐渓は、固く結んでいた口を開くと、

「父上、自分は何か一つの仕事で身を立てたいと考え、漢学を一生懸命に勉強してきました。養子に行くと漢学の勉強が続けられなくなります。このお話だけは父上の命令とはいえしたがえません。どうかお許しください。」

ときっぱりいいました。父はしかりましたが、磐渓は父の命令を聞きませんでした。

その後も磐渓は学問を続け、十七歳のとき、幕府の最高教育機関である昌平坂学問所に入ることができました。そこで十年間、漢学の勉強に打ちこみました。学問を追究するため全国から集まってきた若者ときたえ合う日々でもありました。

このころ全国の沿岸に外国の船がひんぱんに姿を見せるようになっていました。二十七歳になった磐渓は、昌平坂学問所にこもって勉強することだけで世の中の役に立つ人間になれるのか疑問をもつようになっていました。そして、外国の様子はどうなっているのだろうかと考えるようになりました。

外国の様子については、蘭学者の父や兄を通して多少の知識はもっていましたが、もっとくわしく知るために

蘭学… 江戸時代の中ごろから、オランダ語によって日本に伝わった西洋の学問。医学や天文学、兵学など。

翻訳… ある国のことばや文章を、ほかの国のことばになおすこと。

漢学… 昔の中国の学問や文化などを研究する学問。

長崎に行きたいと思うようになりました。長崎は日本でただ一つ、オランダとの貿易が行われていたからです。磐渓は思い切って父に願い出ました。

「父上と兄上から西洋の進んだ科学について聞いてきました。西洋の様子をもっとくわしく知るために、わたしを長崎に行かせてください。」

「長崎はお前が考えている以上にずっと遠いところだ。お前は江戸で学んでいればよいのだ。」

「父上。私は日本を西洋から守るために、どんな方法があるのか明らかにしたいのです。」

最初は許さなかった父でした。しかし、日本を守るために、漢学だけでなく西洋の事情も追究しようとする磐渓の強い思いを知り、ついに長崎行きを許すことにしました。それでも息子のことを心配した父は、出発のとき、知り合いの学者五十五名への紹介状を磐渓に持たせました。

磐渓は紹介状をにぎりしめ、胸をはり、長崎へ旅立ちました。

磐渓は有名な学者を訪ねながら長崎を目指しました。しかし、その途中で父玄沢が亡くなったために江戸にもどることになりました。そして、翌年、何とか長崎におもむくことができました。長崎では、西洋人が起こした事件のために、オランダ人に直接会うことはできませんでしたが、砲術家である高島秋帆などと出会いました。天保十二（一八四一）年には、高島秋帆が行った、当時最も進んだ軍隊の戦い方である西洋砲術演習を見て興味をもち、磐渓は西洋砲術を学びました。フランスやロシア、アメリカの当時の様子を研究し本にまとめたりもしました。こうして、磐渓は、世界を広い目で見ることができるようになっていったのです。

磐渓が五十三歳のとき、大事件が起きました。黒船が突然神奈川の浦賀に姿を現したのです。鎖国を続けている幕府に開国をせまるために、はるばるアメリカからやってきたのです。仙台藩主は数多くいる藩士の中から、

貿易…外国と品物を売り買いすること。

西洋…ヨーロッパやアメリカの国々。

追究…物事をどこまでも調べて、はっきりさせること。

砲術…大砲をそうさするわざ。

鎖国…国が外国との行きき や、貿易などをしないこと。

西洋の進んだ文明についてくわしい磐渓を選んで浦賀に向かわせました。磐渓は浦賀で、黒船の様子を見届けました。四せきの黒船は今まで日本人のだれも見たことがない軍艦でした。

（あのようなけむりをはいて進む鉄の船に日本が攻められたらひとたまりもない）

次の年も黒船がやってきました。今度は七せきの軍艦でした。磐渓は報告のために、泊まりこんで黒船を写生しました。もっとくわしく調べようと決心した磐渓は、ある晩、飲料水や燃料のまきを運ぶための船で黒船に近づくことに成功しました。

（なんて大きな軍艦だろう。がんじょうな船体は大砲のたまもよせつけないようだ）

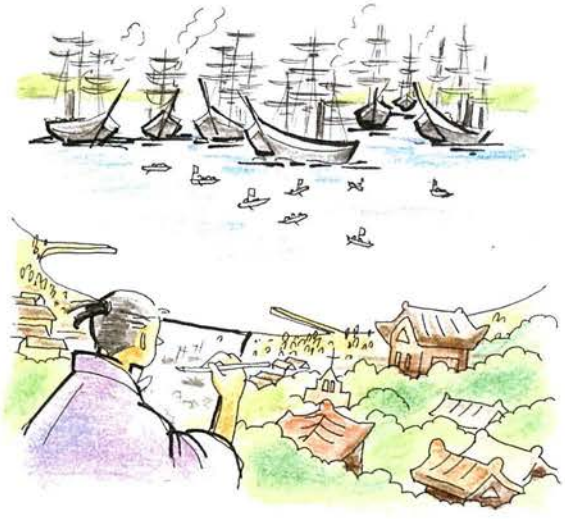
そして、磐渓は軍艦の中にいた中国人の通訳と話をすることができました。当時の中国はイギリスとの戦争に負けて植民地にされていました。この中国人通訳は戦争で乱れた中国からにげてきたのでした。

（日本が中国のように植民地にされないためには、もはや開国しかない）

磐渓は仙台藩主だけでなく、幕府に対しても開国が必要であるという意見書を提出しました。この当時、外国人を日本から追い出すべきだと考える人の方が多く、開国をうったえたために命をうばわれる人も出ていました。磐渓の身にも危険が迫っていました。

しかし、磐渓は自分の考えを変えようとはしませんでした。

やがて、幕府は長い間守ってきた鎖国をやめて開国にふみ切りました。ところが、幕府軍と薩摩や長州などの薩長軍との間に戦争が起きました。仙台藩は薩長軍から、幕府に味方した会津藩を攻撃するよう命令されました。仙台藩は幕府軍と薩長軍どちらに味方をしたらよいか決めかねました。藩の重役は、外国の事情にくわしく、知



軍艦…戦いをするためにつくられた船。

植民地…ある国の支配をうけている土地。

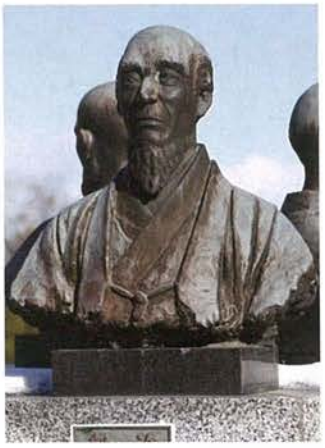
薩摩…昔の国の名前で、今の鹿児島県の西半分にあたる。

長州…昔の国の名前で、今の山口県の西北部にあたる。

識豊かな磐渓に意見を聞きました。磐渓は、

「今、国内で争っている場合ではありません。それに、薩長軍は外国人を追い出せと言っていますが、この考えはまちがいです。幕府が進めた開国は正しかったのです。」

と答えました。仙台藩の重役は磐渓の意見を取り入れて、薩長軍に対して、会津を許し戦争をやめるようにとの手紙を送りました。しかし、この手紙は薩長軍には届きませんでした。やがて、仙台藩や東北の諸藩は薩長軍との戦争に巻きこまれていきました。戊辰戦争です。戊辰戦争は幕府軍の敗戦で終わりました。磐渓は政府にはむかった罪で、牢屋に入れられてしまいました。何人かの役人が戦争の責任を取らされて死刑にされました。磐渓も死を覚悟しながら牢屋で過ごしていました。しかし、翌年、磐渓をしたう多くの弟子のおかげで自由になることができました。



大槻磐渓像（一関市）

明治になると、新政府は、外国の進んだ文明を取り入れて豊かな国づくりを進め、しだいに先進国の仲間入りを果たしていきました。

日本は旧暦から太陽暦に改め、明治六（一八七三）年元日を迎えました。磐渓は多くの学者を自宅に招いて正月の祝いをしました。大槻家では以前から太陽暦で元日を祝う行事を行ってきたのです。

「わが国も、やっと西洋と肩を並べることができた。」

とつぶやくなり、磐渓は目を閉じ、じっと考えていました。このとき、磐渓は七十三歳になっていました。

大槻 磐渓

大槻 磐渓は、享和元（一八〇一）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。漢学者で江戸時代終わりの養賢堂（仙台藩の学校）の学頭（現在の学校長）を務めた。磐渓は、西洋の進んだ文明や海軍の強さについて詳しく理解している数少ない人物であった。幕末には、仙台藩主伊達慶邦をはじめ多くの仙台藩士たちにも影響をあたえた。

戊辰戦争…一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍との戦い。

旧暦…昔のこよみ。月のみちかけをもとにして作ったこよみ。

太陽暦…地球が太陽のまわりを一回りするのにかかる時間を一年としてつくったこよみ。一年を三六五日とした現在使っているこよみ。

富田　鐵之助　―日本の製品を世界へ―

富田鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台藩士の富田家の四男として、仙台市で生まれました。鐵之助は十歳のころから漢学のほか、剣道や弓術、馬術などを学んでいました。鐵之助は、そのけいこぶりがとても熱心だったので、どの先生からも感心されました。その後、西洋の鉄砲に関する知識や外国の学問を学んだことで、鐵之助の視野は、世界へと広がり始めました。

富田鐵之助（日本銀行蔵）

鐵之助は二十九歳のとき、当時、江戸幕府の海軍を任されていた勝海舟の塾生になりました。九十人近くいた塾生の中でも、特に優秀だった鐵之助は勝海舟に見こまれて、同じ塾生の高木三郎と二人で、勝海舟の息子で十三歳の子鹿につきそってアメリカへ行き、軍艦の仕組みや戦術について学んでくることになりました。

三人がアメリカに渡り一年が過ぎようとしていたころ、鐵之助の生き方に大きな影響をあたえるできごとがありました。鐵之助のところに、幕府軍が薩摩藩や長州藩の連合軍に敗れたという知らせが入ったのです。鐵之助と高木は悩んだ末に、日本にもどることにしました。

ところが、帰国のあいさつに行った二人に対して、勝海舟は強い口調でいい放ちました。

「君たちをアメリカに行かせたのは何のためか。君たちを留学させたのは、アメリカで勉学と経験

弓術…弓で矢を射る技。

を積ませ、世界的な視野をもって、新しい国づくりにかかわってほしいと願ってのことだ。君たちには、日本の国のあるべき姿や将来のことを考えてほしいのだ。幕府軍が敗れたからといって簡単に帰国してくるなど、考えが浅い。」

二人は勝海舟の国の将来を思う心にふれ、道半ばにして帰国したことをはずかしく思いました。次の日も勝海舟から今後の日本の進むべき道などについて話を聞きました。そして、もう一度アメリカに留学するチャンスをもらいました。鐵之助も高木も迷うことなく、アメリカにもどることにしました。その時、勝海舟は鐵之助の手をぎゅっとにぎりしめました。鐵之助は、思わず強くにぎり返しました。

鐵之助は再び、アメリカに向かうことになりました。そして、船の中で何をなすべきかひたすら考えました。まず英語を身につけることにしました。前回のアメリカ生活で、語学の勉強が欠かせないと感じていたからでした。鐵之助は身につけた英語を生かして、いろいろなことを勉強しました。特に、アメリカの歴史に興味をもちました。先進国であるアメリカの歴史から、日本の将来のあるべき姿について、ヒントを得ることができると考えたからでした。くわしく調べているうちに、鐵之助は、商業や経済の発展によって、アメリカの国民生活が向上してきたことに気づきました。すると、鐵之助は迷うことなく、商業学校に入学しました。日本の将来のために、アメリカに留学させてくれた勝海舟の期待にこたえるためにも、寝る間をおしんで一生懸命勉強しました。日本の商業や経済がアメリカなどの先進国に肩を並べるにはどうすればよいのか考えていると、

先進国…経済や文化などの面で、進歩している国。

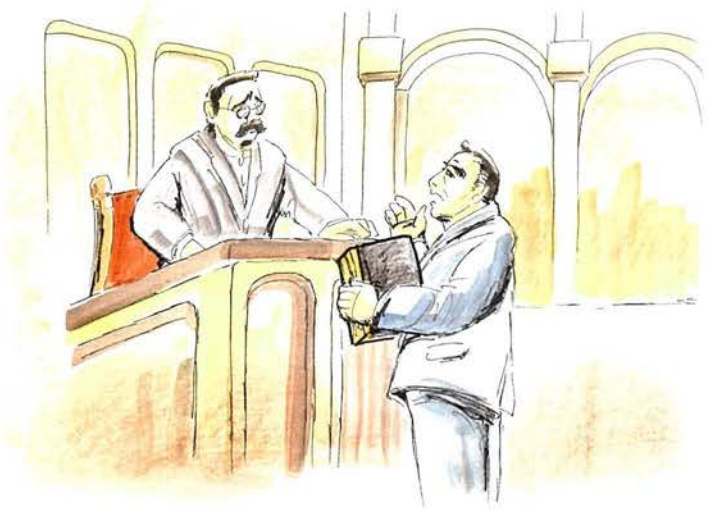
いつしか朝になっていることもありました。

そんな鐵之助に、再びチャンスがやってきました。明治五（一八七二）年、条約改正のために、日本から伊藤博文らがアメリカにやってきたのでした。その際に、鐵之助はアメリカの経済の仕組みなどについて説明しました。そのときの働きが認められ、鐵之助は明治政府から外交官になることを命じられました。

そのころの日本は、ようやく世界の国々と貿易をするようになっていました。日本からの輸出品の中心はお茶や生糸でしたが、まったくといっていいほど売れていませんでした。日本製のお茶は、中国製のお茶に比べて優れていたのですが、まれに粉のようになったお茶が混じっていたため、中国製よりも劣っていると思われていたのでした。そこで、鐵之助は形のよい葉だけを選んで製品にし、日本のお茶は優れていて信用できる。だから、日本製品を買おうと思われるようにしていこうと、政府に提案しました。これに対して、

「そんなに手間をかけなくても。」

などという反対意見が根強くあり、鐵之助の意見は、なかなか受け入れられませんでした。それでも、鐵之助は、日本のお茶の品質を高めることの必要性をうったえ、来る日も来る日も政府の担当者のもとへ足を運びました。鐵之助のあまりの熱心さに、政府の担当者は考えを変えていきました。さらに、鐵之助は、生糸の太さのむらを少なくし、加工の途中で糸切れしていたものを取り除いて製品化することも提案し、政府の担当者から約束を得ることができました。その後、日本製のお茶や生糸などの価値が世界から認められるようになり、大幅に注文を増やしたのでした。



条約改正…条約（国と国との間で決めた約束）を話し合いによって、変更しようとすること。

貿易…国と国の間で、それぞれの国で作られた物などを輸出入すること。

しかし、それぐらいのことで満足する鐵之助ではありませんでした。鐵之助には、まだまだ取り組むべきことが山積みでした。せっかく、製品が認められるようになっても、その当時、日本には外国と貿易をする会社が少なく、注文が増えても対応できないことがしばしばありました。そんなとき、貿易会社を立ち上げたばかりの森村市太郎が、

「日本にいる福沢諭吉先生にすすめられて、貿易会社を立ち上げ、アメリカに来ました。でも、わたしはまったく英語を話すことができませんので協力してください。」

と、鐵之助を頼ってきました。日本製品の人気が高まり、製品を輸出入できる会社が必要と考えていた鐵之助にとっても、願ってもない申し出でした。しばらくして市太郎の会社が軌道に乗り会社が大きくなると、アメリカからの注文にも応じられるようになりました。そればかりか、アメリカの製品を安く仕入れて販売できるようになり、日本の人々の生活も少しずつ豊かになりました。その間も、鐵之助はアメリカだけではなく、イギリスなどでも政府の役人として、日本の近代化のために尽くしました。

どこにいても鐵之助は、日本を旅立つときに勝海舟に手をにぎりしめられたあのときのことが忘れられなかったのでしょう。外国での仕事を終えて、政府の命令により日本にもどってきてからも、鐵之助はおごることなく、いつも自分ができることに、精いっぱい取り組み続けました。

富田 鐵之助

富田 鐵之助は、天保六（一八三五）年、仙台市に生まれた。江戸で西洋の学問を学び、米国で商業経済を学んだ後、その力を認められて外交官となった。帰国後、初代日本銀行副総裁となり、貿易の仕組みを確立した。その後、東京府知事を務めた後、自分の信念にしたがって銀行や保険会社の設立に参加した。

確立…確かなものにすること。

一力 健治郎 ―東北の発展を願って―

一力健治郎

一力健治郎は、江戸時代の終わりごろの文久三（一八六三）年、仙台の唐物商の四男として生まれました。八歳のとき、茶商一力家のあとつぎとなるため養子となりました。健治郎は、時代が江戸から明治に大きく変わり、外国から新しい文化が入ってくる中で成長しました。

明治時代のはじめ、仙台藩は戊辰戦争で敗れたことにより、県の重要な役職や警察の仕事などは、戦争に勝った他県の人が務めることになりました。政府の人たちからは、「白河以北一山百文」と言われていました。「白河以北一山百文」というのは、白河から北の地域、つまり東北地方は、「一山百文」程度しか値打ちがないという意味です。

幼いころから負けずぎらいだった健治郎は、この言葉がくやしくて、何とか見返してやりたいという気持ちでいっぱいでした。

二十歳になった健治郎は、一力家の家業をつぎ、熱心に働き、店も順調でした。結婚し、子どもも生まれました。しかし、家族との暮らしに幸せを感じていたものの、一方で世の中がどんどん姿を変えるのを目の当たりにしていました。今の世に何が必要なのか、自分に何ができるのかを考え、学校に行って勉強したいと思うようになりました。そこで健治郎は、二十二歳で東華学校（現在の仙台第一高等学校）に入学し、二十四歳で第二高等学校（現在の東北大学）に入学しました。健治郎は家をはなれ、自ら寄宿舎に入るなど熱心に勉強にはげみました。

唐物… 中国やその他の外国から日本に入ってきたもの。

茶商… お茶をあつかう商売。

戊辰戦争… 一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍（会津等）の戦い。

寄宿舎… 学生がいっしょに生活をするための建物。

さらに日本の中心である東京で新しい情報や人々の生活の様子を直接に学びたいと考え、二十六歳で東京の国民英学会にも学びました。

二十七歳でふるさとにもどった健治郎は、「文学館」という外国の本をあつかう書店を開きました。仙台の人々が外国の本を簡単に手に入れることができ、新しい文化を学ぶことができるようにという思いからでした。また、いくつかの会社の社長にもなりました。

しかし、そのころになっても、政府の東北に対する見方は、以前と変わらないものでした。

健治郎は、東北を発展させるためには政治にかかわることが必要と考え、市議会議員そして県議会議員となり、政治家として自分ができることを精いっぱい行いました。

そんなある日、健治郎は県議会議長の藤沢幾之輔から、経営が苦しくなった「東北日報」という新聞社を引き受けてほしいとたのまれました。当時、仙台には発行部数の多い「東北新聞」と歴史のある「奥羽日日新聞」がありました。政党の考えを伝えることを主としていた「東北日報」は二つの新聞に対抗するのが難しかったのです。経営が厳しい新聞社を立て直すのは健治郎しかいないと言われ、健治郎は、しばらく考えこみました。

決断のときは、せまってきています。

「新聞なら広く情報をみんなに伝えることができる。だが、人々は新聞を読んでくれるだろうか。」

健治郎は、つぶやきました。

断ろうかと思ったとき、健治郎の中に「白河以北一山百文」の言葉がうかびました。

(よし。新しい新聞だ。今までにない東北のための新聞を作ろう)

健治郎は新聞社を引き受けることを決心しました。

国民英学会…東京の私立の英語学校。

明治三十（一八九七）年、健治郎三十三歳のときのことです。それまでの県議会議員や植林会社の社長などの仕事を全部やめ、新聞づくりにかけることにしたのです。社名は「河北新報」としました。「白河以北一山百文」という東北を軽く見る言葉に対し、それをはね返そうという強い思いを社名にこめたのです。自分の新聞づくりを通して、東北の見方を変えていきたいと考えたのです。

健治郎は、河北新報の創刊号に自分の考え方を発表しました。

一　正しく、自由公正な新聞をつくる
二　人物、文化、産業を開発し、東北地方の発展に尽くす
三　市民の味方となり、悪い習わしをなくして人々を大切にする

河北新報創刊号（河北新報社蔵）

最初は、なかなか新聞が売れず、経営は困難を極めました。

それでも、健治郎は、思いを曲げず、様々な工夫をしました。

まず、だれでも読める新聞になるように、新聞の値段を一部一銭五厘から一銭に値下げしました。また、当時、仙台で発行されていた新聞は四ページでしたが、健治郎は二ページ増やして六ページにしたり、明治三十二（一八九九）年には、地方紙として初めて英文欄をのせ、文芸欄や家庭欄も作ったりしました。さらには、明治三十三（一九〇〇）年、世の中は毎日活動しているのだから、新聞は休むべきではないと年中無休を宣言し、昭和五（一九三〇）年までの三十年間、一日も休まず新聞を出し続けました。

健治郎は、新聞は時間が命として、遅れたり配達できなくなって読者に迷惑をかけたりすることはできないと考えていました。そのため、毎朝、新聞配達員とともに配達区域の様子を見て回り、体調の悪い配達員の代わりをすることもありました。また、学生の配達員のことをいつも気にかけ、勉強のたしに本代をわたしてはげますこともありました。

当時の一銭…現在の百五十円くらい。

その間に健治郎は、東北の人のためにできることとして、社説に「農奴解放」という問題を取り上げました。当時の東北の農民は貧しく、地主に高いお金をはらって農地を借りて農業をしていました。一生懸命働いても、かせいだお金の大部分が地主のものになってしまうのです。このような国の制度を変えることが必要だと思った健治郎は、思い切って新聞に発表したのでした。しかし、政府の理解を得られず、新聞の販売を一時禁止されることになったのです。それでも、自由公正な新聞を作る、東北地方の発展に尽くす気持ちは失いませんでした。

また、昭和三（一九二八）年には「東北産業博覧会」、昭和八（一九三三）年には「河北美術展」などの文化事業も始めました。

新聞少年の像

健治郎の情熱は人々の信用を得て、河北新報は多くの人に読まれるようになり、また、東北地方は健治郎が望んだように文化や産業も大きく発展してきました。

現在、河北新報社には、新聞配達の少年の像が建っています。その目は、未来を見すえ、粘り強く着実に前進を続ける東北人そのものでもあるのです。

一カ 健治郎

一カ 健治郎は、文久三（一八六三）年、仙台に生まれた。健治郎は実業家として成功し、宮城県議会議員や仙台市議会議員を歴任した。その後「河北新報」を創業した。現在に至っても、「河北新報」は東北を代表する新聞として、東北の発展に大きく貢献している。

社説…新聞にその新聞を出している会社の意見としてのせる文章。

酒井　げん　―女性の美しさを求めて―

酒井げん

現在、世界各地でファッションショーがくり広げられています。観客が注目するのは、はなやかな衣装ばかりではありません。服のデザインに合わせたヘアスタイルにも熱い視線が注がれます。「ヘアスタイリスト」は、おしゃれな子たちのあこがれの職業となっています。

げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれました。世の中が明治という新しい時代になり、人々の生活も大きく変わろうとしていました。それまでなかなか認められることのなかった「職業婦人」に対する人々の考えも変わる中で、げんは髪結い師として活躍しました。

げんは、ヘアスタイリストの先がけだったのです。

げんは、幼いころからきれいなものが大好きでした。中でも強くひかれたのが、美しく結い上げられた日本髪でした。きれいに髪を結った女の人が通るたび、げんの目は黒髪にくぎづけになり、姿が見えなくなるまでじっと見つめていました。

げんは、大きくなったら髪結いになって、たくさんの人の髪をきれいに結ってあげたいという思いをもつようになりました。しかし、それを口に出すことは決してありませんでした。当時は、女の人が仕事をもつことを、簡単に許してもらえる時代ではなかったのです。

十五歳になったある日、げんは思い切って両親に髪結いになりたいという思いを打ち明けました。

両親は驚きました。両親は、げんが結婚して家の中の仕事をすることを望んでいたからです。当然、げんの願いは聞き入れてはもらえませんでした。どうしても、幼いころからの夢をあきらめきれない

職業婦人…女性が社会に出て働くことが少ない時代に、職業を持って社会の中で働く女性。

げんは、何度も何度も両親にたのみました。

とうとう、父はその熱意に負け、げんが髪結い師の元へ修業に出ることを許しました。こうしてげんは、髪結い名人と言われていた横山みをの所に弟子入りすることになったのです。

髪結いの修業は、厳しいものでした。当時は、弟子は師匠の家に住みこみ、師匠の家族といっしょに暮らしながら修業を積むのがふつうで、髪結いの修業をしながら、師匠の家の家事も行いました。そうじに洗たく、三度の食事の準備、ときには、師匠の子どもたちの面倒も見なければなりません。そのようにして、お手伝いさんのような生活の中で、髪結いの勉強をするのです。

それでもげんは、少しもつらいとは思いませんでした。もともと手先が器用で、覚えの早いげんは、家事も修業も前向きな気持ちではげみ、めきめき腕を上げていきました。

十七歳になったとき、師匠から一本立ちを認められ独立したげんは、仙台で開業しました。

そのころ、めざましく西洋化が進む中、明治十八（一八八五）年、東京で医師と雑誌社員によって「婦人束髪会」がつくられ、女性をこれまでの日本髪から解放しようという動きが起こりました。不便できゅうくつな上に重い、衛生的でなくお金もかかるといった日本髪を、もっと手がかからない簡単な髪型にしようというのです。これは、女性が社会に出て仕事をしやすくするような新しい考えでした。この考えに共感したげんは、「婦人束髪促進会」をつくって、簡単で便利な髪型を研究して、多くの髪結い仲間に広めていきました。髪を後ろで一つにまとめたり、三つ編みにしてたばねてかんざしなどで留めたりするような自分で結える髪型を紹介していきました。

その後、げんは石巻に店を開くことに決めました。当時はまだ鉄道がなく、船による物の運搬が中心の時代で、海運の便がいい石巻には、東京や横浜の船がひんぱんに出入りし、都会の名士やその夫人、多くの名妓などが訪れており、そのころの石巻は流行の先がけ地だったのです。げんの思った通り、店は髪結いの客が後をたたず、大はんじょうしました。そればかりか、都会で流行している新しい髪型や

修業…学問や技術を学び身につけること。

一本立ち…一人の力でできること。

名妓…有名な芸者。長唄やおどり、三味線などを行い、酒席を楽しいものにする人。

洋装に合わせた髪型などの新しい情報もどんどん入ってきました。もともと研究熱心なげんは、それらを次々に取り入れて髪結いとしての腕をいっそうみがきました。

二十五歳まで石巻にいたげんは、再び仙台にもどる決心をしました。そのころの仙台は、県の中心地として大きな発展をとげていました。

（生まれ育った仙台の地で、思うぞんぶん髪結いの仕事をしよう）

そんな思いを胸に、げんは、東一番丁に新しい店をかまえました。

仙台で開業したげんは、江戸時代から続く日本髪の伝統を守りつつも自分の工夫を入れた新しい日本髪を結うことにも力を入れるようになりました。げんの髪結いの技術が評判になり、お得意様には地元仙台の上流家庭の奥様方が多くなりました。当時、上流家庭では、夫が朝食の席に着く前に、妻はきちんと日本髪を結い上げておく習慣があったのです。そのため、げんの店には、朝早くからお得意様が詰めかけました。げんは、お客さん一人一人の年齢や職業、個性に合わせて日本髪を結い上げました。三十種類以上の髪型があったといわれています。

げんは、お客さんの日本髪を結い上げるたびに、近くの写真屋に行って写真をとることにしました。できあがった写真の光線の加減や髪型の写りが悪いと何度もとり直しをするほど、美しい髪の写真にこだわりました。その五十人の髪型に氏名を書きそえ、『髪のしおり春笑草』という冊子にまとめました。

げんはできあがった『髪のしおり春笑草』を開き、写真を一つ一つ見つめ、うなずくのでした。

この冊子は、店のお客さんの髪型の見本や弟子の教科書のように使われたといいます。

大正二（一九一三）年、日本で最初に美容専門学校として東京女子美髪学校ができました。この学校は女性の髪結いの技術を後の世の人に伝えることを目的につくられました。げんは、髪結いの技術が認められ、名誉講師

『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

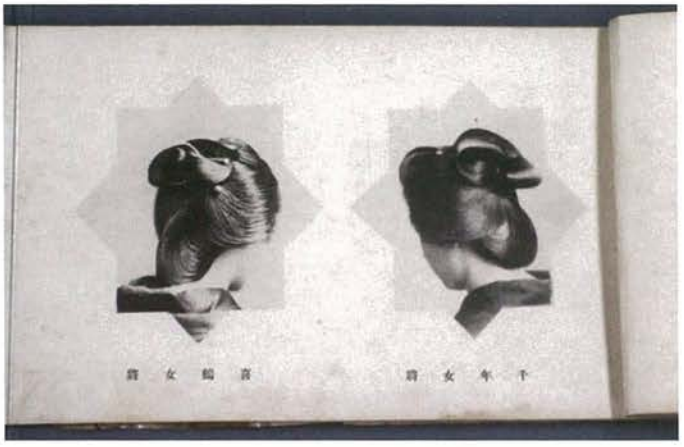
上流家庭…お金持ちで、社会的な地位もある家庭。

に選ばれたのです。

「世の中では、一に衣装、二に髪型というけれど、いかに衣装が立派でも髪型が悪かったら見られたものではない。髪型がよいとどんな衣装を着ても見栄えがするもので、何より髪型が一番である。」という考えをもって、げんは、若い生徒を前に自分の技術を伝えようと熱心に教えました。

げんは、昭和十九年、七十七歳でこの世を去りました。

「髪結い」から「美容師」、そして「ヘアスタイリスト」へと、時代とともに、その呼び名は変わりましたが、現在も多くの人がげんの夢を受けつぎ、女性を美しくする仕事を発展させています。



『髪のしおり春笑草』（酒井家蔵）

酒井げん

酒井げんは、慶応三（一八六七）年、仙台に生まれた。明治、大正、昭和にわたって髪結いとして石巻や仙台で活躍した。げんは、江戸時代から続く日本独特の髪結いの伝統を残すため、自分の手がけたさまざまな日本髪を写真にとり、写真帖『髪のしおり春笑草』を作った。

名誉講師…その人のそれまでの仕事を認められた特別な先生。

志賀　潔 ―赤痢菌を発見する―

志賀潔は赤痢の病原菌を発見した人です。赤痢にかかると便に血が混じり高熱が出ます。当時は赤痢の正体がはっきりせず、当然治療法もわからないため、世界中で多くの人が命を失いました。

志賀潔は、明治三（一八七〇）年、代々伊達氏に仕えてきた仙台の佐藤家に生まれました。その後、明治になって家計が厳しくなり、祖父の家に預けられることになりました。祖父が暮らす志賀家は医者で、周囲からは将来祖父のあとをついで医者になることを期待されていました。

志賀は、難しい試験がある第一高等中学校（現在の仙台第一高等学校）に入学し、自分の将来について悩みながら学校生活を過ごしていました。人づき合いが苦手な志賀は、患者をみる医者にはなれないのではないかと思っていたのです。

そんな中、志賀は、顕微鏡を使って様々なことを調べることに強い興味をもつようになりました。あらゆるものの細部が見える顕微鏡は、志賀の好奇心をいっそうかきたてました。さらに志賀は、わからないことを先生に質問をしたのですが、先生は自ら調べ解決させるために、わざと教えてくれませんでした。これが後のがまん強くこつこつと調べる力につながっていきました。

第一高等中学校を卒業するころには、細菌学という医学への道があることを知りました。

志賀　潔（学校法人 北里研究所蔵）

赤痢：伝染病の一つで、赤痢菌で起こる大腸の病気。

「細菌学は、まだまだこれからの学問だ。細菌学者になることができれば、自分が得意なことを生かして仕事ができる。何より、研究の結果が病気の治療に役立ち、人の命を救うことができる。わたしの努力が多くの人の命を救い、幸福をあたえることになるぞ。」

こうして志賀は、帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）に入学しました。卒業後は細菌によって引き起こされる伝染病の予防や治療法を研究するため、「伝染病研究所」に入りました。

伝染病研究所には、当時細菌学で有名だった北里柴三郎が所長をしていました。大学で学んだ細菌学は講義だけで実習はなかったので、北里先生から三か月間基本的な技術を学びました。

北里先生は、研究に対してとても厳しい人でした。作業に不正確なところがあれば、何べんでもやり直しさせられ、また、研究に対して真剣に取り組まないと、大声でしかられました。しかし、北里先生の厳しい指導で負けるような志賀ではありません。むしろ、研究がどれだけ真剣なものなのかを知ることができ、自分の志す道へ近づいたと実感できるようになったのです。

研究所で研究を始めた年の六月、関東を中心に再び赤痢の患者が増え、流行のきざしが現れました。人々を赤痢の恐怖から救うために、伝染病研究所としては、何としても原因となる赤痢菌を特定し、治療法を確立しなければなりません。その研究に北里先生は志賀を指名しました。志賀は、この日から北里先生の指導を受けながら、赤痢の研究を行うことになったのです。

志賀は、下宿を引きはらい、研究室の片すみに自分の寝床を作りました。そして、研究室に泊まりこみ赤痢菌を見つけるために必死で研究しました。見つけるためには、赤痢患者の便を、顕微鏡でしらみつぶしに見ていかなければなりません。しかもそれには、自分に病気がうつってしまうかも知れない危険がひそんでいるのです。それでも志賀は、しんぼう強く顕微鏡をのぞきながら研究に取り組みました。

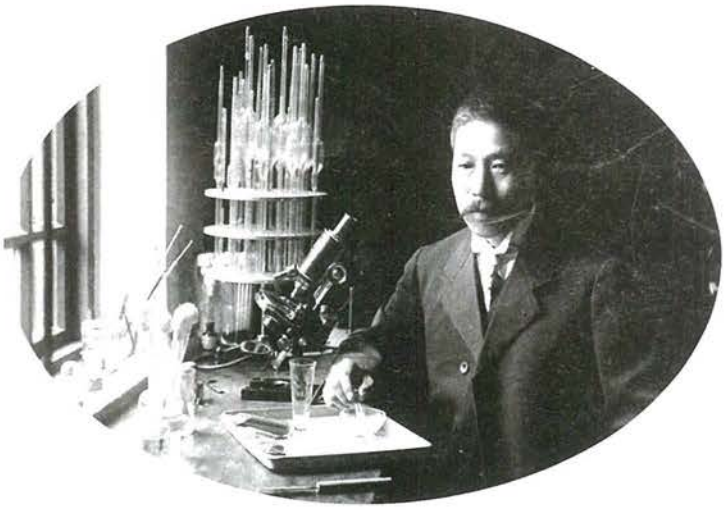
きざし…物事が起ころうとする、ようすやしるし。

「便の中には細菌がたくさん見つかる。しかし、どれが赤痢菌なのかわからない。これまでも、多くの研究者が赤痢菌を特定しようと努力してきたのに、なぜ見つからないんだ。どうすれば。」

なかなか進まない研究でしたが、自分に任された役割の大切さを理解していた志賀は、あきらめることなく、研究を続けました。

そんなある日、志賀がいつものように顕微鏡で一つ一つ調べていたところ、本来、体内にない菌が多くの赤痢患者から見つかりました。もしかしたらこれが赤痢菌かも知れない、と思った志賀は、実験で確かめようとしました。

しかし、何度繰り返しても思ったような結果が出ません。多くの研究者が味わってきた苦労を、今、志賀も体験しているのです。赤痢菌の特定は、まるで迷路の中を進むような作業でした。



研究を続ける志賀潔（学校法人 北里研究所蔵）

秋が過ぎ、冬を迎えたある日、気分転かんに研究室をはなれ図書室に入りました。そこでも頭の中は赤痢菌のことでいっぱいです。あれこれ雑誌をめくっていると、外国の研究者が出した論文が目に入りました。それは、腸チフスの診断についての論文でした。

「なるほど、こういう方法もあるのか。待てよ、この方法を逆にしたらどうなるだろう。」

志賀はこの論文を応用すれば、赤痢菌の特定につながると考えました。

腸チフス… 腸がおかされる伝染病。熱が高くなり、げりをする。

論文… 研究した結果や意見を述べた文章。

すぐに、北里先生に報告し、その研究方法についていっしょに計画を立てました。三十四名の患者の便から分離した赤痢菌と思われる菌を培養基に入れて、菌を育てました。

そしていよいよ、新たな方法を試すときが来ました。まず一つ目の培養基です。明らかに赤痢菌の反応が現れました。二つ目、三つ目と続き、何と三十四名分の培養基すべてが赤痢菌の反応を示したのです。

「間違いない、これが赤痢菌だ。やった、やったぞ。」

志賀は、心の中でこうさけぶと、喜びにあふれた顔で北里先生を見ました。

北里先生もまた、笑顔で志賀を見つめ返しました。

赤痢菌発見のニュースは全世界に飛びました。そして、赤痢菌におびえていた世界の多くの人を安心させました。今では、赤痢菌で命を落とす人はほとんどいなくなりました。

志賀　潔

志賀 潔は、明治三（一八七〇）年、仙台市に生まれた。第一高等中学校（現在の仙台第一高等学校）で、細菌学の道を歩む決心をする。帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）を卒業後、伝染病研究所に入り、赤痢菌を苦労の末に発見した。細菌学で人類の福祉に貢献したことから、昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれた。

培養基…研究用に細菌を育てるための、養分などを含んだ固形の物質。

本多 光太郎 ― 新しい金属をつくる ―

本多光太郎

本多光太郎は、明治三（一八七〇）年、愛知県に生まれました。小学生のころは、学校に行って勉強をするより、途中にある川で水遊びをし、魚をとることに夢中でした。しかし、兄浅治郎と寺田先生の言葉が光太郎の一生を大きく変えました。

兄は秀才で、一生懸命に勉強をし、帝国大学（現在の東京大学）入学を果たしていました。

「何も考えずにただ何となく一生を過ごすのはもったいない。」

「志をもつことが大切。」

そんな兄の言葉は、光太郎に大きな影響をあたえました。

また、小学校の教師で、夜は志のある若者を集めて勉強を教えてくれていた寺田先生は、光太郎にこんな言葉をかけてくれました。

「勉強とは何かを真剣に考えたことがありますか。勉強とは字のとおり、勉め、強いること、すなわち、あまり好きではないことでも一生懸命に努力することが勉強するということなのですよ。勉強が苦手な人は、努力をする必要があるのです。苦手なことでも他人よりたくさんの努力をすればできるようになるのです。」

「光太郎くんは決して秀才ではありませんが、苦しい農作業できたえた、強い意志と立派な身体をもっているじゃないですか。光太郎くんは将来を切り拓いていくために大切な三つの力のうち二つは、人に負けないだけの力が身についているのです。あとは、勉強だけです。」

光太郎は、胸が熱くなりました。このときから東京で勉強したいという思いが強くなっていったのです。

兄の応援をもらい何とか家族の反対を押し切り、上京したのは十七歳の春のことでした。あこがれの兄のもとでともに暮らすという夢がとうとうかなったのです。光太郎は秀才といわれた兄とは違い、勉強が得意ではありませんでした。だからこそ、人の何倍も努力することを心に決めました。必死で勉強し、二十四歳のとき、兄と同じ帝国大学の物理学科に入学を果たしました。

帝国大学に入学すると、光太郎は、まるでこの世のありとあらゆるものを解き明かそうとするような勢いで、実験に取り組みました。実験が楽しくてたまりませんでした。雨の日も晴れの日も、一日も休むことなく夜中まで実験を続けました。実験器具がなければ自分で作り、決して手ぬきや近道をしませんでした。どんなに時間がかかっても、光太郎はそれを、めんどうだとか損だとは思いもしませんでした。

そんな光太郎は、いつしか人々から「実験の鬼」と呼ばれるようになったのです。

帝国大学卒業後、三年間ドイツに留学し、物理学において世界から認められるようになった光太郎は、四十一歳で東北帝国大学理科大学の教授に任命されました。緑豊かで空気が澄んでいる美しい仙台、ここが光太郎の第二の故郷となりました。

大正五（一九一六）年、世界は第一次世界大戦のまっただ中でした。外国からの品物の輸入が非常に難しくなり、生活用品や産業で使うすべての部品などを、国内でつくらなければならなくなったのです。戦争のために鉄が必要とされ、大学で、鉄の研究をしていた光太郎たちのもとには、多くの質問や注文がまいこんできました。さらに、飛行機の部品に必要な強い磁石鋼を新たに作ることを軍から依頼されました。

強い磁石鋼を作るためには、鉄やコバルトなどの金属の組み合わせやそれぞれの金属の配合を考えなけ

物理学…物の性質や運動、熱・光・電気・音のはたらきなどについて研究する学問。

留学…外国で勉強すること。

磁石鋼…鉄を強化した物。

ればなりませんでした。

その組み合わせは何百万通りにもなります。すべてを試していたのでは、完成まで何十年かかるかわかりません。しかし、ここで、光太郎が今までの実験で得た知識が役に立ちました。今まで使われていたタングステン磁石鋼の配合を参考にして、ある程度配合をしぼることができたのです。あとは、実際に作ってみるだけです。

光太郎たちはせまい部屋で、炉の温度を千四百度、千五百度と上げ、実験をしていきました。あまりの暑さに、全身から流れ出る汗はふいてもふいても次から次へとしたたり落ちました。

「これはたまらない。裸になっても暑い。」

「そうだ、消防服を着ればいいのではないか。」

こうして、光太郎たちは消防服を手に入れ、水をかけながら毎日実験に取り組んだのでした。

ある日、めずらしくかぜをひき熱が続いたために、家で寝ていた光太郎のもとに、共同研究の仲間である高木が、完成した磁石鋼を持ってかけつけました。

「やっとできたかもしれない。」

高木は、その磁石鋼を一本、二本と机にていねいに置きました。その様子を、光太郎は身を乗り出し、目をかがやかせて見つめました。すでに置かれた磁石鋼の間に三本目を置いた、その瞬間でした。

クルッ、クルッ、カチャッ。

両側の二本の磁石鋼が勢いよく回転して真ん中の一本に吸いつけられたのです。

「おぉ。これは強い。」

当時における、世界最優秀の磁石鋼の誕生の瞬間でした。光太郎はこの磁石鋼を「ＫＳ鋼」と名づけました。

炉…金属などをとかす装置。

ＫＳ鋼…磁石鋼の一種で飛行機などに使用。

「ＫＳ」とは、光太郎の研究に資金を出してくれていた住友吉左衛門のイニシャルです。

光太郎が住友吉左衛門への感謝をこめて名づけたのです。このＫＳ鋼は、当時使われていた磁石鋼の四倍の強さをもっていました。

「実験を続けよう。もっとすごい力をもつものができるかもしれない。」

光太郎と高木は、夜がふけるまで熱っぽく語り続けたのでした。

実験室の光太郎
（公益財団法人 本多記念会蔵）

実験や研究を重ね、ＫＳ鋼をはじめとした多くの発明をした光太郎は、いつしか「世界の本多光太郎」として有名になっていきました。日本人はもちろん、外国人も光太郎が「鉄」における世界で最も優秀な学者であると認め、光太郎を「鉄の神様」と呼びました。多くの科学者たちが指導を求め、宮城の地、「東北大学金属材料研究所」で研究を続けている光太郎のもとを訪れるようになりました。

光太郎は、八十四歳で亡くなるまで、自分が学んだことや自然を解き明かす方法などを、多くの人におしみなく伝えました。仙台を第二のふるさととし、自らの「志」を果たした光太郎は、今でも世界の人々からたたえられています。

本多 光太郎

本多 光太郎は、明治三（一八七〇）年、愛知県に生まれた。東京帝国大学理科大学に進学後、外国へ留学して磁気理論を学んだ。その後、東北帝国大学理科大学の教授となり、世界最強と名高いＫＳ鋼（磁石鋼）を作り「世界の本多光太郎」といわれた。その功績から、昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれた。

土井晩翠 ―新しい詩の世界を開く―

春高楼の花の宴
めぐる盃影さして
千代の松が枝わけ出でし
むかしの光いまいづこ

【歌詞の意味】
春には、もとここにあった城の中で、にぎやかな花見の宴が行われたにちがいない。はずむ声、笑い、酒をくみかわすさかずき…。そして、城壁の大きな松の枝あいからは、月の光がさしこんでいたであろう。そんな昔のおもかげは、今はどこへいったのだろうか。

仙台市を眼下に見下ろす青葉城址には、郷土が生んだ詩人、土井晩翠の名作「荒城の月」の詩碑があります。この詩は明治三十一（一八九八）年上野の東京音楽学校（現在の東京芸術大学）から頼まれて作られたものです。滝廉太郎により曲がつけられ、時代を越え人々に歌いつがれています。

青葉城址の「荒城の月」詩碑（仙台市文学館蔵）

晩翠は、明治四（一八七一）年、仙台市北鍛治町（現在の青葉区木町通）で質屋を営む、土井林七の長男として生まれ、名前を林吉といいました。小さいころから、祖母に和歌の手ほどきを受けたり、父親から八犬伝などの物語を聞いたりして育ち、本を読むのが好きな子どもでした。

小学校の授業で、中国の歴史物語『十八史略』を学ぶと、難しい本にも興味をもち、夢中になって

質屋…お客さまがもってきた着物などの品物をあずかりそれと交換にお金を貸す商売。

和歌…古くから日本にある定型詩。主に五七五七七の句からなる。

八犬伝…江戸時代後期に滝沢馬琴によって著された本。

読むようになりました。その勉強ぶりは、先生方をも驚かせるほどでした。

「本には、ぼくの知らないたくさんの知識がつまっています。もっともっとたくさんのことを知りたくてたまりません。先生、ぼくは、中学（現在の高校）に進んで、学問を学びたいのです。」

林吉は、真剣なまなざしで自分の夢について語るのでした。

十三歳で小学校高等科（現在の中学校）を卒業した林吉は、いよいよ中学校への進学を本気で考えるようになりました。ところが、祖父から商売をするのに学問などは必要ないのだから、中学などに絶対やってはならないと、強い口調で言い渡されてしまった父は、祖父のいいつけにそむくことができず、林吉にそのことを告げるしかありませんでした。

父に説きふせられた林吉は、質屋の店先で見習いとして働くことになり、毎日、お客さんを相手にしたり、品物を倉から出し入れしたりする仕事にあけくれました。しかし、林吉は、『自由の燈』という新聞やその当時発刊されたばかりの『新体詩抄』という本をいつも大事にたずさえていました。少しの時間を見つけては、ひとみをかがやかせ、未来に夢をもちながら、新しい形の詩を口ずさむのでした。『新体詩抄』には、西洋の詩を翻訳したものもありました。林吉は、西洋の文学や英語にも興味をもち始め、英語の通信教育も始めました。見習いの仕事をしていても、学ぶことはやめませんでした。

十六歳のころ、林吉は、このまま質屋の主人としての仕事をずっと続けていくかどうかを考えていました。そんなとき、すぐ近くの仙台の国分町に「仙台英語学校」ができることを聞きました。当時としてはめずらしい英語を学ぶ学校で、働きながら学ぶことができたのです。しかも、英語学者として有名な齋藤秀三郎先生が教えてくれるという話を聞くと、林吉はいてもたってもいられませんでした。店で品物を並べているときも、重い荷物を運んでいるときも、頭の中は英語学校のことでいっぱいでした。

新体詩抄…伝統的な短歌や俳句に代わる新しい詩型を提示した詩集。

翻訳…ある国のことばや文を日本語に直すこと。

英語学者…英語に関する学問を研究する人。

いったんは父にしたがった林吉でしたが、胸に燃える学問の灯はとうてい消すことができなくなっていました。

林吉は、ある夜、思い切って父と祖父の前に正座して話を始めました。

「わたしは、どうしても英語学校で勉強したいのです。店の手伝いもしますから、通わせてください。」

祖父は、ふきげんな顔をしながらいいました。

「お前が跡をつがなければ、この質屋はどうなるんだ。」

「お父さんがじょうぶなうちは、自分の好きな学問をしてもよいのではないですか。」

しばらく沈黙が続きました。やがて、父が口を開きました。

「店での修業に努めながら、合間を見ては本を読むおまえの姿を見ていたよ。しかたない。お前がどうしても学問をしたいという気持ちはわかった。」

父の言葉を聞いた祖父も、

「よかろう。ただし、中途半ぱな気持ちではいけないぞ。」

と、ついに進学を許しました。

林吉は英語学校での授業を思いうかべ、自然と笑みがこぼれました。

喜びいさんで通学し始めた林吉は、夜中まで机の前に座っていることがよくありました。マコーレーの『フレデリック大王論』や、ビクトル・ユーゴーの伝記などに心をうばわれ、英雄や文学者の面影を心に描きました。あれこれ想像していると、時間のたつことも忘れてしまうほどでした。

その後、仙台にできた第二高等中学校（現在の東北大学）に十八歳で入学し、学問への情熱をますます燃やしました。

さらに、校友会雑誌に詩をのせる機会を得て、ペンネームを晩翠としました。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科に進み、勉強のかたわら、雑誌『帝国文学』の編集委員となり、次々と詩を発表し、堂々として力強い晩翠の詩は評判になりました。晩翠は、日本を代表する詩人となり、『新体詩』と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残しました。

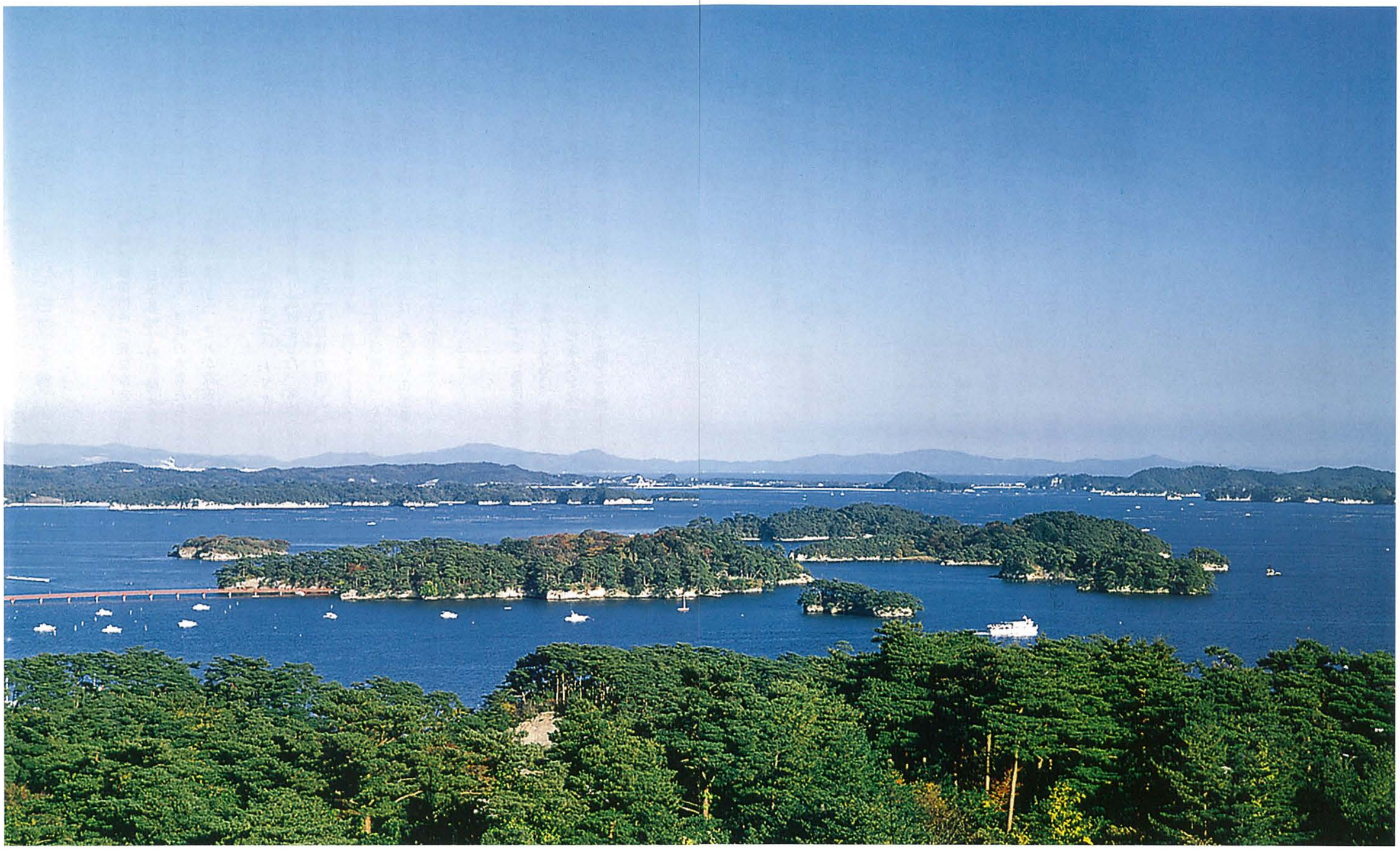
詩人として成功した晩翠は、明治三十三（一九〇〇）年、仙台にもどり母校である第二高等学校（現在の東北大学）の英語の教授になりました。また、晩翠は外国文学の翻訳を行ったほか、多くの校歌の作詞を手がけました。仙台市立立町小学校の校歌には「努めて倦まず身を立てて国と民のためつくせ」（途中であきらめることなく努力を続け、人々のためにつくしなさい）という歌詞があります。このような生き方を語りかける晩翠はたくさんの市民に慕われました。

現在も、「荒城の月」は多くの人に歌いつがれています。

青年期の土井晩翠（仙台市文学館蔵）

土井晩翠

土井晩翠（土井林吉）は、明治四（一八七一）年、仙台市に生まれた。東京帝国大学（現在の東京大学）英文科を卒業後、島崎藤村と並ぶ詩人として注目され、「新体詩」と呼ばれる新しい詩の確立に大きな功績を残した。昭和二十四（一九四九）年に仙台市名誉市民に選ばれ、文化勲章も受章した。代表作に『天地有情』がある。



先人も見た風景　わたしたち｜が守り続ける風景(松島町)

伊達 政宗 ―仙台藩を豊かな地に―

政宗は戦国時代に生まれました。当時は織田信長や豊臣秀吉、徳川家康といった人物が天下統一をなしとげようとして、日本各地で戦が絶えない時代でした。東北の大名伊達家の長男として生まれた政宗も、当時の大名たちがそうであったように、領地を広げ天下を取りたいと願いました。それが政宗の夢でした。

政宗は十五歳で初めて戦を体験して大いに手柄を立て、わずか十八歳で伊達家の当主となりました。その後も各地で激戦を繰り広げました。常陸（現在の茨城県）の有力な大名である佐竹氏などの大軍と戦った「人取橋の戦い」では、多数の敵を相手に政宗も自ら戦いに加わるなど、苦戦の末、何とかもちこたえて伊達の名を挙げました。続いて、最大のライバルである会津の蘆名氏との決戦となった「摺上原の戦い」では、激しい攻防の末に、蘆名氏を攻め滅ぼしました。さらに間を置かず二階堂氏も倒し、ついに政宗は、現在の山形県と宮城県の南部、福島県の大半を領地とする東北一の有力な大名となったのです。政宗は全国にその名を広く知られることとなりました。このとき政宗はまだ二十三歳、その目は天下を見つめ、夢は大きく広がっていきました。

伊達 政宗　騎馬像

しかし、そのころ、時代は大きく動いていました。すでに豊臣秀吉が全国の大半の大名をしたがえ、天下統一まであと一歩と迫っていました。秀吉にしたがっていない有力な大名は、関東の北条氏と奥州（東北地方）の伊達氏ぐらいでした。しばらくして、政宗に秀吉から書状が届きました。「北条氏を攻めるので、伊達家は豊臣家の家臣として私にしたがうように」とのことでした。（豊臣秀吉は強大だ、戦って勝てる相手であろうか。だが、ここで秀吉に屈したら自分の

手柄…功績をあげること。

当主…主（あるじ）。

豊臣秀吉…織田信長の家臣で、信長の死後、天下統一を果たしました。

書状…正式な手紙や文書。

夢はどうなる）秀吉と戦うべきか、それともしたがうべきか。政宗は書状を固く握りしめ口を真一文字に結び、静かに目を閉じました。何日も悩み続けました。そして、ついに政宗は伊達家を守るために秀吉にしたがうことにしました。

こうして伊達家は生き残ったものの、政宗は領地としていた福島県の大半を没収されました。さらにその後、生まれ故郷の山形県南部を取り上げられ、宮城県の岩出山や大崎、名取、亘理などの地域を代わりにあたえられて、現在の宮城県のほぼ一国と岩手県や福島県の一部を領地とすることとなりました。けれども、新たな領地には荒れ地も多く、豊かな土地を奪われたも同じでした。

それでも、政宗は「奥州に伊達政宗あり」を天下に示そうとの強い気持ちを持ち続けました。秀吉の命令で京（京都）に上ったときの伊達軍は、濃紺の布地に金色の日の丸の旗を高く立て、騎馬武者は黒の鎧と兜を身につけて金色に輝く太刀を腰に差し、槍を持った武者は金色の陣笠をかぶって朱塗りの太刀を腰に差すなど、目を見張るものでした。そのはなやかな姿を見た京の人々の間では、「伊達者」として長くうわさになりました。

再び政宗に天下を目指す機会が訪れたのは、「関ヶ原の戦い」のときでした。このころの政宗はまだ三十歳代、多くの有力な大名が年老いている中で飛び抜けた若さです。戦が長引けばチャンスはありました。しかし、「関ヶ原の戦い」はわずか一日で徳川家康の勝利で終わってしまいました。政宗は、

「天は徳川家康を選ばれたか……。これで天下は家康のものになるだろう。我が夢はここで終わりか。」

つぶやくようにそう言うと、ため息をつきました。

その後、政宗は自ら名をつけた仙台城に移り住みました。毎日、仙台城から眼下に広がる町や広瀬川、太平洋の青い波打ち際まで続く荒れ地を見渡しているうちに、政宗はしだいに考えこむようになりました。（夢は終わりと思ったが、伊達家は広大な領地を得て目の前に広がっている。これが自分が求めてきた藩の姿、天下ではないか）政宗は目を閉じ、さらに考えました。

（長年、自分の夢とお家のために突き進んできた。しかし、振り返ってみると藩の様子はどうだろうか。氾濫を繰り返

没収…取り上げられること。

濃紺…濃い青色。

陣笠…足軽が頭にかぶる三角の笠。

朱塗り…朱色にぬられていること。

関ヶ原の戦い…徳川家康と石田三成が全国を二つに分けて争った戦いで勝った家康が天下を握りました。

徳川家康…江戸幕府を開いた大名で、この後、長く江戸時代が続きました。

仙台城…現在の青葉城のこと。

氾濫…川の水があふれ洪水になること。

す広瀬川などの多くの川、目の前に広がる荒れた土地、そこで苦労して暮らす民の姿。自分がやるべきことは、まだまだあるのではないか）目は再び開かれました。政宗は前を見つめ、小さいがはっきりとした口調で言いました。

「夢が終わったなどと、考え違いをしていたようだ。我が夢は一つだけではない。」

その後の政宗の動きは早いものでした。かつて政宗は、ある僧を招き、国を治めるとはどういうことかをたずねたことがありました。そのとき、僧は、

「国づくりとは樹木で山々を埋めることである。」

と答えました。政宗はこの言葉を思い返していました。（樹木で山々を埋めるとはすなわち、山に樹木を植えて川の氾濫を防ぎ、水や水路をしっかり確保することだ。水を制する治水こそが、我が新たな夢の始まりである）

政宗は本格的に治水工事に取りかかりました。川村孫兵衛重吉という優秀な技術者も得ました。生活に必要な水を町のどこからでも取り入れることができるように、川の上流から水を引き町に水路を作りました。水は高いところから低いところへ流れるので、水路にはいつも水が流れるようになりました。この用水が、城下町仙台を流れる四ツ谷用水と呼ばれるものでした。

政宗はさらに、川の流れる道筋を変える大工事を行うよう命じました。この事業はその後も引きつがれ、政宗の跡をついだ藩主は、河口に大きな船も入ることのできる港を作らせたり、石巻から松島湾を通って阿武隈川の河口まで続く運河を作らせました。その結果、海が荒れても船が安心して荷物を運ぶことができるようになりました。また、少ない人手でも一度に大量に米を船で運ぶことができるようになり、その米を江戸（東京）に運んで売ることができるようになりました。政宗の先見の明は、後の仙台藩の発展につながっていったのです。

また、政宗は防風林を作ることも命じました。各地から良質の松や杉の苗木を取り寄せ、植林も行いました。松林や杉の林は水源の保護にもつながり、成長した木々は建築材料として江戸に運ばれることで、藩の貴重な資金になりました。さらに、政宗は仙台城下の道を碁盤の目のように作りました。これは城を敵から守るため、簡単には城にたどり着けないよう複雑な道を作るのが当たり前だった当時の城下町としては、とても考えにくいことでした。

民… 藩の人々。

僧… この僧は曽洞宗三国山洞仙寺（石巻市）住職・良悦と伝えられています。

運河… この運河は現在、貞山運河（貞山堀）と呼ばれています。

先見の明… 先を見通す力、能力。

しかし、商工業の発展のためには、まっすぐで便利な道はとても助けになるものでした。すでに政宗の目には戦などではなく、もっと別の大きな夢が見えていたのでしょう。城の町や村の姿はこうして大きく変わっていったのです。

現在、宮城県は米所として全国的に有名になりました。広瀬川の流れと美しい風景は人々の心をなごませ、「杜の都」仙台市にはけやきが立ち並び、青葉祭りや七夕祭りには毎年多くの人が宮城県を訪れています。今の宮城県の基礎を作ったのは、まぎれもなく伊達政宗です。政宗の夢は大きく開き、実を結んだのでした。

伊達政宗はこの他、味噌づくりも奨励しました。戦のときの食糧として味噌が重宝されたこの時代、気温が高く暑い夏でも仙台藩の味噌は味が良い上に変質しないと評判でした。政宗は、城下町と江戸の伊達藩領内にそれぞれ大規模な味噌づくりのための施設を建てました。その場所（仙台市青葉区川内大工町　仙台第二高等学校正門横）には現在石碑が建てられています。石碑には「仙台みそは藩祖伊達政宗公が城下花壇に御塩噌蔵を設け（中略）後に江戸市中でも一般にはらい下げられ、仙台みその名が広まった」とあります。

仙台みそ発祥の地 石碑

伊達 政宗

伊達 政宗は、永禄十（一五六七）年、米沢城主伊達輝宗の長男として生まれた。十七歳で伊達家十七代の当主となった。政宗は戦国時代を力強く生きぬいて、仙台城（青葉城）を築き、ついには仙台藩六十二万石の初代藩主となった。その勇壮な戦いぶりと、幼少時代にわずらったほうそう（天然痘）により片目を失明したことから、後に「独眼竜」と呼ばれた。

支倉　常長　―粘り強く役目を果たす―

慶長十八（一六一三）年十月二十八日、石巻の南にある牡鹿半島の月浦から一せきの船が出航しようとしていました。サン・ファン・バウティスタ号という大きな洋式の帆船です。これからこの船に乗って支倉常長は、太平洋を渡り、遠くメキシコやスペイン、ローマへと旅立つのです。当時、日本人が太平洋を渡るのは、命がけの大冒険でした。

浜では大きな声があがり、船の乗組員たちも手すりから身を乗り出して、激しく手を振りました。常長は、主君伊達政宗から大切な手紙を預かっていました。

宮城県慶長使節船ミュージアム内に係留されているサン・ファン・バウティスタ号

> わたしたちは、メキシコやスペインのみなさんと仲良くなり、自由に船で行き来できるようになりたいと思っています。また、キリスト教のすばらしい教えを、もっと深く学びたいと考えています。くわしくは、わたしの使いとして支倉常長を送りますので、交渉してください。
>
> 奥州仙台藩主　伊達政宗

手紙は、スペイン国王とローマ法王にあてたものでした。

今回の旅の案内役であるスペイン人の神父ルイス・ソテロは、常長のとなりに並び、不安げに声をかけました。

「常長殿、政宗様はスペインやメキシコの進んだ文化を、仙台に広めたいとお考えですね。でも、今、日本は、スペインとの交渉に必要なキリスト教を禁じようとしています。とても難しい交渉になるでしょうね。」

帆船…帆をかけた船。

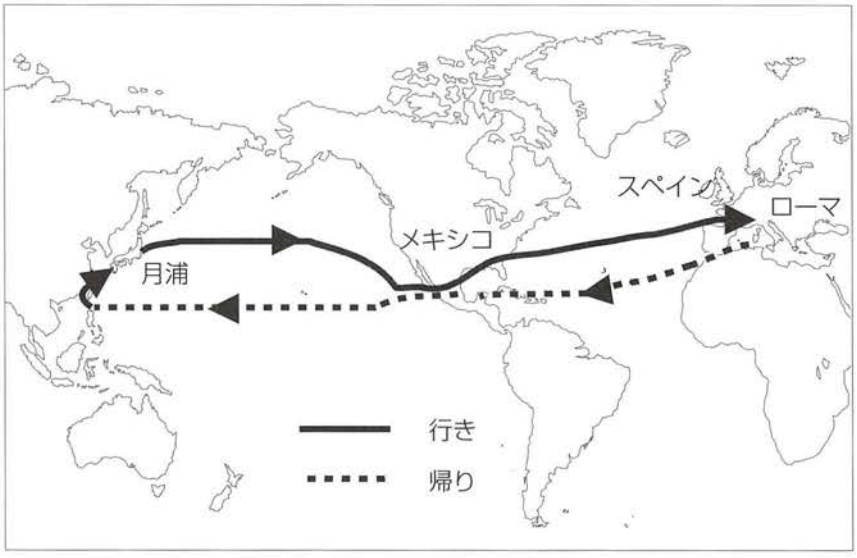
「うむ。外国の人々は、簡単にわれわれを受け入れてはくれないだろう。神父、仲立ちをよろしくたのむぞ。」

常長は、手紙をにぎりしめながら、しだいに遠くなる浜をじっと見つめていました。

太平洋の大海原に出たサン・フアン・バウティスタ号は、大きなあらしにもあいました。命がけのできごとの中、スペインの乗組員は、神にいのりながらもてきぱきと仕事を進めていました。常長はスペインの人々の進んだ技術と、心を強く支えているキリスト教の力を感じながら、その様子を真剣なまなざしで見ていました。

月浦から出航し、およそ二か月がたったころ、バウティスタ号のまわりに海鳥がふわりとよってきました。いよいよ見知らぬ国に入ります。ここから外国との交渉が始まるのです。

使節団の一行は、アカプルコにバウティスタ号を残し、陸地を通ってメキシコ市に移動しました。メキシコ市に着いた常長は、副王に会うことができました。常長は、政宗の考えを熱心に説明し、協力してくれるようにたのみました。しかし、副王は、なかなか協力すると約束してはくれませんでした。遠く日本から命がけで海を渡ってやってきたのに、どうして協力してくれないのだろう。信じてくれていないのか。ここで旅が終わってしまうのではないか。常長は、歯がゆい気持ちでいっぱいになりました。けれども、自分にこんな大役を任せてくれた政宗の顔を思い出しながら、何度も何度も宮殿に足を運び、根気強く使節の目的を説明しました。



使節団…主君（ここでは殿様）の命により、派遣された使者たち。

副王…王の次の位の人。

常長がしんぼう強く交渉したことで、副王は、使節団がヨーロッパに行き、直接スペイン国王に会うことができるように取り計らい、さらに旅の資金も援助すると約束してくれました。常長の思いが一歩前進した瞬間でした。

しかし、その後も苦労の連続でした。常長はスペイン国王フェリーペ三世に会うまで、さらに約四十日も待たせられました。その間、常長はいらいらしてくる気持ちを押さえながら、どのように交渉すれば、国王の心を開くことができるか考えました。頭の中には、遠く日本にいる主君の顔や家族の姿、そして、これまでの旅で出会った人々がうかんでいました。あれこれと考えながら歩いているうちに、常長は街の教会の前に立ち止まりました。常長が目にしたのは、高い天井と大理石の太い柱、ろうそくの炎の向こうにたたずむキリストの像でした。その像は、悩み苦しんでいる常長自身を包みこむような優しいまなざしで見つめているようでした。常長は心を落ち着けて、自分の信じていくべきものは何なのか、自分の使命は何なのかを考え直し、心の糸をゆっくりほどいていくようにキリストの像を見つめ続けました。

長い間待たされた結果、常長はついにスペイン国王に会うことができました。国王を前にして、常長は、政宗の書状を堂々と読み上げました。さらに、次のようにつけ加えました。

「わたしは、国王様に見守られながら、キリスト教の洗礼を受けたいのです。これからもずっと、あなた方といっしょに神様を信じさせてください。」

常長は、自分もキリスト教の信者となると決心していたのでした。その後、常長はマドリードの教会で、国王フェリーペ三世の見守る中、キリスト教の洗礼を受けました。

「ドン・フェリーペ・フランシスコ・ファシクラ。これが、あなたの洗礼名です。」

聖歌隊が歌う祝いの歌が、美しいオルガンのひびきとともに常長の体にしみこんでいくようでした。また一歩、常長は、自分の思いを前進させることができました。ローマへ向かう使節団の足取りも軽く、行き先

洗礼…キリスト教で信者になるための儀式。

国宝 支倉常長像（仙台市博物館所蔵）

も明るくなってきました。

数か月後、使節団はいよいよローマに到着しました。高らかなラッパの音が鳴りひびく中、使節団は堂々とローマ市内を行進しました。刀を下げ、白馬にまたがった者、長刀やからかさを手にした者が続きました。常長は鳥や草花がししゅうされた白いはおりとはかまに身を包み、馬に乗って行進をしました。その和服姿は、ローマの人々の目をうばうほどあざやかでした。常長は、月浦を出航してから二年余りの長い旅の日々を思い起こしました。

ついに常長は、市内の宮殿でローマ法王に会うことができました。常長は、

「ここまでわたしたちを、無事に導いてくださった神に感謝します。」

と言いながら、ローマ法王に深く頭を下げ、政宗から預かった手紙を差し出しました。

宮殿を出た使節団の目には、うっすらと光るものがありました。自分の思いに近づいたことを感じた常長も、胸にこみ上げる熱いものを感じながら、どこまでも続く青く晴れたローマの空を見渡しました。

支倉 常長

支倉 常長は、江戸時代初め、仙台藩主伊達政宗の命令により、「慶長遣欧使節」として太平洋と大西洋を渡りスペイン、ローマへ向かった人物である。現在、出発した石巻市には、復元船サン・ファン・バウティスタ号が展示されている。

長刀…武士が使用していた、長い柄の先端に刃物がついている武器。

からかさ…竹に紙をはって油をひき柄をつけたかさ。

大槻　文彦　―本格的な国語辞書をつくる―

明治維新後の新政府にとって、わが国の近代化を進めるためにやるべき仕事は山ほどありました。中でも国語を統一することが大きな課題であり、そのためには、本格的な国語辞書を急いで作ることが必要でした。文部省（現在の文部科学省）は、さっそく高名な学者たちを集めて、辞書づくりに取りかかりました。しかし、議論ばかりでなかなか仕事が進みません。とうとう途中であきらめて、改めて若手の学者に任せることになりました。白羽の矢が立ったのが、当時仙台にできたばかりの宮城師範学校の校長をしていた大槻文彦でした。

文彦は、江戸時代後期の代表的蘭学者である大槻玄沢を祖父に、幕末期の開国論を指導した大槻磐渓を父に、弘化四（一八四七）年、江戸で生まれました。祖父玄沢は、現在の岩手県の南端に位置する一関藩の藩医でしたが、後に仙台藩の藩医に選ばれて江戸詰めとなり、以来大槻家はずっと江戸で暮らしていました。文彦が生まれたのは、玄沢が亡くなってから二十年も後のことですが、玄沢の洋学を取り入れようとする考え方は、磐渓を通して文彦に引きつがれ、文彦は英語をはじめとする洋学に通じていました。

日本語の本格的な辞書を作るには、まず、日本語が昔から現在まで実際にどのように使われてきたかを広く調べた上で、日本語の文法を正しく整理しなければなりません。そのためには、日本語と西洋諸国の言語とを比較し、日本語がどのような特徴をもっているかをしっかりとらえることが必要になります。

文彦は、今までだれもやったことのないこの仕事に、ただ一人で立ち向かったのです。明治八（一八七五）

白羽の矢…多くの人の中から、特にねらわれて選び出されること。

蘭学者…江戸時代に西洋の学問を研究した人。

年二月に始め、約四万語を収めた国語辞書の原稿ができあがったのは明治十九年三月。実に十一年の苦心の末でした。しかし、文部省はなぜか印刷に取りかからないまま時間がたっていきました。

明治二十一年十月、文部省から文彦がすべての費用を自分で負担するなら、この原稿を使って出版してもよいとの連絡が来ました。「この原稿を何とか世に出したい」文彦はそんな思いでさっそく私財をかき集め、出版に取りかかりました。

校正作業などで思わぬ時間がかかり、結局わが国初の五十音引き国語辞書『言海』全四冊の発行を終えたのは、二年半後の明治二十四年四月でした。前年の十一月には一歳の娘を、続いて十二月には妻を病気で亡くすという不幸にみまわれる中での完成でした。文彦は、足かけ十七年の道のりを振り返り、言海の奥書に「私の父(磐渓)がかつて祖父(玄沢)の戒めとして、事業というものはいい加減な気持ちで始めてはならない、決断して始めた以上はやりとげるまでは絶対やめないという精神がなければならないと語っていた。私は、常にこの戒めを胸に刻んできた」と書いています。さらに、これで辞書づくりが終わるのではなく、これからも改良に努めていくという決意をも述べています。

『言海』の稿本
(仙台第一高等学校)

この大仕事を成しとげた後、明治二十五年四月、文彦は新設された宮城県尋常中学校の校長に迎えられました。初代校長として学校の基礎固めに力を注ぎ、三年半ほどを仙台で過ごした後東京にもどりましたが、その後も文彦は宮城県に心を寄せ続けました。災害の際には義援金を

私財…個人の財産。

奥書…書物の最後に発行のいきさつなどを記した文。

稿本…手書きの原稿を写真にとって本にしたもの。

出し、旧仙台藩領出身の若者の育英事業に努め、仙台藩の歴史に関する本も数多く書きました。

大正元（一九一二）年、六十六歳の年に、東京の出版社のすすめで、いよいよ言海の増補改訂に取り組むことになりました。再び辞書づくりに没頭する毎日です。高齢でしだいに体力も衰える中、どこへ行くにも仕事を抱えていきました。このころ、ある人に出した手紙に「言海の改訂作業も、毎朝七時から少しの休みも取らず夜まで続けている。さすがに夜九時ともなると、七十五歳の身は疲れて倒れそうになる」と書いています。そして「この手紙を書く時間もおしいくらいだ」ともつけ加えています。

昭和三（一九二八）年二月、文彦は、言海の改訂作業の完成を見ることなく、八十二年の生涯を閉じました。文彦亡き後、兄の大槻修二や関係者が作業を引きつぎました。そして、昭和七年から『大言海』四巻が刊行され始め、最終の索引の部が出て完結したのが昭和十二（一九三七）年、作業を始めてから二十五年の月日が流れていました。

文彦は、これほどまで辞書づくりに打ちこむ理由について、ある本の中で「一国の国語は、外国に対しては一つの民族であることの証拠となり、国内においては同胞としての一体感を固めるものである。国語の統一は、国の独立の基礎であり、目印でもある」と書いています。つまり、文彦にとって辞書づくりは、明治という新しい日本の国づくり、文化づくりそのものだったのです。こうした使命感こそが文彦を一心に辞書づくりに、そして、近代国家にふさわしい日本語づくりに向かわせたのでした。

文彦の一念は、鎖国の時代にあっても西洋の情報を積極的にわが国に広め、日本変革の先駆けとなった蘭学者玄沢、開国論を強く主張し、常に日本という国の正しい進路を求め続けた漢学者磐渓、この三代をつらぬく志でもありました。

増補…書物の内容をおぎない増やすこと。

改訂…書物の欠点を直すなど内容を改めること。

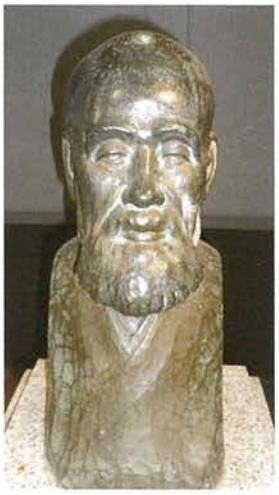
同胞…同じ国民、民族のこと。

変革…社会などを変えあらためること。

先駆け…同じ事を行っている人の先になること。

文彦が宮城県尋常中学校の初代校長を務めていたころの教え子たちが、後に文彦を慕って、東京で文彦を囲む会を作りました。大正十四年、この会が文彦の喜寿を祝って、文彦に木彫りの胸像をおくりました。その胸像について会の代表である吉野作造が由来を記しています。その中で「初代校長として来任された大槻文彦先生は、深く全校生徒の敬慕を受け、また先生が生徒を見るのも真に肉親の子弟をみるようでありました」と文彦の人柄を書いています。

昭和四十四（一九六九）年、この胸像がブロンズ製となって、宮城県尋常中学校の後身である仙台第一高等学校に建てられました。以来、この学び舎の中で、文彦がこよなく愛した郷土の若者たちの成長を、日々静かに見守っています。



ブロンズの胸像
（仙台第一高等学校）

大槻 文彦

大槻 文彦は、弘化四（一八四七）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。宮城師範学校（現在の宮城教育大学）校長を務めた後、日本初の国語辞書づくりに携わり、十七年をかけて約四万語を収録した『言海』を完成させ、自費で刊行した。その後も、辞書の改訂作業に一生をささげた。

喜寿…数え年七十七歳。

吉野作造…大正時代の政治学者、思想家、大正デモクラシー（民主主義など）を唱えた。

敬慕…尊敬され慕われること。

佐藤 清右衛門 ― 暴れ川と闘う ―

阿武隈川は、福島県南端の旭岳に源を発し、福島県内を南から北に貫いて宮城県丸森町に入り、亘理町の「鳥の海」付近で太平洋に注ぐ、全長二百三十九キロメートルのわが国で六番目に大きな川です。

江戸時代の初めに、今の福島県北部に位置する伊達郡と信夫郡が天領になり、そこで収穫された米を江戸に運ぶようになったことをきっかけに、阿武隈川を利用した舟運が盛んになりました。明治時代に入ると蒸気船も運行されるようになり、物資だけでなく人々の交通路としての重要度も高まっていきました。

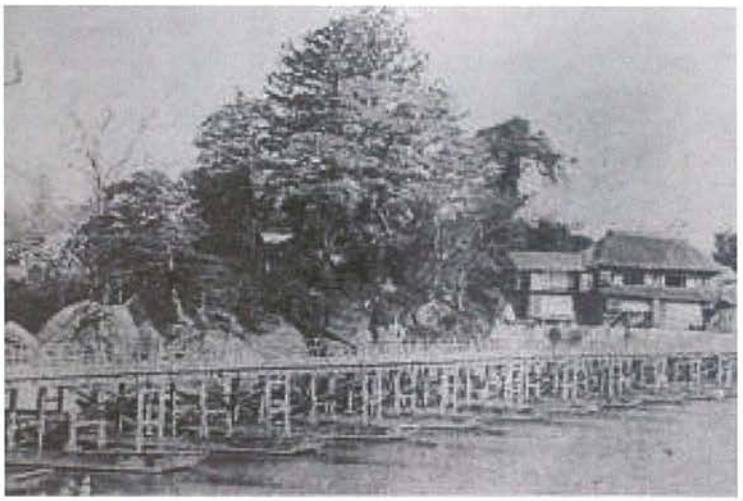
一方で、当時は川の両岸の往来は渡し舟で行われていたため、阿武隈川のように大きな川を渡るのは決して簡単なことではなく、特に大雨が降った後は水が増え何日も渡し舟が止まり、人々が困ることもしばしばでした。

明治二十四（一八九一）年、丸森村（現在の丸森町）の二瓶廉吉は、阿武隈川を挟んだ対岸の舘矢間村（現在の丸森町）との間に橋をかけようと立ち上がりました。両村の有力者に呼びかけた結果、二瓶を含む十八人がお金を出し合って隈共社という会社を設立し、この会社が橋を建設することになりました。いろいろと研究した上で、「舟橋」という方式を採ることになりました。これは、両岸に太いロープを渡し、このロープにつないで何艘もの舟を並べ、その舟の上に橋脚を立てて橋を通すというものでした。

天領…江戸幕府が直接治めた土地。

舟運…舟による交通や輸送。

橋脚…橋を支えるはしら。



完成した舟橋（丸森側から見たながめ）

工事は明治二十四年十二月に始まり、翌年五月に完成しました。地元の人々はこれで安心して生活できると、それはたいそうな喜びようでした。

この舟橋は、通行する人から橋銭をもらい、それで必要な経費をやりくりするものでした。こうした会社の経理関係の仕事を引き受けたのが、舘矢間村の住人佐藤清右衛門でした。

清右衛門は、当時三十歳。隈共社の中では若手でしたが、熱心に仕事に取り組み、周囲の人々から厚い信頼を集めていました。いつしか会社の経営に深くかかわるようになっていきました。

阿武隈川は、昔から「暴れ川」と言われたように、舟橋ができた後もたびたび洪水を繰り返し、幾度となく橋の修復が必要になりました。橋の完成から十五年後、明治四十年八月の洪水で、とうとう橋を支える舟ですべて流され、また、川の流れも大きく変わってしまいました。このため、舟橋の復旧をあきらめ、二年後にようやく木橋として再建することができました。しかし、その後も台風や大雨による被害が後を絶ちませんでした。

このような果てしない自然との闘いが続く中で、橋銭のわずかな収入に対して、度重なる橋の修繕や建て替えで莫大な出費を強いられたことから、隈共社を作った人たちも「我々の力で阿武隈川を相手にするのは無理だ」と、一人また一人と手を引いていきました。さらに、明治四十四年秋に隈共社

橋銭…橋を通行するための料金。

の発起人であった二瓶廉吉が亡くなると、その後は、事実上、清右衛門一人で一切を切り盛りしなければならなくなりました。

それでも清右衛門はあきらめず、

（ここでやめるわけにはいかない。人々のために自分が最後までやるしかない）

と、橋の経営を続けました。当時の清右衛門のあまりに一徹な姿勢に、清右衛門と親しい人たちの間でも、「清右衛門に金を貸してはならん」と言い合ったということです。

こうして、独力で橋を維持するために多くの私財を投じ、様々な苦労を重ねた末、清右衛門は大正七（一九一八）年に五十七年の生涯を閉じました。その五年後、橋は地元の要望を受けて県が管理することになり、さらにその六年後、鉄橋に建て替えられ、丸森橋と呼ばれることになりました。清右衛門が亡くなったあと、鉄橋が完成するまで約十年。清右衛門の一念が通じたのか、この間阿武隈川には珍しく、大きな水害は発生しませんでした。当時の最新の技術で建設されたこの鉄橋は、地元の人々から「モダン橋」と親しまれ、昭和、平成の時代を通して八十年以上にわたり、人々の安全な生活と地域の発展に貢献しました。

現在丸森町内を走っている国道一一三号は、新潟県、山形県、宮城県、福島県を横断して日本海と太平洋をつなぐ北日本の大動脈です。この道路が、福島県、宮城県を縦断する阿武隈川とただ一か所交わるのが丸森橋です。

平成二十四（二〇一二）年五月、この丸森橋の約一キロメートル下流に、「丸森大橋」が完成しました。長さ五百五十六メートル、幅十五メートルと、これまでの橋とは比べものにならない大きさです。

一徹…真剣に取り組むこと。

一念…強い思い。

大動脈…中心となる道路。（人間の大動脈の役割からのたとえ）。

今後は、丸森橋に代わり、丸森大橋がさらに大きな役割を果たしていくことが期待されています。この橋の完成は、時代に合った新しい橋をという地元の人々の願いが実現したものです。清右衛門の生涯をかけた思いがより確かな形で実を結んだともいえます。

丸森町中心部の小高い丘に、神明社という神社があります。この境内の一角に、隈共社の歴史を記した記念碑が建てられて、すでに百年ほどになります。いまこの碑のちょうど正面の方向に、丸森大橋がその美しい姿を見せています。十八人の隈共社を作った人々はもとより、陰で橋の経営を長年支えた佐藤清右衛門は、郷土の発展になくてはならないこの新しい橋の完成を、心から喜んでいることでしょう。

隈共社記念碑（神明社）

佐藤 清右衛門

佐藤 清右衛門は、文久元（一八六一）年、現在の丸森町舘矢間に生まれた。「隈共社」という会社に入り、阿武隈川両岸を結ぶ舟橋の経営に携わった。度重なる水害や修理で経営が難しくなったが、多くの私財を投じた後、あきらめずに橋を守った。この橋は、清右衛門の死後（宮城県が舟橋の管理を引き受け）鉄橋に姿を変え、現在「丸森橋」として地域交通の要となっている。

みやぎの先人 １０１人

☆ 自分が興味をもった人物をもっとくわしく調べてみましょう。
- ○ 自分が住んでいる地域で活躍した人物
- ○ 興味をもった分野で活躍した人物
- ◎ 図書室やインターネットで調べる。
- ◎ 博物館や資料館，現地に実物を見に行く。

☆ 調べた人物についてまとめてみましょう。
- ○ レポートにまとめる
- ○ 年表にまとめる
- ○ 新聞にまとめる
- ◎ 自分が書きとめたメモやカードをもとにしてまとめ方を工夫してみましょう。

北部エリア

江戸時代
- ◎芦東山（近代刑法思想）
- ◎慶念（児童福祉の祖）
- 菅原屋篤平治（慈善事業）

明治・大正時代
- ◎及川甚三郎（実業家）
- ◎鎌田三之助（品井沼干拓）
- 永澤才吉（浄水施設の建設）
- ◎二階堂トクヨ（日本女子体育大学創立）
- 千葉卓三郎（五日市憲法草案）
- 加藤きん（看護婦）
- 遠藤速雄（農村画家）
- 及川平治（自由主義教育）
- 千葉あやの（藍染工芸家）
- 吉野作造（民本主義）
- ◎佐々木君五郎（江合川の治水）

昭和時代
- 齋藤眞（脳神経外科医）
- 白鳥省吾（詩人　校歌の作詞）
- 石ノ森章太郎（漫画家）
- 佐藤忠良（彫刻芸術）
- 三神泉（光学天体望遠鏡の開発）

南部エリア

江戸時代
- ◎河村瑞賢（海運と治水）
- ◎支倉常長（慶長遣欧使節団）
- ◎片平観平（蔵本大堰改修工事）

明治・大正時代
- 尾形安平（鉄道普及の努力）
- ◎佐藤清右衛門（丸森橋架橋）
- ◎高山開治郎（一目千本桜の植樹）
- 真柳善四郎（亘理吉田村初代村長）
- 毛利萬之介（角田の農業の向上）
- 小野さつき（尋常高等小学校訓導）
- 大砲萬右衛門（相撲　横綱）
- ◎櫻井喜吉（医師　無料診療）
- 高橋勝蔵（洋画家）
- ◎高山善右衛門（角田上水の建設）
- 目黒平治（へき地教育の向上）
- 安田忠平（亘理吉田村の開墾事業）

昭和時代
- 谷津はつね（助産婦）
- 大沼萬兵衛（澄川用水）
- 久板栄二郎（劇作家　脚本家）
- 佐藤忠太郎（和紙伝統工芸）
- 只野文哉（電子顕微鏡開発）
- 三宅義信（重量挙げ選手）
- 大槻文平（日経連会長）
- 遠藤忠雄（白石和紙）
- 小室達（彫刻家）
- 佐藤基（医師　インシュリンの発見）
- 鈴木正夫（民謡歌手）
- 丹野丹治（用水路開拓）

東部エリア

江戸時代
- ◎大槻俊斎（天然痘の治療）
- ◎秀ノ山雷五郎（相撲　横綱）
- 山内甚之丞（養蚕技術の普及）
- ◎川村孫兵衛重吉（北上川の改修）
- 鈴木勘右衛門（上水道の整備）

明治・大正時代
- ◎落合直文（歌人　国文学者）
- 鈴木哲朗（遠洋漁業の近代化）
- ◎フランク安田（イヌイット民族の指導者）
- ◎内海五郎兵衛（北上川への架橋）
- 菊地雄治（塩竈港の築港工事）
- 遊佐快真（塩竈港の築港工事）

昭和時代
- 伊東信雄（多賀城跡の発掘）
- 小野寺久幸（国宝の保存・修理）
- 杉村惇（画家）
- 畠山重篤（環境教育）
- 青木存義（東京音楽学校教授）
- 小野末吉（へき地医療）
- 後藤桃水（民謡研究家）
- 高橋英吉（彫刻家）

仙台市エリア

江戸時代
- ◎青柳文蔵（図書館の開設）
- ◎伊達政宗（仙台藩　藩祖）
- ◎林子平（海防　海国兵談）
- 工藤平助（海防　赤蝦夷風説考）
- 谷風梶之助（相撲　横綱）
- ◎酒井げん（髪結いの名人）
- 玉蟲佐太夫（奥羽越列藩同盟）

明治・大正時代
- ◎大槻磐渓（藩校『養賢堂』学頭）
- 齋藤善右衛門（教育事業）
- 多田等観（仏教学者）
- ◎富田鐵之助（日本銀行初代副総裁）
- ◎本多光太郎（物理学者　鉄鋼の父）
- 太田連二（医師　黄熱病対策）
- 小野喜代子（女優　新聞記者）
- ◎一力健治郎（新聞社の創立）
- 沼倉吉兵衛（仙台白菜の開発）
- 長尾四郎右衛門（生出村村長）
- ◎大槻文彦（辞書『言海』作成）
- 川村幸八（サツマイモの栽培）
- ◎志賀潔（赤痢菌の発見）
- ◎土井晩翠（荒城の月の作詞者）

昭和時代
- 石田名香雄（東北大学総長）
- 安彦ひさ子（福祉事業）
- 鈴木碧（童謡詩人）
- 野副鉄男（化学者）
- 福井文彦（音楽家）
- 井上ひさし（作家）
- 大坂鷹司（児童福祉）
- 高橋功（陸軍軍医）
- 芳賀佐五郎（提人形作り）
- 山田富也（福祉施設の設置）
- 阿部次郎（哲学者　美学者）
- 梅原猛（哲学者）
- 末永喜三（稲の品種改良）
- 西澤潤一（半導体研究）
- 針生乾馬（陶芸家　堤焼）

先人が生きた時代

時代

武士の世の中　明治からの世の中　戦後の新しい世の中

江戸時代　明治時代　大正時代　昭和時代

年

1600　1700　1800　1900

日本の主なできごと

一六一五　武家諸法度が定められる
豊臣氏がほろびる（大坂夏の陣）
一六〇三　徳川家康が江戸に幕府を開く
一六〇〇　関ヶ原の戦いが起こる
一五九〇　豊臣秀吉が全国を統一する

一六四一　鎖国が完成する
一六三七　島原・天草一揆が起こる
一六三五　参勤交代の制度が確立される

一七七四　杉田玄白らが「解体新書」を出版

一七九八　本居宣長が「古事記伝」をあらわす

一八三七　大塩平八郎の乱が起こる
一八三三　百姓一揆と打ちこわしがたびたび起こる
天保の大ききん（〜三九）
一八二一　伊能忠敬の日本地図が完成する

一八六七　徳川慶喜が政権を朝廷に返す

一八五八　日米修好通商条約を結ぶ
一八五四　日米和親条約を結ぶ
一八五三　ペリーが浦賀に来る

一八七七　西南戦争が起こる
一八七三　地租改正が行われる
一八七二　徴兵令が出される
一八七一　学制が公布される
一八六八　藩が廃止され県が置かれる
明治維新　江戸を東京とする

一八九四　日清戦争（〜九五）
一八九〇　第一回帝国議会が開かれる
一八八九　大日本帝国憲法が発布される

一九一〇　韓国併合が行われる
一九〇四　日露戦争（〜〇五）

一九二五　普通選挙制度が定められる
一九二三　関東大震災が起こる

一九四一　太平洋戦争（〜四五）
一九三七　日中戦争（〜四五）
一九三三　日本が国際連盟を脱退する
一九三一　満州事変が起こる

一九四六　日本国憲法が公布される
一九四五　広島・長崎に原子爆弾が落とされる

一九五六　国際連合に加盟する
一九五一　日米安全保障条約を結ぶ
一九五一　サンフランシスコ平和条約を結ぶ

一九七二　日中平和友好条約が結ばれる
一九七二　沖縄が日本に復帰する
一九七二　札幌冬季オリンピック開催

一九六四　東京オリンピック開催

一九九八　宮城県沖地震発生

一九六五　八木山動物公園開設

一九六〇　チリ地震津波が三陸沿岸を襲う

一九四九　仙台市名誉市民となる
本多光太郎、志賀潔、土井晩翠が
被災戸数　一六四二戸、死者九一一人
一九四五　仙台市がアメリカ空軍の空襲を受ける

一九三七　本多光太郎が第一回文化勲章を受賞
一九三四　東北地方は大冷害となり、凶作となる
一九二九　気仙沼町に大火、焼失戸数　九〇二戸
一九二七　高山開治郎が五〇〇本の桜を白石川に植樹

一九二三　高山開治郎が七〇〇本の桜を白石川に植樹
一九一九　仙台市に大火、焼失戸数　六八九戸
一九一七　本多光太郎がKS磁石鋼を発明する
一九一〇　鎌田三之助が品井沼の排水路を完成させる
高山善右衛門が角田用水を完成させる
一九〇七　東北地方大凶作となる
一九〇五　一力健治郎が河北新報を創業
一八九六　三陸沿岸に大津波
一八九三　櫻井喜吉が船迫に無料日曜診療所を開設する
一八八二　内海五郎兵衛が北上川に橋をかける
一八七九　第一回宮城県議会開催
一八七八　第七十七銀行開設

一八七二　仙台県を宮城県とする
一八六一　仙台藩を廃し仙台県をおく
一八六八　奥羽越列藩同盟結成

一八三六　東北地方が大ききんとなる

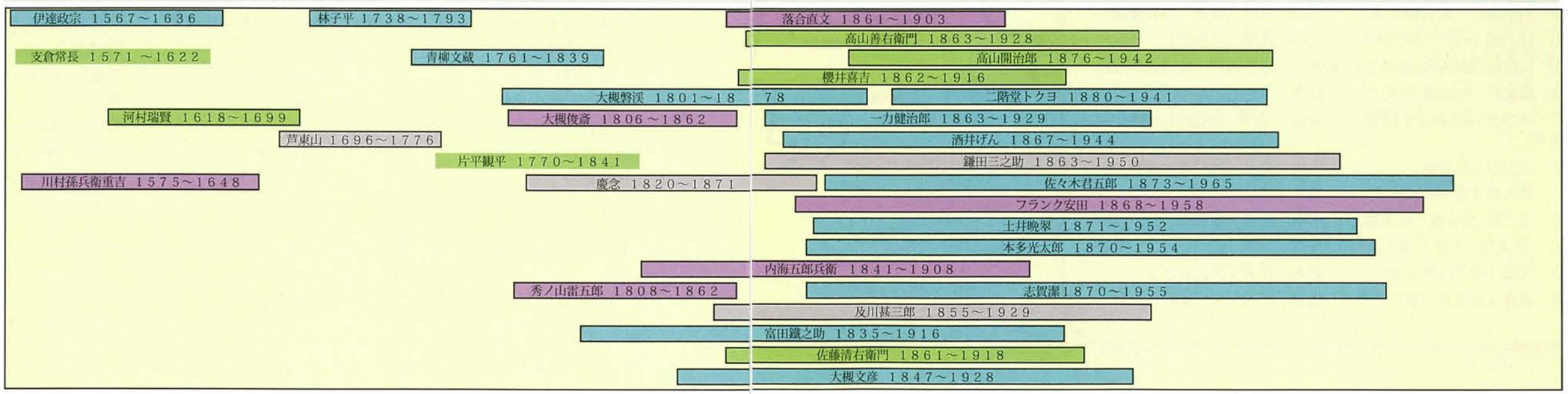
一八三一　青柳文蔵が仙台藩に蔵書や資金を提供
一八三〇　片平観平が隧道工事に着手

一七八六　林子平「海国兵談」を刊行
一七八三　ききんのため多くの死者が出る
一七七六　仙台城下に大火、焼失戸数　一五五三戸
一七五二　仙台城下に大火、焼失戸数　一五二七戸
一七三六　仙台藩が養賢堂をつくる
一七二七　仙台城下に大火、焼失戸数　一五二五戸
一七〇八　仙台城下に大火、焼失戸数　二一三五戸
一六七一　河村瑞賢が東廻り航路を拓く
一六六八　大地震発生
一六四六　大地震発生

一六二三　川村孫兵衛重吉が北上川改修工事に着手
一六一五　支倉常長が法王パウロ五世に謁見
一六一三　支倉常長がヨーロッパに向け月浦を出発
一六〇〇　伊達政宗が仙台城の築城を開始

宮城の主なできごと

宮城の先人（先人集に登場する人物）



【 監　修 】
横山　利弘（前関西学院大学　教授）　相澤　秀夫（宮城教育大学教職大学院　教授）

【 アドバイザー（50音順・敬称略）】
工藤　昌明　　澁谷　榮昭　　中山　一弥　　堀　　努　　松尾　隆治

【 作成委員（50音順・敬称略）】

阿部　陽介	加藤えり子	佐藤　修二	高野　貴美	三浦　祐子
一條　美奈	加藤　浩二	佐藤　博昭	髙橋　宏典	村田富美子
大友　　賢	狩野　孝信	佐藤美紀子	中川美津子	柳生　育恵
大友　　孝	鹿野　征美	神野　真理	成瀬　　聡	山田　明実
大西　　守	小林　伸一	鈴木　一道	樋口　英明	横山　高行
大沼あゆみ	西城　敏幸	髙砂　宏之	三浦　竜樹	和田　祐子
糟谷　明洋	佐藤　秀二			

【 協力者・団体（50音順・敬称略）】

阿部　和夫	大槻　　慧	日下　右門	齋藤　良治	佐々木治樹
鮎貝　文子	川村　貞之	日下　龍生	酒井　愛子	千葉　宗久
荒木　英夫	菊池　徳夫	斎藤　善之	坂本　和正	

芦東山記念館	角田市郷土資料館	普誓寺（石巻市）
芦東山先生顕彰会	学校法人北里研究所 北里柴三郎記念室	フランク安田友の会
石巻市立湊小学校	学校法人二階堂学園 日本女子体育大学	公益財団法人 本多記念会
一関市教育委員会	河北新報社	宮城県慶長使節船ミュージアム
一関市博物館	鎌田三之助記念館	宮城県仙台第一高等学校
一関市松川公民館	仙台市博物館	みやぎ登米カナダ友の会
一般財団法人佐々君治山報恩会	仙台文学館	涌谷町産業振興課商工観光室
大河原町中央公民館	東京教育研究所	亘理町立郷土資料館
大河原町さくらの会	日本銀行	各市町村教育委員会

【 題　字 】　髙橋　　仁（宮城県教育委員会　教育長）

デザイン・印刷 /（株）ドルック東北

みやぎの先人集「未来への架け橋」正誤表

※副読本に一部誤りがございましたので，関係者の皆様にお詫び申し上げ，下記のとおり訂正致します。

ページ	人物名	位置	誤	正
P.23	芦　東　山	2行目	現在の一関市	現在の一関市大東町渋民
P.26	〃	写真説明	無形録	無刑録
P.26	〃	あとがき1行目	一関市渋民	一関市大東町渋民
P.28	慶　　念	20行目	押さえきれなく	おさえきれなく（抑えきれなく）
P.58	及川甚三郎	19行目	押さえきれなく	おさえきれなく（抑えきれなく）
P.61	フランク安田	1行目	十歳のとき	十四歳のとき
P.66	秀ノ山雷五郎	5行目	しまいました。	しました。
P.78	林　子　平	8行目	次の年（1792）年	次の年（1792年）
P.79	青柳文蔵	1行目	一関市東町松川	一関市東山町松川
P.87	富田鐵之助	11行目	小鹿（こじか）	小鹿（ころく）
P.100	志　賀　　潔	6行目	北里柴三郎（きたざとしばざぶろう）	北里柴三郎（きたさとしばさぶろう）
P.107	土井晩翠	12行目	十八史略（じゅうはっしりゃく）	十八史略（じゅうはちしりゃく）
P.108	〃	18行目	齋藤秀三郎（さいとうしゅうさぶろう）	齋藤秀三郎（ひでさぶろう）

みやぎの先人集「未来への架(か)け橋」

発　行　宮城県教育委員会

〒980-8423
宮城県仙台市青葉区本町三丁目８番１号

平成25年３月発行

VEGETABLE OIL INK